

令和3年度

文部科学省 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業



国際フィールドワークを通じて持続可能な 国際社会を創る人材育成システムの構築 （研究報告書 第3年次）



令和4年3月

拠点校 筑波大学附属坂戸高等学校

管理機関 筑波大学附属学校教育局

はじめに

今年度も引き続き COVID-19 感染拡大の影響で、異例の一年となった。拠点校も連携校も通常授業から学校行事をはじめとする特別活動まで大きく制限され、その中で 2020 年度の苦難を教訓に、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に取り組んだ。

本事業の特色は、イノベーティブなグローバル人材の育成を目指し、高校生国際会議の開催や国内外の大学・企業・国際機関等と協働してネットワークを形成し、次世代の人材育成を念頭に置いたカリキュラムを開発することである。筑波大学は管理機関として、附属坂戸高等学校を拠点校に国内の 8 校と海外の 4 校を連携校とし、10 の協働機関と AL ネットワークを編成し、『国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築』を開発構想として、以下の 5 つを柱としたプロジェクトを設定し、取り組んできた。

- ① 附属坂戸高等学校（事業拠点校）での国内外フィールドワークを取り入れた体系的な探究型カリキュラムを開発する。
- ② 国内外の大学との連携を図り、留学生派遣と受入れの推進、先取り履修等の接続を視野に入れた高度な学習を可能にする学習環境を整備する。
- ③ 事業連携校とグローバル人材育成システムに関する情報交換と比較研究、教員研修も兼ねた合同海外フィールドワーク等により成果を検証する。
- ④ 筑波大学の特色である「オリンピック・パラリンピック教育」と「インクルーシブ教育」を通じたマインドセットを涵養し、国内外の活動や国際大会への参加を推進する。
- ⑤ 高校生 SDGs 国際会議を開催して成果を発表して共有し、社会に発信する。

最終年度となった本年度も、附属坂戸高等学校を拠点校に、高等部のある 4 つの学校（附属高等学校、附属駒場高等学校、附属視覚特別支援学校、附属聴覚特別支援学校）が連携校となり、高大連携のもとに筑波大学の国際展開力を大いに活用し、活動してきた。特に、11 月に附属坂戸を発信基地として開催された「第 10 回高校生国際 ESD シンポジウム」では、附属 11 校中 9 校から児童生徒、教員、保護者が参加するとともに、2020 年度に加盟した東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）を活用し、海外から約 200 校の高校及び大学から生徒・教職員が参加した。また、筑波大学附属学校教育局は WWL 全体の管理機関として、文部科学省との共催で、6 月 30 日に WWL・SGH ネットワーク連絡協議会を、12 月 19 日に全国高校生フォーラムをオンラインで開催した。全国高校生フォーラムの生徒交流会（テーマ別分科会）には全国から 117 校が参加し、筑波大学の大学教員の司会進行で 10 の分科会を開催した。

持続可能な世界を実現するために、地球上の誰一人として取り残さないために、SDGs では 17 のゴールと 169 のターゲットが定められている。本事業では、多くの高校がこれらを共通の探究課題として国内外の連携校とともに取り組んできた。今年度も、昨年度と同様に COVID-19 感染拡大が突き付けられ、環境や文化の異なる海外の人々と協働して国際的な社会問題に取り組む重要性が増大した。今後は、これらの諸課題に対する問題提起から解決を目指す探究過程を重視し、リーダーシップおよびフォローアップを発揮できる人材の育成に貢献していきたい。

（筑波大学附属学校教育局特任教育長補佐 濱本悟志）

目 次

第1部 令和3年度完了報告	3
I WWL コンソーシアム構築支援事業の構想概要と拠点校一覧（文部科学省の HP より）	4
II 令和3年度筑波大学 WWL 事業の完了報告書	5
第2部 実施報告	26
I 研究開発の概要および令和3年度の年間計画	27
1 筑波大学 WWL コンソーシアム事業の概要	28
2 5つの柱と AL ネットワーク	28
3 令和3年度の年間計画とコロナ禍での変更	30
II 附属坂戸高等学校（拠点校）での探究型カリキュラム開発	31
1 附属坂戸高等学校のカリキュラムの考え方	32
2 各プログラム・科目のカリキュラムにおける位置付け	33
3 各プログラムについて	33
III 附属坂戸高等学校（拠点校）での高大連携と高度な学習環境の整備	79
1 筑波大学教員による課題研究指導（令和3年度の事例）	80
2 筑波大学国際室及び東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）との連携	81
3 先取り履修を視野に入れた高度な学びの整備状況やその他の特徴的な取組	82
IV 国内外連携校との取組	83
1 国内連携校での海外合同フィールドワーク代替措置（中止）	84
2 全国高校生フォーラムでの連携	85
V 筑波大学附属学校群の特色を活かした 「オリンピック・パラリンピック教育」と「インクルーシブ教育」の推進	89
1 日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムの開催	90
2 共生シンポジウムの開催	92
VI 高校生国際 ESD シンポジウムの報告	93
1 大会概要	94
2 大会内容	95
VII 幹事管理機関としての活動の報告	102
1 WWL コンソーシアム構築支援事業・SGH ネットワーク連絡協議会の開催	103
2 全国高校生フォーラムの開催	107
3 ホームページでの情報発信と共有	115

第 1 部 令和 3 年度完了報告

(文部科学省に提出)

I WWLコンソーシアム構築支援事業の構想概要と拠点校一覧（文部科学省のHPより）

Society5.0をリードする人材育成に向けたリーディング・プロジェクト

令和3年度予算額
(前年度予算額)

2.5億円
1.5億円

文部科学省

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

事業概要

Society5.0をリードし、SDGsの達成を牽引するイノベティブなグローバル人材育成のリーディング・プロジェクトとして、国内外の大学等との連携により文理横断的な知を結集し、社会課題の解決に向けた探究的な学びを通じた高校教育改革や大学の学びの先取り履修等を通じた高大接続改革を推進する。

- ◆ 高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等とが協働し、高校生が主体となり、海外をフィールドにグローバルな社会課題の解決に向けた探究的な学びを実現するカリキュラムを開発。
- ◆ これまで訪問できなかった国の高校生や大学生等とのオンライン海外フィールドワークなど、世界規模で生じた豊かなオンライン環境を駆使したカリキュラム開発。
- ◆ 大学等と連携した大学教育の先取り履修（カリキュラム開発）により、高度かつ多様な科目等の学習プログラム／コースを開発。

WWLコンソーシアム

高校や国の枠を超えて、高校生に高度な学びを提供するAL（アドバンスト・ラーニング）ネットワークを形成した拠点校を全国に50校程度配置し、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築へとつなげる。

AL（アドバンスト・ラーニング）ネットワーク イメージ図

ALネットワーク

海外フィールドワークや国際会議の開催等により、プロジェクトが効果的に機能するよう国内外の連携機関とのネットワークを形成

管理機関

高等学校と連携機関をつなぎ、カリキュラムを研究開発する人材（カリキュラム・アドバイザー）等の配置

The diagram illustrates the AL Network structure. At the center is a box labeled '管理機関' (Management Organization) and '高等学校「カリキュラム開発拠点校」' (High School 'Curriculum Development Hub School'). This central hub is connected to a circular network of other institutions. The network includes: 'A高校連携校' (A High School Partnership School), '国内大学' (Domestic University), '海外大学' (Overseas University), '国際機関' (International Organization), 'B高校連携校' (B High School Partnership School), 'C高校連携校' (C High School Partnership School), and 'NGO等' (NGOs, etc.). Arrows indicate the flow of collaboration and information between these entities.

対象校種 国公立の高等学校及び中高一貫教育校

箇所数 22拠点（継続16＋新規6）
単価 900万円程度／拠点・年
期間 原則3年

委託先 管理機関（都道府県・市町村教育委員会、国公立大学法人、学校法人）等

委託 カリキュラム開発に必要な経費
対象経費（海外研修旅費、謝金、借損料、国際会議経費等）

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 カリキュラム開発拠点校一覧

No.	都道府県	学校種	カリキュラム開発拠点校	指定年度
1	北海道	私立	北海道学園札幌高等学校	令和3年度
2	埼玉県	国立	筑波大学附属坂戸高等学校	令和元年度
3	東京都	公立	東京都立南多摩中等教育学校	令和元年度
4	東京都	私立	渋谷教育学園渋谷高等学校	令和元年度
5	東京都	私立	富士見丘高等学校	令和2年度
6	新潟県	公立	新潟県立三条高等学校	令和3年度
7	石川県	国立	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校	令和元年度
8	長野県	公立	長野県上田高等学校	令和2年度
9	静岡県	公立	静岡県立三島北高等学校	令和元年度
10	愛知県	国立	名古屋大学教育学部附属中・高等学校	令和3年度
11	愛知県	公立	愛知県立千種高等学校	令和3年度
12	京都府	公立	京都府立鳥羽高等学校	令和2年度
13	京都府	私立	立命館宇治高等学校	令和元年度
14	京都府	私立	同志社国際高等学校	令和2年度

No.	都道府県	学校種	カリキュラム開発拠点校	指定年度
15	京都府	私立	京都学園高等学校	令和3年度
16	大阪府	国立	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	令和2年度
17	大阪府	公立	大阪府立北野高等学校	令和元年度
18	兵庫県	公立	神戸市立葺合高等学校	令和元年度
19	兵庫県	私立	関西学院高等部	令和元年度
20	奈良県	公立	奈良県立国際高等学校	令和3年度
21	岡山県	公立	岡山県立岡山操山中学校・高等学校	令和2年度
22	広島県	国立	広島大学附属福山中・高等学校	令和2年度
23	広島県	公立	広島県立広島国泰寺高等学校	令和元年度
24	愛媛県	国立	愛媛大学附属高等学校	令和2年度
25	福岡県	私立	中村学園女子高等学校	令和2年度
26	長崎県	公立	長崎県立長崎東中学校・長崎東高等学校	令和2年度
27	熊本県	公立	熊本県立熊本高等学校	令和2年度
28	宮崎県	公立	宮崎県立宮崎大宮高等学校	令和2年度

<カリキュラム開発拠点校の内訳>

国立：6校 公立：14校 私立：8校

※ハイライト部は、令和3年度指定（6校）

Ⅱ 令和3年度筑波大学 WWL 事業の完了報告書

筑大附企国第 21-27 号
令和 4 年 3 月 31 日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	茨城県つくば市天王台一丁目 1 番 1
管理機関名	国立大学法人筑波大学
代表者名	学長 永田 恭介 (公印省略)

令和 3 年度 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和 3 年 4 月 1 日 (契約締結日) ～ 令和 4 年 3 月 31 日

2 事業拠点校名

学校名 国立大学法人筑波大学附属坂戸高等学校
学校長名 田村 憲司

3 構想名

国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築

4 構想の概要

次世代のグローバル人材育成を念頭に、社会課題の発生している現場での「国際フィールドワーク」を積極的に取り入れた体系的な探究型カリキュラムを開発し、国際社会において文化の異なる海外の人々と協働して社会的問題に取り組んだ上で、問題提起から解決に至る過程でリーダーシップおよびフォローシップを発揮できる人材を育成するためのシステム構築を行う。

それらの成果を高校生が主体的に発表・共有の上、世界に発信する場として、国内外の連携校や国内外の大学・研究機関、ASEAN の国際機関・企業等とネットワークを形成後、国内外の高校生が一堂に会する「高校生 SDGs 国際会議」を開催する。さらに 10 年後、SGU として海外に 13 のオフィスを持つ筑波大学の世界展開力を活用し、附属学校群もアジアから世界にネットワークの輪を広げ、世界の舞台で活躍できるグローバル人材の育成システムの構築を目指す。

5 教育課程の特例の活用の有無 有「家庭基礎」を「グローバルライフ」として実施している。

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和3年4月1日～令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
WWL マネジメント会議の開催	本学附属学校教育局における構成員を中心に、AL ネットワーク全体の統括と調整のため、マネジメント会議を毎週実施											
WWL 調整会議の開催	事前準備、幹事管理機関取組（連絡協議会）との連携	第1回会議（メール会議）	事前準備		第2回会議（オンライン）	幹事管理機関取組（全国高校生フォーラム）との連携	全国高校生フォーラム参加生徒交流会の主催	事前準備	第3回会議（オンライン）	3年間の総括と今後の国際事業の検討		
WWL 運営指導委員会・検証委員会の開催	運営指導委員会・検証委員会構成員委員、本年度の WWL 事業の年間計画の COVID-19 感染拡大下での変更			事前準備、高校生 SDGs 国際会議における COVID-19 感染拡大下での調整対応等	委員会開催（オンライン）	オンライン国際交流への評価	3年間の総括と今後の国際事業への展開の検討					
附属学校国際教育推進委員会・オリンピック教育推進専門委員会の開催	全附属学校の取組として事前準備、第1回会議開催（オンライン）	COVID-19 感染拡大下での附属学校における国際教育・オリパラ教育と普及活動等の取組整理	第2回会議（オンライン）	拠点校・連携校（5校）の高校生 SDGs 国際会議および全国高校生フォーラムへの準備と参加	第3回会議（オンライン）	本年度の COVID-19 感染拡大下での取組の振り返り、自走での取組内容の検討	第4回会議（オンライン）					

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a. 管理機関による研究開発・実践の組織的な整備状況

WWL 事業での 5 つの柱となるプロジェクト（9～10 ページの b 参照）を円滑に遂行するため、以下のように担当者を配置し、組織を整備した。

① WWL マネジメント会議

当初の計画通り。毎週開催し、以下のメンバーで AL ネットワーク全体の統括と調整および幹事管理機関としての業務を行った。

- | | | |
|--------|--------------------|----------------|
| ・溝上智恵子 | 副学長・附属学校教育局教育長 | 管理機関担当部署総責任者 |
| ・雷坂 浩之 | 附属学校教育局次長（教授） | プログラムの立案と運営の統括 |
| ・北崎 哲章 | 附属学校教育局次長（事務） | 管理機関担当部署事務の統括 |
| ・梶山 正明 | 附属学校教育局教育長補佐（教授） | プログラムの立案と運営の統括 |
| ・濱本 悟志 | 附属学校教育局特任教育長補佐（教授） | プログラムの立案と運営の統括 |
| ・久米 弘行 | 東京キャンパス事務部企画推進課長 | 管理機関担当部署事務の統括 |
| ・市瀬 博史 | 東京キャンパス事務部主幹（企画推進） | 管理機関担当部署事務の副統括 |

② WWL 調整会議

以下の日程で会議を開催し、各議題について審議した。

- ・第1回会議（令和3年6月2日（水）～11日（金）メール会議）
議題：WWL 調整会議の設置要項および構成員の確認、令和2年度 WWL 事業の実績報告（拠点校および管理機関）、令和3年度年間計画の提示
- ・第2回会議（令和3年9月14日（火）オンライン会議）
議題：前回の議事録確認、筑波大学 WWL 事業全般の活動報告、附属坂戸高等学校（拠点校）の活動報告、連携校の活動報告、WWL 幹事管理機関の活動報告、全活動の今後の予定
- ・第3回会議（令和4年2月25日（金）オンライン会議）
議題：前回の議事録確認、令和3年度の COVID-19 感染拡大下での実践報告（筑波大学 WWL 事業全般、附属坂戸高等学校（拠点校）、連携校、幹事管理機関）、3年間の活動の総括、次年度からの活動計画

WWL 調整会議の構成員は、AL ネットワークの下で実施する 5 つのプロジェクトの計画、実施報告、自己検証を行うために、最終的に次頁のように決定して配置することとした。

令和3年度筑波大学WWL(拠点校:附属坂戸高等学校)調整会議構成員名簿

令和4年1月1日現在

所 属	職 名	氏 名	備 考	主な担当プロジェクト					
				①	②	③	④	⑤	
附属学校教育局	教育長	溝 上 智 恵 子	管理機関/事業統括者	○					新
	次長(教員担当)	雷 坂 浩 之	管理機関	○					
	次長(事務担当)	北 崎 哲 章	管理機関/事務統括者	○					新
	教育長補佐	梶 山 正 明	管理機関/事業推進者	○					新
	特任教育長補佐	濱 本 悟 志	管理機関/事業推進者 カリキュラムアドバイザー	○					
	准教授	飯 田 順 子	管理機関、特に成果検証	成果検証					
	講師	木 村 範 子	管理機関、特にカリキュラム	○					
	特任助教	久 保 尊 洋	管理機関/事業推進者 海外交流アドバイザー	○					新
人間系	教授	大 川 一 郎	成果検証	成果検証					
	助教	登 藤 直 弥	成果検証	成果検証					
国際局国際室	教授	森 尾 貴 広	国際ネットワーク/高度な学習の支援	○	○	○		○	新
教育開発国際協力研究センター	教授/センター長	磯 田 正 美	国際ネットワーク		○	○		○	
生命環境系 アドミッション・センター国際入試部門	准教授/部門長	野 村 名可男	国際ネットワーク/高度な学習の支援	○	○	○		○	
人文社会系	教授	青 木 三 郎	高度な学習の支援(SDGs 関連)	○	○	○		○	
システム情報工学系	教授	藤 川 昌 樹	高度な学習の支援	○	○			○	
附属坂戸高等学校	校長	田 村 憲 司	事業拠点校	○					
	副校長	深 澤 孝 之	事業拠点校	○					
	主幹教諭	中 臺 昇 一	事業拠点校、特に合同フィールドワーク (豪州)	○					
	教諭	建 元 喜 寿	事業拠点校	○					
	教諭	今 野 良 祐	事業拠点校	○					新
	教諭	吉 田 賢 一	事業拠点校	○					
	教諭	ラッセル スミス	事業拠点校	○					
附属高等学校	教諭	川 崎 宣 昭	連携校/合同フィールドワーク(豪州)、 国際会議			○		○	
	教諭	中 塚 義 実	連携校/オリパラ教育(クーベルタン・ ユースフォーラム)、国際会議			○	○	○	
附属駒場高等学校	主幹教諭	三井田 裕 樹	連携校/合同フィールドワーク(豪州)、 国際会議			○	○	○	
附属視覚特別支援学校 特別支援教育推進連携グループ	教諭	佐 藤 北 斗	連携校/特別支援関連、国際会議(附属視覚特別支援学 校高等部・附属聴覚特別支援学校高等部・附属桐ヶ丘特 別支援学校高等部)			○	○	○	
お茶の水女子大学附属高等学校	副校長	溝 口 恵	連携校/合同フィールドワーク (豪州)、国際会議			○		○	
東京学芸大学附属国際中等教育学校	副校長	雨 宮 真 一	連携校/合同フィールドワーク (豪州)、国際会議			○		○	

事務組織

所 属	職 名	氏 名	備 考	①	②	③	④	⑤
東京キャンパス事務部企画推進課	課長	久 米 弘 行	管理機関	○				
	主幹(企画推進)	市 瀬 博 史	管理機関	○				
	係長	春 名 禎 貴	管理機関	○				
	専門職員	佐 藤 兆 昭	管理機関	○				
	事務補佐員	高 田 智 子	管理機関	○				
	事務補佐員	山 村 潤 子	管理機関	○				
	事務補佐員	吉 田 亜樹子	管理機関	○				

③ 附属学校国際教育推進委員会

以下の日程で会議を開催し、各議題について審議した。

・第1回会議（令和3年5月25日（火）オンライン会議）

議題：令和2年度の総括と令和3年度活動計画（国際教育、イングリッシュルーム）、附属学校国際教育推進委員会報告書（第12集）の報告、WWLコンソーシアム支援事業の令和2年度の総括と令和3年度の計画、附属学校「グローバル教育の世界地図」について、委員会開催日程と議題について

・第2回会議（令和3年9月14日（火）オンライン会議）

議題：令和3年度イングリッシュルーム経費配分案、令和3年度国際教育・イングリッシュルームの活動について、WWLコンソーシアム構築支援事業について、附属学校国際教育推進委員会報告書（第13集）の作成について、附属学校「グローバル教育の世界地図」について、コロナ禍での留学や海外渡航について

・第3回会議（令和3年12月14日（火）オンライン会議）

議題：令和3年度イングリッシュルーム経費の執行状況について、令和2年度国際教育・イングリッシュルームの活動について、WWLコンソーシアム構築支援事業について、2021年度全国高校生フォーラムについて、附属学校国際教育推進委員会報告書（第13集）の作成について、「グローバル教育の世界地図」について、国際交流協定締結状況について

・第4回会議（令和4年3月1日（火）オンライン会議）

議題：令和3年度活動報告（国際教育、イングリッシュルーム）、令和3年度WWLコンソーシアム構築支援事業報告、3年間のWWL事業の総括と令和4年度以降の国際教育について

b 管理機関による関係機関との情報共有体制の整備状況

ALネットワークの下で5つのプロジェクトを実施したが、その情報伝達と共有のため、委員会による諸会議（COVID-19感染拡大防止のためメール会議およびオンライン会議を含む）を開催した。諸委員会については、当初の計画通り以下のように整備した。

① 附属坂戸高等学校での海外フィールドワークを取り入れた探究型カリキュラム開発

【研究部を中心にした校内推進委員会】随時開催

責任者：濱本悟志（管理機関カリキュラムアドバイザー）

構成員：附属坂戸高等学校校長・副校長・主幹教諭(研究担当)・担当教員

② 附属坂戸高等学校での高大連携と高度な学習環境の整備等

【大学と附属学校連携委員会】5回開催

委員長：濱本悟志（管理機関プログラムの立案と運営の統括者）

構成員：海外交流アドバイザー、附属学校教育局指導教員、筑波大学国際室、教育開発国際協力研究センター（CRICED）担当者、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）担当者、生命環境系研究室担当者、体育系研究室担当者、附属学校研究部主任

【附属坂戸高等学校－筑波大学連携小委員会】1回開催

委員長：田村憲司（附属坂戸高等学校校長）

構成員：筑波大学各学類長、附属坂戸高等学校副校長・主幹教諭、管理機関カリキュラムアドバイザー

③ カリキュラム比較研究および合同海外フィールドワークの開発

【合同海外フィールドワーク連携校チーム】COVID-19拡大により海外派遣を断念し、代替措置として国内FW教員研修を計画したが、オミクロン株の感染拡大で中止とした。

責任者：梶山正明（管理機関事業推進者）

構成員：連携校副校長・主幹教諭・教諭（筑波大学附属坂戸・高校・駒場・視覚特別支援、東京学芸大学附属国際中等教育学校、お茶の水女子大学附属高等学校）

④ オリンピック・パラリンピック教育とインクルーシブ教育の推進と発信

【筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）運営委員会】4回開催

責任者：真田久（筑波大学特命教授）

構成員：WWL マネジメント会議構成員，筑波大学体育系教員

【附属学校オリンピック教育推進専門委員会】4 回開催

委員長：溝上智恵子（管理機関担当部署総責任者）

構成員：WWL マネジメント会議構成員，CORE 運営委員，附属学校保健体育科教員

【特別支援教育連携推進グループ】毎週開催

責任者：雷坂浩之（管理機関プログラムの立案と運営の統括）

構成員：附属特別支援学校代表者

【普通附属と特別支援との連携推進委員会】6 回開催

委員長：西垣昌欣（附属久里浜特別支援学校校長，附属学校教育局指導教員）

構成員：附属学校教育局指導教員，各附属学校から選出された教員

⑤ 高校生 SDGs 国際会議の実施

【WWL 調整会議】3 回開催

責任者：溝上智恵子（管理機関担当部署総責任者）

構成員：WWL マネジメント会議構成員，附属坂戸高等学校校長，副校長，担当責任者（研究主幹），CRICED，研究室代表者，国内連携校

【国内海外教員ミーティング：運営委員および検証委員も参加】国際会議時に開催

責任者：溝上智恵子（管理機関担当部署総責任者）

構成員：管理機関カリキュラムアドバイザー，海外交流アドバイザー，高校生 SDGs 国際会議の国内外参加教員，連携機関代表者

c. 管理機関の長および拠点校等の校長の役割

管理機関担当部署の附属学校教育局の教育長は，2 名の次長・教育長補佐・特任教育長補佐とマネジメント組織を形成し，文部科学省と連携して全国高校生フォーラム等の運営を，筑波大学の関連する部署（国際室，CRICED，グローバル・コモンズ機構等）および関連する研究室（人文社会系，生命環境系，システム情報工学系等）と連携して高大連携を推進した。

拠点校の附属坂戸高等学校の校長は，カリキュラムアドバイザーと連携して，国内外のオンライン交流と国内フィールドワークの開発および高大連携による高度な学習環境の整備にあたった。後者では，生命環境系の研究室および地球規模課題学位プログラムと連携し，高校生国際 ESD シンポジウムや全国高校生フォーラムの生徒交流会で高大連携を具体化した。

d. 運営指導委員会の開催実績および検証委員会での検証データ収集等の状況

以下の構成員で，附属学校教育局に「WWL 事業運営指導委員会」および「WWL 事業検証委員会」を設置し，専門的見地から指導・助言を得るために，令和 3 年 11 月 20 日（土）の高校生 SDGs シンポジウムに合わせて委員とオンラインでの意見交換を行った。

① 運営指導委員会の開催実績

午前中に実施された高校生 SDGs シンポジウムの視聴後，それに対する評価と今後の活動への助言を受けた。併せて，文部科学省 WWL コンソーシアム構想概要，2020 年度筑波大学 WWL コンソーシアム構想概要・計画・実績と評価，2021 年度筑波大学 WWL コンソーシアム構想概要・計画・予定，2022 年度以降の国際交流活動について，報告と評議を行った。

② WWL 検証委員会の開催実績と検証のデータ収集と分析

WWL 事業の効果測定では，附属高等学校および筑波大学の心理学に関する研究グループで Web アンケートを実施し，6 つの尺度（「国際的資質」「グローバルオリエンテーション」「英語学習動機」「英語の授業に関する自己効力感」「将来のグローバルな活動希望」「PPDAC（問題発見力，解決策立案力，データ・情報の収集力，分析力，提案力に対する自信）」）から経年的な変化を検証し，また他集団（他の WWL・SGH ネットワーク参加校）からもデータを収集し，比較ができる形で検証・分析した。また，拠点校におけるインドネシアフィールドワーク参加者を対象に，高等学校における海外研修参加がもたらす効果に関する調査を半構造化インタビューにより行った。これらのデータを基に，2021 年 11 月に検証委員会を開催し，事業の効果検証を行った。

運 営 指 導 委 員 会 構 成 員 名 簿

区分	役 職 名	氏 名
	女子栄養大学 常務理事	ソメ ヤ タダ ヒコ 染 谷 忠 彦
	東京大学 名誉教授	オカ ノ タツ オ 岡 野 達 雄
	東京都市大学環境情報学部 教授	サ トウ マサ ヒサ 佐 藤 真 久
	駐日インドネシア共和国大使館林業アタッシェ	リバ ロバニ Riva Rovani
	インドネシア政府環境林業省、グヌングデパンランゴ国立公園、森林生態系管理官	アデ バグジャ ヒダヤット Ade Bagja Hidayat
	TRASHION INDONESIA 代表	ヘリアンティ ボルシ シマルマタ Herianti Porsi Simarmata
オブザーバー	筑波大学副学長・理事	ベントン キャロライン BENTON Caroline F.
	筑波大学副学長：附属学校教育局教育長	ミゾ ウエチ エ コ 溝 上 智 恵 子
	筑波大学国際局国際室 教授	モリ オ タカ ヒロ 森 尾 貴 広
	筑波大学生命環境系 准教授	ノ ムラ ナ カ オ 野 村 名 可 男
	筑波大学人文社会系 教授	アオ キ サブ ローウ 青 木 三 郎
	筑波大学システム情報系 教授	フジ カワ マサ キ 藤 川 昌 樹

検 証 委 員 会 構 成 員 名 簿

区分	役 職 名	氏 名
委員	千葉大学教育学部 教授	ツジ コウ ジ 辻 耕 治
	名古屋学院大学国際文化学部 准教授	ク ドウ タイ ソウ 工 藤 泰 三
オブザーバー	筑波大学人間系 教授	オオ カフ イチ ローウ 大 川 一 郎
	筑波大学附属学校教育局 准教授	イイ ダ ジュンコ 飯 田 順 子
	筑波大学附属坂戸高等学校 教諭	タツルモト ヨシ カズ 建 元 喜 寿

e. 拠点校等の卒業生追跡調査の仕組みの構築およびその情報収集の状況

拠点校では、「国際フィールドワーク」参加者を中心に、卒業後の追跡調査を実施している。継続的にメール等で意見交換を進め、調査の目的によって対応できる体制が整っている。コロナ禍においても、Zoomを用いて聞き取り調査を実施した。

海外連携校の卒業生のうち、日本国内の大学への学士課程留学生にもすでに連絡調整を行い、日本の国際教育プロジェクトの参加による海外の高校生の印象変容の調査を実施した。

国内外での対面による調査は難しい状況が数年以上継続することが予測されるが、Zoomによる聞き取り調査を実施しており、インタビュー調査を行える体制も整備している。

また、今年度卒業生については、リベルタスコンサルティングからの依頼を受け、卒業後に質問票調査を実施することができる体制を構築しつつある。

f. 海外の連携校および留学生の学習や生活を支援する体制

拠点校は、ホームステイバンク制度を整えている。入学時に外国人留学生をホームステイとして受け入れることが可能かどうか、保護者の意向を調査している。2019年度までは、ESD シンポジウム（国際会議）実施時や海外連携校からフィールドワークで拠点校を訪問した際にホームステイの受入れを進めてきた。

また、拠点校は、20年以上、留学生や海外からの訪問者の受入れを行っている。特に、拠点校における海外からの受入れが最も多い ASEAN 地域からは、インドネシア人教員およびフィリピン人教員を常勤で採用しており、さらに2019年度、カセサート大学附属高等学校（海外連携校）からの2名の生徒を1年間（ホームステイ）、タイの大学生2名の3週間の研修（校内合宿所）の受入れを行い、新しいノウハウが蓄積された。生活支援体制が大いに整ったといえる。

加えて、拠点校は「海外在留生特別選抜入試」を実施しているため、海外からの照会も増えており、その際に構築されたネットワークにより、海外事情の情報蓄積が進んでいる。特に、在外の日本人学校からの問い合わせが増加している。国内でも外国人コミュニティとのネットワークの構築に

努めており、困難発生時の相談先の開拓を進めている。本年度の受入れは全て止まったが、COVID-19の状況が改善され次第、受入れを再開する。

g. 拠点校での波及効果（授業改善・教職員や生徒の意識改革）

COVID-19感染拡大に伴った授業運営で、困難な局面は多数あったものの、オンラインを活用した高大連携や海外連携校との交流会等、WWLによって拡大した外部機関と連携した授業の実践が飛躍的に進んだ。国内外の各機関と連携したオンラインによる学習活動について、特別な活動と考えて実施している教員は極めて稀となり、オンライン教育が日常化した。

WWL最終年度では、WWLのネットワークを活かした生徒主催の企画が顕著に増加した。例えば、国内版フィールドワークの受入れ機関である「学校法人アジア学院」とのワークショップが挙げられる。フィールドワークに参加した生徒が、サーバントリーダーシップに関する研修会を企画し、アジア学院職員を招聘してワークショップの開催にこぎ着けた。

また、国内校外学習（山梨県笛吹市）に参加した生徒による継続的な課題研究活動も成果である。校外学習実施後も笛吹市を舞台とした課題研究活動に取り組んだグループが、受け入れ自治体である笛吹市に、開発したLINEアプリの活用を提案し、笛吹市職員からフィードバックをもらっている。WWLによって拡大したネットワークを生徒自身が活用し、自らの課題研究活動を質的に高めていると言える。

【財政等支援】

a. 管理機関の自己負担による追加支援（計画段階に追加）

将来的な自走を踏まえ、令和3年度は以下の人的および財政的な支援を行った。

① 人的な支援（人件費）について

管理機関担当部署の附属学校教育局には、指導教員（教授、准教授、講師、特任助教、附属学校校長）が配置され、グローバル人材育成に関する指導・助言および各種支援を行っている。令和3年度も7月に海外交流アドバイザーの役割を担う指導教員を採用し、3名の外国人常勤教諭とともに、長期的に事業へ取り組む体制を整えることとした。

② 財政的な支援について

当初計画していた財政的な支援は、COVID-19感染拡大の影響で以下のように変更した。

- ・拠点校のASEAN校外学習の引率教員および生徒の経費→国内フィールドワークに変更
- ・拠点校の国際フィールドワーク（インドネシア編）→中止により支援なし
- ・合同国際フィールドワークの引率教員および生徒の経費→中止により支援なし
- ・高校生SDGs国際会議の会場費およびその他の経費→オンライン実施で支援なし

海外派遣や受入れ、国内での対面会議は中止とし、取組の多くをオンラインで実施した。

b. 人的または財政的な支援状況および研修やセミナー等の実施状況

令和2年度にオンラインによる授業や研修等を実施できる体制を整え、令和3年度はそれを活用し、中止となった海外派遣の代替措置として国内4か所でのフィールドワークを実施した。また、令和2年12月に加盟したSEAMEOのSchools' Networkを活用し、令和3年11月20日のオンラインによる高校生国際ESDシンポジウムでは、国内外の200を超える高校・大学から生徒・教職員の参加があった。さらに、令和4年2月12日（土）に実施した第25回総合学科研究大会兼第3回WWL研究大会では、WWL事業に関する情報提供および分科会を開催し、全国の教員等とオンラインによるセミナーを実施した。

海外連携校とは、オンラインによる意見交換を複数回実施したが、今後も財政負担の少ない同様の方法で国際セミナーの開催や参加を促していく予定である。

c. 支援期間終了後の事業の継続的な実施に向けた計画

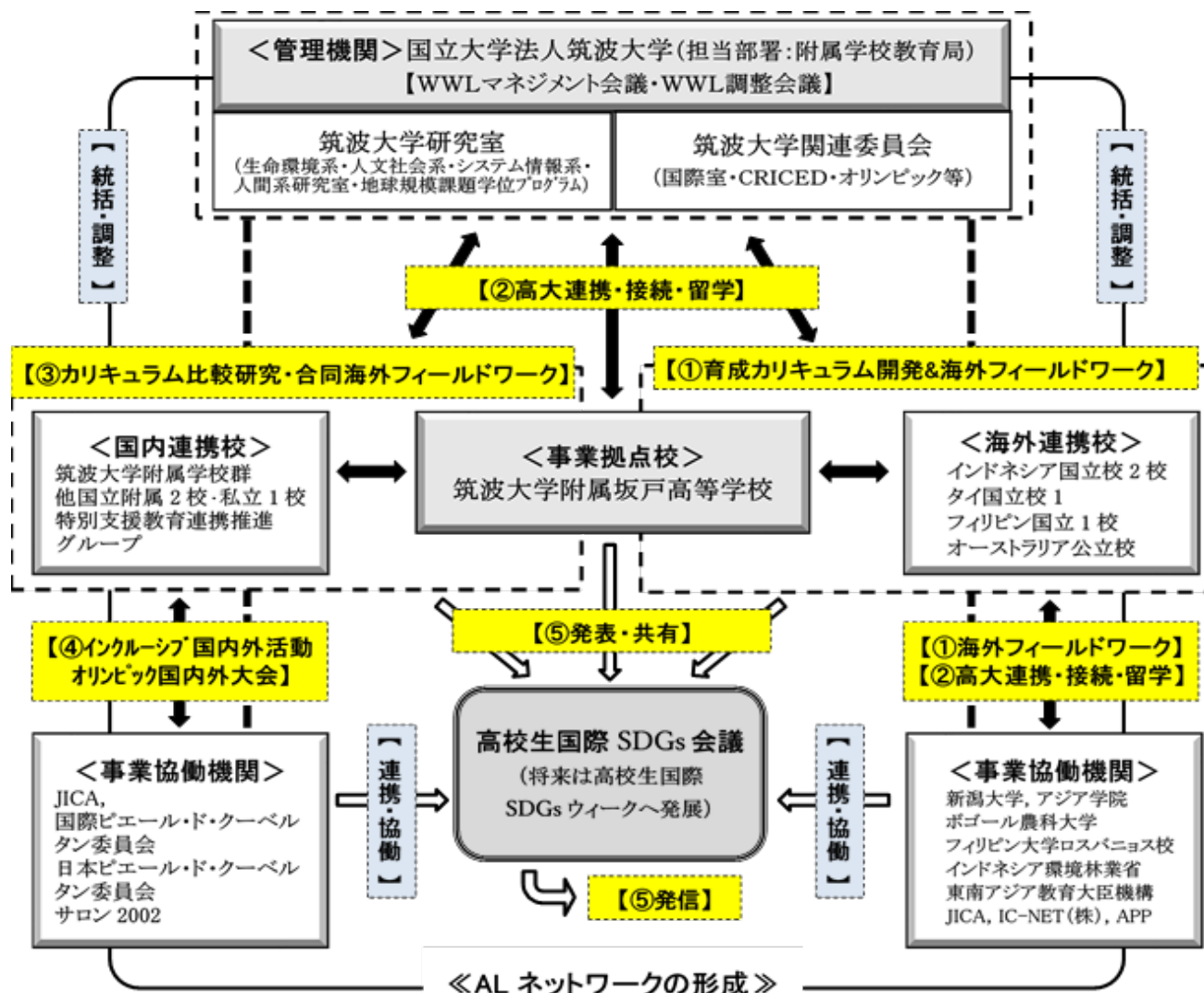
形成したALネットワークを継承しながら、柱となる5つのプロジェクトについては、以下のように対策を立てながら自走による発展を目指していく。

- ①国内外 FW を含むカリキュラム開発：受益者負担，オンライン活用，筑波大学の財政支援
- ②高大連携等による学習環境の整備：筑波大学のリソースの活用，新規事業の検討
- ③国際合同 FW と教員研修の推進：筑波大学の国際展開力の活用，オンライン活用
- ④オリパラ教育・インクルーシブ教育の推進：筑波大学および民間団体との連携と財政支援
- ⑤高校生 SDGs 国際会議の推進：SEAMEO の活用，オンラインの活用，筑波大学の財政支援

【AL ネットワークの形成】

a. AL ネットワーク運営組織の実績

令和 2 年度は、5 つのプロジェクトを実施するための下記のネットワークが機能し、COVID-19 下でも筑波大学の国際展開力を活用の上、オンラインでのネットワーク形成を推進した。



b. AL ネットワーク運営組織による新たな協働事業の開発と有効な事業実施

① AL ネットワーク全体の統括と調整

管理機関担当部署の筑波大学附属学校教育局内で毎週開催される「WWL マネジメント会議」（教育長，次長 2 名，教育長補佐，特任教育長補佐等）にて，AL ネットワーク全体にわたっての円滑な事業運営の検討とその評価を随時行った。

② AL ネットワーク全体の情報伝達と共有

筑波大学および拠点校・連携校で「WWL 調整会議」を組織し，5 つのプロジェクトの機能に合わせて各委員を編成した。全構成員が集まる年 3 回の会合で，WWL 全体の進行と COVID-19 禍での各プロジェクトの進捗状況と代替措置等を互いに報告・共有した。

③ 海外フィールドワークと育成カリキュラム開発での情報共有体制

事業拠点校の正副校長，カリキュラムアドバイザー，担当責任教諭の下，国内外の連携校や関連機関と連絡を取り合って情報共有した。その際，CRICED を通して加盟した SEAMEO Schools' Network を活用し，ASEAN 諸国の高校と関連機関の情報伝達と共有を強化した。

④ 高大連携・接続・留学等での情報共有体制

既存の大学・附属学校連携委員会（年 5 回開催）に，筑波大学国際室，CRICED，生命環境系研究室，人文社会系研究室の担当者を加え，情報伝達と連携を強化した。拠点校を含む筑波大学附属の 6 校（坂戸高等学校，高等学校，駒場高等学校，視覚特別支援高等部，聴覚特別支援高等部，桐が丘特別支援高等部）による WWL 事業活動報告と計画の確認を行い，グローバル人材育成の観点から連携を図った。

⑤ カリキュラム比較研究および合同海外フィールドワークでの情報共有体制

令和 2 年 2～3 月に実施した拠点校および連携校によるオーストラリアのタスマニア州教員研修の成果を活かし，令和 4 年 3 月に高校生合同海外派遣に発展させて実施する準備に入った。しかし，COVID-19 感染拡大のため断念し，代替措置として国内での教員研修に変更して計画した。その後のオミクロン株の感染拡大により，これも中止とした。

⑥ オリンピック・パラリンピック教育とインクルーシブ教育での情報共有体制

2021 年度の「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（キプロス大会）」が延期となり，6 月 8 日に派遣できなかった日本代表者による研修会をオンラインで実施した。また，次年度に延期された国際大会への派遣に向け，12 月 25～26 日に日本ピエール・ド・クーベルタン委員会主催のオンラインによる「日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 2021」に主管として協力した。インクルーシブ教育では，COVID-19 感染拡大の影響で筑波大学全附属学校が参加する共同生活を中止にしたが，12 月 12 日に『交流・共生』をテーマに各附属学校児童生徒による「共生シンポジウム」を実施した。

⑦ 高校生 SDGs 国際会議での情報共有体制

11 月 20 日の「第 10 回高校生国際 ESD シンポジウム・第 3 回高校生 SDGs 国際会議」をオンラインで開催し，SDGs の諸課題について，基調講演と 10 分科会を準備の上，国内外の高校生および特別支援学校の高等部生徒，中学生，教員が英語や日本語で討論を重ねた。今年度は，昨年度に加盟した SEAMEO の Schools' Network を活用し，国内外の 200 を超える高校・大学が参加する国際大会へと大きく発展させた。

c. 修了生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進

今年度は，拠点校から 1 名の生徒が米国に留学した。また，来年度はメキシコに 1 名の生徒が留学する予定となっている。COVID-19 の影響ですべての海外プログラムが中止となっているが，生徒の海外志向は継続していると言える。

また，海外大学への進学志向は堅調である。昨年度は，Monash University（オーストラリア：THE 世界大学ランキング 57 位），KU Leuven（ベルギー：42 位），University of Melbourne（オーストラリア：33 位），Tilburg University（オランダ：201-150 位），University of the Arts London（イギリス）に合格しており，COVID-19 の影響を受けつつも渡航を果たしている。今年度も数名の生徒が海外大学への進学を希望し，海外大学への進学志向は継続している。

d. カリキュラムを研究開発する人材の指定および配置状況

令和 3 年度は，カリキュラムを研究開発する責任者（カリキュラムアドバイザー）として，濱本 悟志（筑波大学附属学校教育局特任教育長補佐）を配置し，梶山正明（筑波大学附属学校教育局教育長補佐），海外交流アドバイザーの久保尊洋（筑波大学附属学校教育局特任助教）とともに，高大連携による拠点校の人材育成カリキュラムの研究開発を推進した。

e. AL ネットワークによる高校生国際会議等の開催準備および実施状況

平成 24 年度から実施した「高校生国際 ESD シンポジウム」と同時開催する形で，AL ネットワー

クを活用・発展させ、「高校生 SDGs 国際会議（英語大会名：SDGs Global Engagement Conference @ Tokyo）」を令和元年から実施している。今年度は、WWL の連携校を始め、国内外の 200 を超える高校・大学から生徒・教職員が参加した。特に、SEAMEO を通じて広報した結果、海外参加校が劇的に増加した。真にグローバルな国際会議へと変貌を遂げつつある。

- ・大会メインテーマ：行動するための 10 年―残された時間はわずか―
- ・参加：海外参加校 約 200 校
（フィリピン、タイ、インドネシア、マレーシア、ベトナム、カンボジア、ブルネイ、ミャンマー、オーストラリア）
国内参加校 10 校
- ・内容：SDGs に関するキーノートスピーチ(東京都市大学 佐藤真久教授)、参加校による課題研究成果発表、およびテーマ別分科会

f. フォーラムや成果報告会等の実施

事業拠点校である附属坂戸高等学校は、令和 3 年 11 月 20 日（土）に「第 10 回記念高校生国際 ESD シンポジウム・The 3rd SDGs Global Engagement Conference Online version」の主催、令和 3 年 12 月 19 日（日）の「全国高校生フォーラム」での発表と生徒交流会への参加に加え、令和 4 年 2 月 12 日（土）に「第 3 回 WWL 研究大会・第 25 回総合学科研究大会」を開催し、成果の発信と共有を図った。第 3 回 WWL 研究大会の概要は以下の通りである。

- ・主題：総合学科における探究活動の現在地～SGH/WWL を包摂するカリキュラムマネジメントの検証～
- ・対象：全国の総合学科校ならびに WWL 事業拠点校・共同実施校・連携校、SGH ネットワーク参加校の教員、教育関係者、SDGs 関連団体、IB 認定校・IB 候補校・IB に関心をお持ちの高等学校教員ならびに教育関係諸機関
- ・内容：講演「グローバル人材育成とアセスメント」
石森 広美氏（宮城県仙台二華高等学校教諭）
オンライン授業公開および 1 年次「産業社会と人間」発表会、2 年次「T-GAP（総合的な学習の時間）」発表会、3 年次「卒業研究」発表会、教育関係者向けのテーマ別分科会が議題。WWL の成果については、テーマ別分科会 C「WWL と総合学科によるグローバル人材の育成」にて報告した。

g. AL ネットワーク運営組織での取組と情報の収集と提供

「AL ネットワークの形成」の図（p. 13 参照）の 5 つの柱となるプロジェクトを実施するために、多くの関連機関や企業等でネットワークを組み、COVID-19 感染拡大下でも以下の 5 項目で成果を上げることができた。

- ・附属坂戸高等学校での海外とのネットワークの充実：筑波大学の研究室、教育開発国際協力研究センター（CRICED）、東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）
- ・国内における在住外国人との国際交流の開発：アジア学院
- ・高大連携による高度な学習環境の整備：筑波大学の研究室（生命環境系・人文社会系地球規模課題学位プログラム）
- ・オンラインによるオリパラ教育およびインクルーシブ教育の国内外への発信と共有：ピエール・ド・クーベルタン委員会(国際および日本)、サロン 2002、筑波大学附属学校群共生シンポジウム実行委員会
- ・オンラインによる高校生 SDGs 国際会議と全国高校生フォーラムでの生徒交流会の企画と運営：筑波大学の研究室(生命環境系・人文社会系地球規模課題学位プログラム)

h. AL ネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書

筑波大学および拠点校の附属坂戸高等学校は、AL ネットワークを構成している以下の 4 大学および附属学校と国際交流協定を締結している。

- ・ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（2010 年）
- ・インドネシア環境林業省附属林業高等学校（2013 年）
- ・カセサート大学附属高等学校（2017 年）
- ・フィリピン大学附属ルーラル高等学校（2016 年）

また、2020 年 12 月には、SEAMEO の Schools' Network への加入が認められ、海外とのネットワークが飛躍的に拡大した。今年度、「高校生国際 ESD シンポジウム」を SEAMEO を通じて広報した結果、国内外の 200 を超える高校・大学から生徒・教職員が参加した。

7 研究開発の実績

（1）実施日程

業務項目	実施期間（令和３年４月１日　～　令和４年３月３１日）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月	１月	２月	３月
(1) 国内外フィールドワークを取り入れた体系的な探究型カリキュラムの開発	COVID-19 感染拡大で実施可能なプログラムや代替措置の検討			海外連携校とのオンラインによる情報共有、国内フィールドワーク（代替措置）の開発			オンライン国際会議における学習成果発表の準備			総合学科研究大会（２月）における成果報告とそれに向けた準備		ASEAN フィールドワークの中止
(2) 高大連携による高度な学習環境の整備と先取り履修の実現	高大連携委員会 SEAMEO を活用した海外校との情報共有				高校３年生の卒業研究指導 筑波大学教員によるオンライン講義 SEAMEO Schools' Network を活用した情報共有				2021 年度の事業評価と 2022 年度の事業計画策定			
(3) 連携校との合同海外フィールドワークと探究型カリキュラムの比較研究	高校生海外合同フィールドワークの立案→COVID-19 感染拡大による一時凍結			国内での教員研修（代替措置）の実施の可能性を追求			長崎県西海市での国内教員研修（代替措置）の計画→１月にオミクロン株の感染拡大で中止			COVID-19 感染拡大収束後のプログラムの検討		
(4) オリンピック・パラリンピック教育とインクルーシブ教育の推進	国際 ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム日本代表者研修会の準備と開催			日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 2021 兼日本代表選考会の立案と開催準備 特別支援学校高等部を含むプログラムの立案と参加準備				オンラインで実施		2022 年度の活動および国内大会・海外派遣の準備		
(5) 高校生 SDGs 国際会議の開催と成果発表	連携校、協力機関の COVID-19 感染拡大の状況把握、大会実施の可否の検討			オンライン大会実施の決定と概要の周知・参加校の募集		大会の準備		オンラインで実施		振返り		報告書の作成 次年度計画の作成

(2) 実績の説明

当初予定していた計画は、COVID-19 感染拡大防止の観点から、以下のように変更して実施した。

2021年度WWL事業年間計画と実績					
筑波大学(拠点校附属坂戸高校と連携校)の事業					
事業内容	事業全般			オンライン	代替措置
	① 附属坂戸高校での海外フィールドワークを取り入れた探究型カリキュラム開発				
	② 附属坂戸高等学校での高大連携と高度な学習環境の整備等				
	③ カリキュラム比較研究および合同海外フィールドワークの開発				
	④ オリンピック・パラリンピック教育とインクルージブ教育の推進と発信				
	⑤ 高校生SDGs国際会議の実現				
6月	6/1 第1回WWL調整会議 → メール会議(筑波大学の回線不通による)			△	
	6/8 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム日本代表研修 → オンライン開催 第13回キプロス大会が2022年10月に延期され、2021年に派遣予定だった日本代表者を対象に研修会を実施した。			○	○
	6/30 WWL・SGHネットワーク連絡協議会(文部科学省・筑波大学共催) → オンライン開催 司会進行:附属学校教育局 発表:附属坂戸高校 参加:附属視覚特別支援学校、附属高校、学大附属国際中等教育学校			○	
7～9月	7/14～17(長崎のみ16日まで) 国内フィールドワーク(2020ASEAN校外学習の代替措置) → 実施 附属坂戸高校2年生全員が4グループに分かれて、長崎県西海市(37名) 静岡県掛川市(16名) 山梨県笛吹市(26名) 長野県飯田市(62名)を訪問し、フィールドワークを通して相互理解と問題解決に重要な当事者性を養う。				○
	7～8月 国際フィールドワーク(インドネシア)→ COVID-19感染拡大により中止 附属坂戸高校2～3年生の代表7名が、「インドネシア100年の森」をモットーに、インドネシア人の生徒と協力しながらグヌン・グデ・パンランゴ国立公園周辺地域の森林環境をより良くするための活動を考え実践する。				×
	8/9～12 国内フィールドワーク@那須(アジア学院)対象:希望者→ COVID-19感染拡大により中止 海外の農村指導者を養成する機関を訪問し、農業実地体験等を通して世界の農村リーダーたちと交流する。				×
	9/14 第2回WWL調整会議 → オンライン開催			○	
	9/21～23 国内フィールドワーク(新潟県阿賀町)対象:希望者→ COVID-19感染拡大により中止 附属坂戸高校1年生希望者が新潟県阿賀町を訪問し、フィールドワーク(2泊3日の民泊)を通して、日本の将来の課題を発見し、日本の視点からその課題に取り組む。				×
11月	11/20 第3回運営指導委員会・検証委員会	11/20 午前 高校生国際ESDシンポジウム(ホスト:坂戸高校) → オンライン開催		○	
12月	12/19 全国高校生フォーラム(文部科学省・筑波大学共催) → オンライン開催 参加校は、附属坂戸高校及び連携校4校:附属高校、学大附属国際中等教育学校、カセサート大学附属高校(タイ)、フィリピン大学附属ルラル高校			○	
	12/25・26 日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム(兼日本代表選考会)→ オンライン開催			○。	
2月	2/12 第3回WWL・第25回総合学科研究大会 → オンライン開催			○	
	2/25 第3回WWL調整会議 → オンライン開催			○	
3月	3月 ASEAN校外学習(インドネシア、タイ、シンガポール・マレーシア)→ 代替措置として国内FW(3/15～18)→ 中止 附属坂戸高校1年生全員を対象にした海外派遣(国際フィールドワーク)で、インドネシア、シンガポール&マレーシア、タイ国の希望する国に海外派遣し、現地でのフィールドワーク。				×
	3月 国際合同フィールドワーク(豪州タスマニア州)→代替措置として長崎FW教員研修(3/15～17)→ 中止 管理機関、拠点校、連携校の教職員				×

【研究開発・実践】

a. 設定したテーマ（SDGs、経済、政治、教育、芸術等）

本事業では、グローバルな社会課題として、持続可能な開発目標（SDGs）の達成を設定している。その中で、日本で達成が遅れていると指摘されている複数の項目につき、筑波大学の強みを活かした取組とするため、森林開発や資源枯渇、地域開発をテーマとしたフィールドワークを開発した。インドネシアの国立公園やオーストラリアでの活動では、主に目標 12, 13, 14, 15 番を、世界的なパートナーシップの下に運営されるオリンピック教育関連の取組では、目標 17 を重視して実践を行った。

拠点校のカリキュラムでも、各教科・科目において SDGs との関連の中で内容整備を進めた。特に、地球市民性の育成を目標とする 1 年次「グローバルライフ」において、SDGs の基礎を WWL 事業と関連させて学習する体制とした。これについては、昨年度も同様の体制を構築している。

また、SDGs に関する国際的な潮流と達成状況を専門的な見地から学べるようにするため、「高校生国際 ESD シンポジウム」にて、東京都市大学の佐藤真久教授にキーノートスピーチを依頼した。最新の調査研究の成果および Sustainable Development Reports 2021 の内容を活用しながら、SDGs に関する理解をアップデートしていった。

b. 関係機関による先進的なカリキュラムの研究開発と実践

COVID-19 感染拡大の影響により、本研究開発の核となる各種フィールドワークが中止する状況となったため、カリキュラム開発は困難を極めた。しかしながら、関係機関との協働の結果、フィールドワーク型の「国内校外学習」を開発し、実践することができた。以下、その概要を示す。

- ・参加生徒：2 年次 150 名（IB 生を除く学年全員）
- ・実施時期：2021 年 7 月 14 日（水）～2021 年 7 月 17 日（土）
*長崎方面のみ 2021 年 7 月 16 日（金）まで。
- ・訪問地域：以下の 4 方面からの選択制とした。

旅行会社	IC-NET&HIS		JTB	
行先	長崎県西海市	静岡県掛川市	長野県飯田市	山梨県笛吹市
テーマ	地域資源の発掘、民泊を活用した地域創生について。	お茶を活用したビジネスモデルの提案と地域活性化について。	ポストコロナの観光のあり方と農業の六次産業化について。	笛吹市の魅力を発掘し、新たな学校旅行を提案する。

生徒は、フィールドワークを通じて、一次情報に接し、現場で社会課題の解決に取り組む NPO、自治体、農家等から直接話を聞くことができる。この経験を通じて、課題研究活動の質を向上させていくことが期待される。以下、各方面の内容を示す。

（1）長崎県西海市

人口減少に直面する中、地域資源および民泊事業を通じて地域創生に取り組む一般社団法人「山と海の郷さいかい」によるコーディネートの下、生徒は民泊家庭に出向き地方創生の具体的な活動内容について調査した。また、各家庭がプロデュースする体験活動に参加し、民泊プログラムを実際に経験した。人口減少、地域活性化、中間支援組織等の社会課題に関心がある生徒が参加した。

（2）静岡県掛川市

掛川市は日本一の深蒸し茶である“掛川茶”の産地である一方で、後継者問題やお茶の価格下落などの影響を受け、あと数十年もすれば、美しいお茶畑の風景は失われると言われている。本フィールドワークでは、課題の当事者であるお茶農家へインタビューをして、お茶摘み体験やお茶を活用した商品開発等を行いながら、お茶農家が抱える課題を、ビジネスを通じて探究することを目的とした。本フィールドワークのターゲットは「お茶農家」であるが、このテーマは現代の日本社会が抱えている「一次産業の衰退」「地方創生・地域活性化」「つくる責任・つかう責任」「文化継承」などの社会課題に関連している。

(3) 長野県飯田市

長野県飯田市は、グリーンツーリズムの先進地として高い評価を得ており、国内外からの観光客を多く受け入れている。2017 年には農業体験を通じてその土地の自然や文化を学ぶことができる「農家民泊」が評価され、「COOL JAPAN AWARD 2017」を受賞した。

本フィールドワークでは、ポストコロナ時代の観光のあり方について探究するプログラムを開発した。また、農業の六次産業化に取り組む農家を訪問し、人口減少や一次産業の衰退を食い止めるための施策について学んだ。

(4) 山梨県笛吹市

山梨県笛吹市は、COVID-19 の感染者が比較的少ない地域であるため、学校旅行の受入れ件数が増加している。本フィールドワークでは、生徒が笛吹市の魅力を発掘し、学校旅行のコンテンツを考案の上、笛吹市役所に提言することを目標とした。農家、地域おこし協力隊、市役所等を訪問し、現場で一次情報を収集の上、最終日に笛吹市役所の職員にプレゼンテーションをした。

c. 新たな探究活動を行う教科・科目の設定と外国人講師等の活用

WWL 事業では、SGH 指定期間中に開発した科目と、総合学科の特色を活かした実践を行い、複数年にわたる探究活動を実施できるようにしている。例えば、日常生活とグローバル課題を結びつけた地球市民性を育成するために「家庭基礎」の代替科目として開発した「グローバルライフ」は、「食」「衣」「共生」「生活とグローバル課題」の4テーマを、家庭科2名、国語科1名、農業科1名で担当し、複数教科で本年度も運営した。

「各種フィールドワーク」については、今年度も「新潟県阿賀町校外学習」および「ASEAN 校外学習」が中止に追い込まれた。一方、新潟県阿賀町については、2022 年3月にJTBの仲介でオンラインでのワークショップを開催することができた。

現在、フィリピン、インドネシア、ニュージーランド出身者を常勤の教育職員として雇用しているが、単発のイベント的な活用というよりも、継続的に取組が実施できるようにするための人材の位置づけとして考えている。特に、「インドネシア語」の授業は単位化できており、インドネシア語検定の合格者も出ている。また、インドネシアの連携校やインドネシア人教員の出身校とオンラインでつながり、「インドネシア語Ⅰ」および「インドネシア語Ⅱ」の授業で交流が継続している。

d. カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

1年次の3月に「ASEAN 校外学習」を実施し、生徒全員が約1週間、探究活動を中心とした海外校外学習を実施する予定だったが、COVID-19 感染拡大の影響で、2020 年度に続き、今年度も中止した。IC-NET 株式会社等、海外 ODA 案件やグローバル課題に取り組んできた企業との連携や、AL ネットワークを活用したプログラムで、各国テーマ別（インドネシア：開発と環境／タイ：経済発展、教育／シンガポール・マレーシア：グローバル市場、多文化共生）3 カテゴリーによるプログラム開発を行い、英語を始めとする外国語を使用した探究活動プログラムの開発を完了している。COVID-19 禍の世界情勢を見ながら実施時期を探っていききたい。

今年度は、米国の高校に1名の生徒が長期留学した。また、来年度はメキシコの高校に1名の生徒が長期留学する予定である。COVID-19 の影響が長引いているが、生徒の海外志向は続いている。

e. 文系・理系を問わず各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成

総合学科では文系・理系、普通科目・専門科目をバランスよく配置し、生徒が科目選択を行えるようになっているため、その構造的特性から、すでに教育課程の編成はできていると認識している。総合学科教育は「多様な選択科目の設置（課外活動を含む）、柔軟な単位認定、能力・適性等に対応した教育」によって、多様化と個別化を実現すること、また「様々な人やものとの関わりを通じたキャリア意識の醸成、学びのためのガイダンス科目の設置」など、学ぶための「ガイダンス機能」の充実がその特徴である。この教育を通じて、生徒に自己肯定感（self-esteem）とそれを基盤として生み出されるエネルギー（empowerment）が生まれ、自分の内側（興味関心や価値観）および外側（他

人や社会、国、世界)にあるものと主体的に関わる態度や資質・能力を育てることを目指している。言い換えると、総合学科教育は「当事者性」を求める教育ともいえる。自分は何者で何を求めているのかなど自分を探究しようとする人材、つまり自分自身に対する当事者となること、また、自分が社会の中で果たすべき役割は何かということを自律的に考える人材、いわゆる自分の外側に対する当事者となること、これらの2つの当事者性を持った人材を育てる教育が総合学科の価値といえる。

現在のカリキュラムでは、以下に記した4つの科目群から1つを選択し、現代社会における様々な課題を解決するための考え方・学び方を獲得する(科目群選択科目)。また、一般選択科目では、自己の興味・関心や希望する進路等に合わせて、科目を自由に選択することができる。これにより、文理および教科横断科目などバランスよく学ぶことが可能となっている。

①「生物資源・環境科学科目群」

目標：人間の生命の源である農や環境について理解を深めるとともに、地域的視野・地球的視野の双方から探究する活動を通じて、持続可能な地球環境の創造に主体的に取り組む態度を身に付ける。

②「工学システム・情報科学科目群」

目標：人間の知的な生産活動である「ものづくり」の体験や工学・情報技術を総合的かつ科学的に探究する活動を通じて、持続可能な社会を目指した環境に配慮した科学技術の発展に主体的に取り組む態度を養う。

③「生活・人間科学科目群」

目標：人間生活の基礎となる衣食住および福祉・保育などに関する基礎的・基本的な知識・技術を習得するとともに、現代社会の課題を科学的に理解し、持続可能な社会を目指したライフスタイルの実践に主体的に取り組む態度を身に付ける。

④「人文社会・コミュニケーション科目群」

目標：社会の在り方やコミュニケーションに関する基礎的・基本的な知識・技術を習得するとともに、社会の持続可能な発展のために、グローバル社会における諸問題の解決に主体的に取り組む態度を身に付ける。

上記の選択科目の他に、すべての生徒の学びの核として、1年次の「産業社会と人間」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」を設定している。その中で、生徒自身が社会課題に対する当事者性を意識化、明確化、深化させることができるように3つの科目を連携させ、継続した学習活動として実施している。この3科目による3ヶ年の探究的な学びの柱が進むことによって、各教科科目で獲得してきた知識やスキルを自分自身で振り返り、自分自身にとって必要なものや足りないものを自ずと意識できるようになることが期待できる。生徒自身の中で学びが総合化されていくことを目指す考え方である。

以上のように、総合学科教育は当初より「当事者性」育成を目標としている。一方、「当事者性」はグローバル人材の基礎的素養としても捉えられている。つまり、総合学科教育を推進することがグローバル人材育成にもつながると考えており、今後も、総合学科の学びを土台に、WWL事業で形成したALネットワークにより、グローバルな学びと人材育成を継続して進めていきたい。

f.工夫した学習活動

COVID-19 禍でフィールドワークの実施が困難であったため、国内版の校外学習を開発し実施した。研究開発構想を変更しない形で、国内版を実施することができた。

また、オンラインの活用を積極的に進めた。高校生国際ESDシンポジウムについても、オンライン対応したことで、国内外の200を超える高校・大学から生徒・教職員が参加した。

g. 高大連携による大学教育の先取り履修の実施に向けた取組(計画)

1年目同様、高大連携の核になる地球規模課題学位プログラム(学士：4年間の英語プログラムで世界各国から留学生が集まっている、略称BPGI)および、SEAMEOやAIMS(ASEAN International Mobility for Students)を学内で担当している筑波大学国際室との間で協議・整理を行い、実施可能なものを進めていった。

大学教育の先取り履修の実施に向けた取組では、高大連携科目として大学生と高校生が合同で実施する海外でのフィールドワークを 2020 年度から開講した（大学生向けの科目名称：「国際農業研修Ⅶ」）。COVID-19 感染拡大の影響で今年度は履修中止となったが、すでに大学で高校生および大学生が同時に履修可能な科目を立ち上げることができた。BPGI とは、昨年に引き続き「全国高校生フォーラム」においてそのプログラム内容の検討から連携を深めた。そのノウハウを基に、大学における先取り履修が可能な内容について引き続き検討を行っていく。

また、筑波大学教授である拠点校の校長が中心となり、高等学校 2 年生を対象に「プレ卒業研究」（3 年次では全員が個人テーマで卒業研究に取り組む）として、高大連携による研究を希望する生徒を募り、一定レベルの進捗状況にある生徒を、筑波大学の各研究室とつなぎ、卒業研究の内容の深化に努めた。2 年次 12 月に校長が面談を行い、セレクションを経て大学教員からの指導を受けることができる体制を構築している。

h. より高度な内容を学びたい高校生のための拠点校・共同実施校の条件整備

タスマニア州（オーストラリア）において各校生徒が参加することができる「海外フィールドワーク」を開発した。だが、COVID-19 の影響により中止に追い込まれた。コンテンツ自体は開発済のため、感染症の状況次第で再開を目指す。

また、筑波大学生物資源学類の科目の中に、高大連携科目が設定され、大学生と共に高校生が海外で合同フィールドワークを受講できることが可能となった(g. 参照)。

i. 日本人高校生と留学生と一緒に外国語や探究活動を履修するための体制整備

令和 3 年度は、海外からの来日実績はなかったが、海外への渡航実績は米国に 1 名長期留学した。一方で、以下の通り、海外連携校や企業と連携したオンライン学習を充実させた。

< 事例 1 >

海外連携校であるインドネシア・ボゴール農科大学附属高等学校の高校生が、1 年次「産業社会と人間」の授業に参加し、学校紹介に加えて、両国の COVID-19 下の状況についてオンラインで報告することができた。（通常授業へのスポット参加）

< 事例 2 >

連携企業である IC-NET 株式会社の支援の下、ASEAN 諸国（タイ、フィリピン）とのオンライン交流学習プログラムを実施した。（総合的な探究の時間のオンラインプログラム開発）

タイ、フィリピンの企業や NGO に聞き取り調査を実施し、各国が COVID-19 の影響を受けて、どのように変質したかプレゼンテーションを行った。

j. その他特筆すべき点

現状では、海外でのフィールドワークの実施は難しいと考える。しかしながら、国内版の校外学習を実施することができたことは、特筆すべき点である。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材の育成状況

COVID-19 の影響を受けつつも、生徒および卒業生の海外志向は続いている。今年度は 1 名の生徒が米国の高校に長期留学中である。また、来年度はメキシコの高校に 1 名の生徒が長期留学を計画している。現 3 年次生の中には、海外大学への進学を希望する者が数名おり、生徒のグローバル志向は衰えていない。卒業生についても、今年度はオーストラリア、オランダ、ベルギー、イギリスの大学にそれぞれ渡航した。加えて、国際交流基金ジャカルタ事務所に着任した卒業生もいる。SGH/WWL での経験、および IB 教育の相乗効果により、グローバル人材の育成は着実に進んでいる。

b. AL ネットワークが果たした役割

本事業では持続可能な国際社会を創る人材育成のために、AL ネットワークでの連携を通して 5 つの

プロジェクトを実施している。令和3年度の成果を簡潔に記載すると以下のようになる。（「AL ネットワークの形成」の図（p. 13）参照）

- ① 附属坂戸高等学校での海外フィールドワークを取り入れた探究型カリキュラム開発
AL ネットワーク事業協働機関である IC-NET 株式会社の海外ネットワークの支援により、オンラインでの探究学習を実施した。タイ、およびフィリピンの企業・NGO とオンラインで接続し、COVID-19 による現地社会へのインパクトについて聞き取り調査を実施した。1 年次 SG クラスの「総合的な学習の時間」にて実施した。
- ② 附属坂戸高等学校での高大連携と高度な学習環境の整備
筑波大学の各組織（生命環境系研究室・人文社会系地球規模課題学位プログラム、システム情報工学系研究室等）により、高校2年生「T-GAP（総合的な学習の時間）」および高校3年生の卒業研究発表会への指導・助言を受けた。また、「高校生国際 ESD シンポジウム」にて、筑波大学教員、および東京都市大学佐藤真久教授より指導・助言を受けた。
- ③ カリキュラム比較研究および合同海外フィールドワークの開発
COVID-19 感染拡大の中、生徒も教員も海外派遣を凍結し、その代替措置として国内の FW を計画した。連携校による合同フィールドワークは、対象を教員に、訪問地を国内（長崎県西海市）に限定して3月の実施を目指し計画したが、オミクロン株の急激な感染拡大に伴い、1月の時点で実施を断念した。
- ④ オリンピック・パラリンピック教育とインクルーシブ教育の推進と発信
COVID-19 感染拡大の影響で2021年の「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（キプロス大会）」は延期となり、派遣ができなかった、日本代表に選ばれた生徒に対して6月8日にオンライン研修会を実施した。また、延期となった2022年国際大会の代表選考会を兼ね、12月25～26日にオンラインで「日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」を開催した。筑波型インクルーシブ教育プログラム「三浦海岸共同生活」も中止となったが、12月12日の共生シンポジウムで『交流・共生』をテーマに各附属学校児童生徒によるプレゼンテーションリレーを実施した。
- ⑤ 高校生 SDGs 国際会議の実施
海外連携校4校、国内連携校6校、連携企業2社、および SEAMEO 加盟校から約200校が参加し、第3回目の会議を実施することができた。今年度は、SEAMEO 加盟校が多数参加したことによって、国際会議の量的・質的なグレードアップが実現した。

c. 短期的、中期的および長期的に設定した目標の進捗状況

上記5つのプロジェクト①～⑤について、令和2年度の実績を踏まえ、短期的および中期的目標を以下のように評価し、一部修正を加えて達成目標を設定する。

		短期的目標	中期的目標
①	当初の目標	3つの国内外フィールドワークを実施し、体系的な探究型カリキュラムを3年次までに完成させる。	自己資金で継続実施する
	評価と修正	COVID-19 感染拡大で海外フィールドワークが実施不可能な状況で、その代替措置として、令和2年度のアジア学院におけるフィールドワークに続き、高校2年生全員を対象にした国内フィールドワークを実施した。それにより、コロナ禍でも実施可能なフィールドワークを取り入れた探究型カリキュラムを構築できた。	目標に変更なし 受益者負担、オンラインによる経費節減、大学による不足分財政的支援で継続実施は可能である。
②	当初の目標	大学施設の活用、大学教員による授業、海外からの研究者や留学生による事前レクチャーや海外フィールドワークの同行等を実施する。	先取り履修科目を決定し、国内外の大学進学および留学を促進する体制を確立する。
	評価と修正	筑波大学の生命環境系との連携で高大連携科目が設定され、大学生と高校生が同時に履修する科目が設定できたが、コロナ禍の対面授業が困難となり、一時保留が余儀なくされた。	変更なし 単位認定には解決すべき課題は残るが、コロナ感染拡大収束後の実現は可能である。
③	当初の目標	オーストラリアのタスマニア島での合同海外フィールドワークを計画し、1年次からの実施を目指す。	合同海外フィールドワークをさらに充実させるため、海外協働機関との連携を整備する。
	評価と修正	COVID-19 感染拡大で令和2～3年度は教員研修と生徒派遣は実地できなかった。令和3年度は教員による合同国内FW研修を計画したが、オミクロン株の感染拡大で中止となり、実現できなかった。	目標に変更なし コロナ収束後の実施を目指す。
④	当初の目標	国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムに生徒を派遣し、2年次の国内大会の主催とその後の国際大会派遣を実行して3年間で完成させる。	自己資金で継続実施する
	評価と修正	令和3年度は、COVID-19 感染拡大の影響で国際大会が延期となったが、オンラインで日本代表生徒による研修会と令和4年度世界大会の国内選考を実施し、国際大会に備えた。	目標に変更なし 令和4年度実施予定の国際大会への準備を進める。
⑤	当初の目標	現在の高校生SDGs国際会議を基に、国際機関との連携でネットワークを充実させる。	ASEANを中心に高校生SDGs国際会議を主催し、教員ミーティングやセミナーも加えて国際会議ウィークへと発展させる。
	評価と修正	ALネットワークと加盟したSEAMEOのSchools' Networkを活用し、オンラインながら大幅に規模を拡大した国際大会を実施できた。	目標に変更なし オンラインながら目標は達成できた。海外教員の招聘経費に検討が必要

長期的目標（10年後には達成）としては、自己資金で継続実施できる体制を整備した上で、SGUとして国際展開力のある筑波大学の附属として、アジアから地球規模にネットワークを拡張し、生徒が希望する探究活動がどの世界でも可能になるような育成システムの構築を考えている。

9 自走に向けた次年度以降の課題および改善点

（1）本事業に関する管理機関の課題や改善点

WWL事業1年目の令和元年度は、COVID-19感染拡大の影響で一斉休業となった3月を除き、ほぼ当初の目標を達成した。一方、令和2～3年度は、海外渡航や海外からの受入れを中止にし、オンライン等を活用した活動に留めざるを得なかった。この2年間の実績と創意工夫を踏まえ、自走を目指す令和4年度以降は、以下の3点を課題と捉えて改善を図る。

- ① 附属坂戸高等学校での海外フィールドワークを取り入れた探究型カリキュラム開発
連携校には複数の SGH ネットワーク校と SSH 校が含まれ、各校は独自の手法で探究型課題研究を推進してきた。それらのオリジナリティを尊重しつつ、オンラインを通して共有した SDGs の設定目標への取組を軸に、筑波大学のリソースを活用した高大連携を推進させ、次世代のグローバル人材育成に寄与したい。
- ② 国内での国際交流の開発
この 2 年間で培ったオンラインを含む遠隔交流を取り入れるとともに、国内に在住する外国籍の方々（留学生やインターナショナル・スクール等）と連携した新たな国際交流の取組を計画・運営していきたい。
- ③ 国際会議開催の運営能力の向上
次年度も WWL 幹事管理機関、SGH ネットワークの管理機能を担う予定であるが、人材育成の目標、観点、手法は多くの点で共通している。特に、現在の拠点校と連携校で実施する「高校生国際 ESD シンポジウム（兼 SDGs 国際会議）」と「全国高校生フォーラム生徒交流会」の企画と運営には類似点が多い。COVID-19 禍の難局でも取り組んだ実績・成果と反省を活かして、次年度以降も AL ネットワークを駆使した国際交流の新たな形態を求めて発展させていきたい。

（2）AL ネットワークの課題や改善点

上記の（1）①～③を実現し、現在の拠点校および連携校の取組を拡充させるため、AL ネットワークの拡大を考えている。具体的には、SEAMEO Schools' Network の活用、筑波大学の国際展開力を活用し、以下の 3 点に力を注いでいきたい。

- ① 拠点校の探究型カリキュラム開発による、筑波大学を中心とした高大連携のシステム構築
- ② 筑波大学のリソースを十分に活用した、連携校との国内での新たな国際交流の実現
- ③ 筑波大学のリソースを十分に活用した、高校生の大学の授業への参加および高校生 SDGs 国際会議と全国高校生フォーラムの充実

（3）研究開発にかかる課題や改善点

3 年間の WWL 事業で実施した 5 つの柱となるプロジェクトを通して明確になった課題に対して、令和 4 年度以降は以下のように改善を図る。

- ① 附属坂戸高等学校での海外フィールドワークを取り入れた探究型カリキュラム開発
WWL 事業で新規開発した ASEAN 校外学習（1 年生全員が 4 カ国から選択し渡航する計画）は、まだ実施できていない。一方、その代替措置として実施した栃木県のアジア学院における国内版国際フィールドワークや国内 4 カ所でのフィールドワークの成果を活かし、早期の実施をめざす方向で検討している。
- ② 附属坂戸高等学校での高大連携と高度な学習環境の整備等
SEAMEO との連携により国際的なネットワークが充実した。「高校生国際 ESD シンポジウム」には、東南アジアの大学からも多数の教員が参加し、高校生の発表に対して指導・助言を多く受けた。WWL 指定終了後は、課題研究をベースとした SEAMEO ネットワークとの交流を進める。
- ③ カリキュラム比較研究および合同海外フィールドワークの開発
オーストラリアにおける合同海外フィールドワークは中止に追い込まれた。しかしながら、今後は附属坂戸高等学校が開発した「国内校外学習」に連携校の教員・生徒が参加することも視野に入れて、実現可能性を検討していく。
- ④ オリンピック・パラリンピック教育とインクルーシブ教育の推進と発信
令和 2～3 年度は、COVID-19 禍でのオンラインによる「日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」と「共生シンポジウム」を実現させた。前者は日本ピエール・ド・クーベルタン委員会との連携で、後者は筑波大学附属学校群での連携で共同開発した特色ある取組であり、令和 4 年度以降も対面あるいはオンラインを通して、財政面の課題を克服しながら、関連機関および協賛団体との連携を深めていく。

⑤ 高校生 SDGs 国際会議の実施

この会議は、上記の①～④の成果を発信・共有する最大の企画である。令和 3 年度は、国内外の連携校との連携・相互理解も得られ、オンラインで開催することができた。海外からの参加国も SEAMEO Schools' Network で大幅に増加した。一方で、対面による国際的な直接交流の重要性も高く、これらには十分な時間と財政的な支援が必要である。令和 4 年度以降は、COVID-19 の感染拡大状況が不透明であるが、3 年間の実績を踏まえての継続的な実施に向け、対面とオンラインのハイブリッド型の開催も検討する。

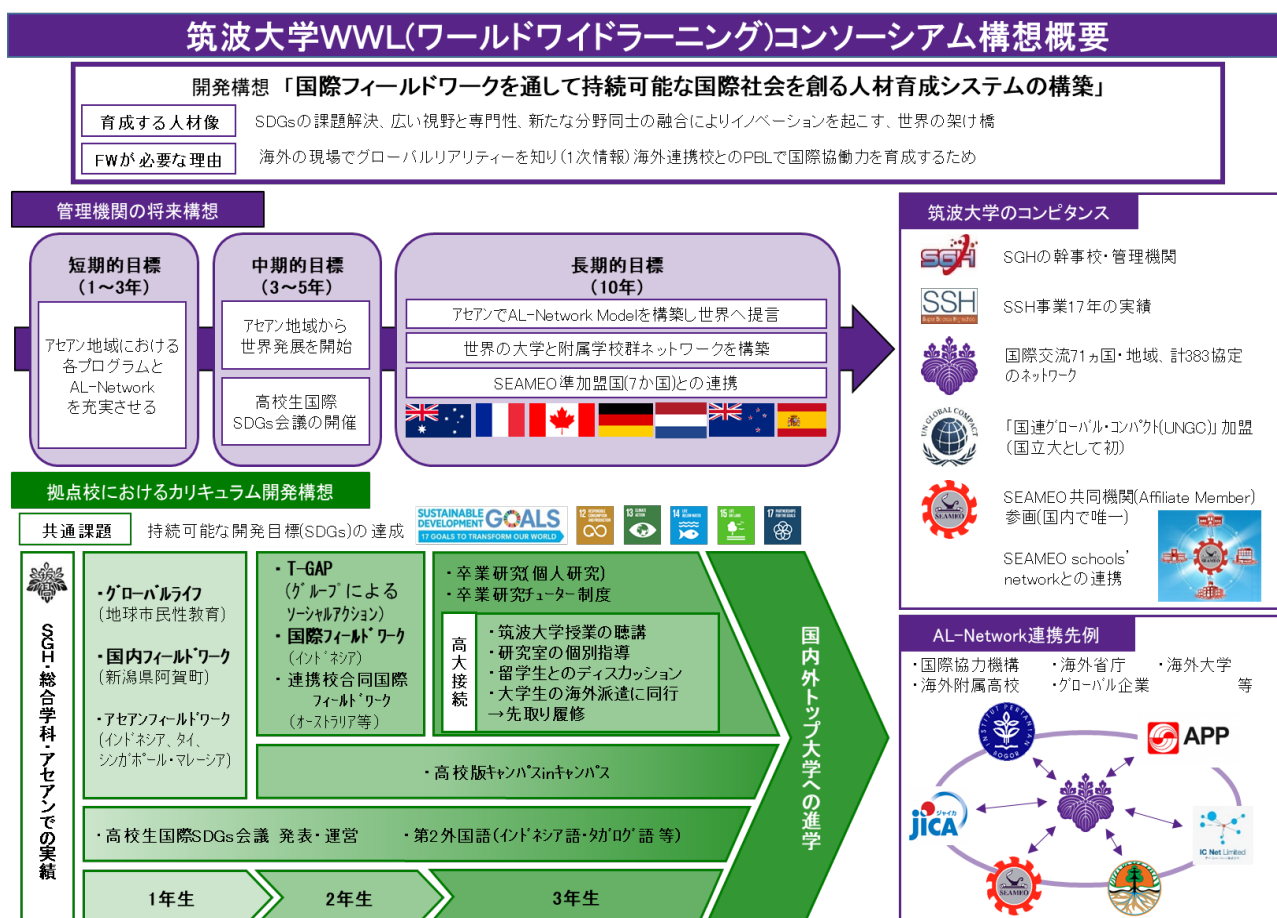
【担当者】

担当課	東京キャンパス事務部企画推進課	TEL	03－3942－6432
氏 名	春名 禎貴	FAX	03－3942－6911
職 名	係長	E-mail	haruna.yoshitaka.fu@un.tsukuba.ac.jp

第 2 部 実施報告

I 研究開発の概要および令和 3 年度の年間計画

1 筑波大学 WWL コンソーシアム事業の概要



AL-Network連携先例

- 国際協力機構
- 海外省庁
- 海外大学等
- 海外附属高校
- グローバル企業

上図は、附属坂戸高等学校を拠点校とし、筑波大学が管理機関となって次世代の人材育成システムに取り組む構想図である。3年間のWWLコンソーシアム構築支援事業を活用し、10年後の姿を想定してステップアップしていく実践を表現している。

筑波大学のスクールカラーである紫色の箇所は、筑波大学の国際展開力と専門性や国際機関を十分に活用した拠点校と連携校の取組で、本事業ならではの壮大な次世代人材育成プログラムを表している。

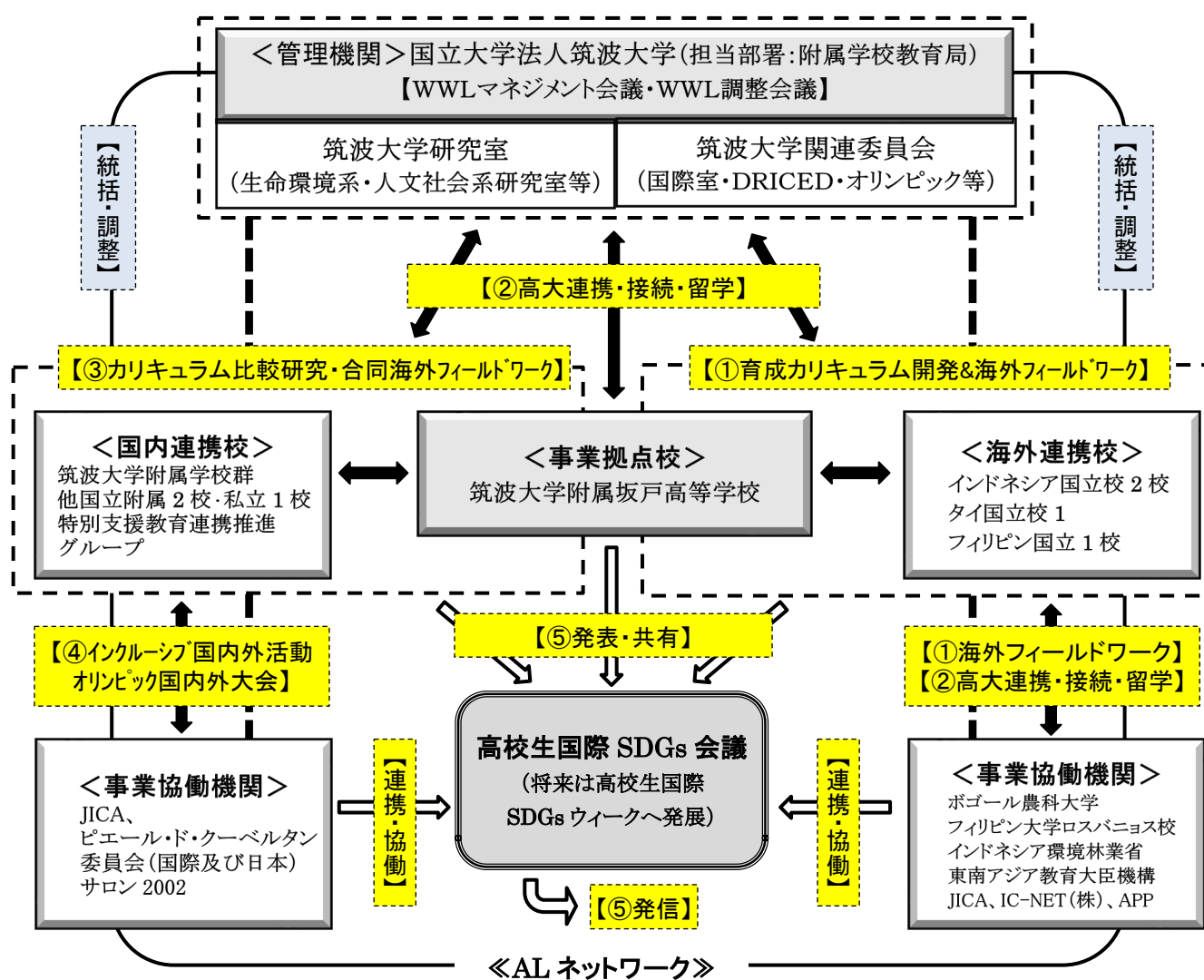
緑色の箇所は、拠点校である附属坂戸高等学校で実施する取組で、日常の授業と国内外のフィールドワークを連動させた次世代の人材育成を目指したカリキュラム開発を表している。特に、国際社会で設定されたSDGs17目標を中心に、地球規模課題に対して当事者として問題解決に取り組む姿勢の涵養を重視している。

グローバル化した国際社会での中等教育では、複数の国内外の学校が国際展開力のある大学や国際機関と連携しながら、次世代の人材を育成する新たなカリキュラムの開発が求められている。上記の両取組を通して、少しでも国際社会に貢献できる教育手法の開発と発信、そして共有を推進したいと考えている。

2 5つの柱とALネットワーク

本事業では持続可能な国際社会を創る人材育成のために、WWL事業として5つの柱になるプロジェクトを設定し、それらを達成するためにALネットワークを組織した。特に、管理機関では附属学校教育局がネットワーク全体を統括・調整し、プロジェクトごとにその目的に合う関連部署(研究室、センター、委員会等)を配置し、共同で事業を推進する体制を整備した。国内海外の連携校については、その学校の特色を考慮して担当するプロジェクトを定め調整を行った。

- ① 附属坂戸高等学校（事業拠点校）での国内外フィールドワークを取り入れた体系的な探究型カリキュラムを開発する。
- ② 国内外の大学との連携を図り、留学生派遣と受入れの推進、先取り履修等の接続を視野に入れた高度な学習を可能にする学習環境を整備する。
- ③ 事業連携校とグローバル人材育成システムに関する情報交換と比較研究、教員研修も兼ねた合同海外フィールドワーク（オーストラリア・タスマニア州）等により成果を検証する。
- ④ 筑波大学の特色である「オリンピック・パラリンピック教育」と「インクルーシブ教育」を通じたマインドセットを涵養し、国内外の活動や国際大会への参加を推進する。
- ⑤ 高校生 SDGs 国際会議を開催して成果を発表して共有し、社会に発信する。



3 令和3年度の年間計画とコロナ禍での変更

2021年度WWL事業年間計画と実績					
筑波大学(拠点校附属坂戸高校と連携校)の事業					
事業内容	事業全般			オンライン	代替措置
	①	附属坂戸高校での海外フィールドワークを取り入れた探究型カリキュラム開発			
	②	附属坂戸高等学校での高大連携と高度な学習環境の整備等			
	③	カリキュラム比較研究および合同海外フィールドワークの開発			
	④	オリンピック・パラリンピック教育とインクルージブ教育の推進と発信			
	⑤	高校生SDGs国際会議の実現			
6月	6/1 第1回WWL調整会議 → メール会議(筑波大学の回線不通による)			△	
	6/8 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム日本代表研修 → オンライン開催 第13回キプロス大会が2022年10月に延期され、2021年に派遣予定だった日本代表者を対象に研修会を実施した。			○	○
	6/30 WWL・SGHネットワーク連絡協議会(文部科学省・筑波大学共催) → オンライン開催 司会進行:附属学校教育局 発表:附属坂戸高校 参加:附属視覚特別支援学校、附属高校、学大附属国際中等教育学校			○	
7～9月	7/14～17(長崎のみ16日まで) 国内フィールドワーク(2020ASEAN校外学習の代替措置) → 実施 附属坂戸高校2年生全員が4グループに分かれて、長崎県西海市(37名) 静岡県掛川市(16名) 山梨県笛吹市(26名) 長野県飯田市(62名)を訪問し、フィールドワークを通して相互理解と問題解決に重要な当事者性を養う。				○
	7～8月 国際フィールドワーク(インドネシア)→ COVID-19感染拡大により中止 附属坂戸高校2～3年生の代表7名が、「インドネシア100年の森」をモットーに、インドネシア人の生徒と協力しながらグヌン・グデ・パンランゴ国立公園周辺地域の森林環境をより良くするための活動を考え実践する。				×
	8/9～12 国内フィールドワーク@那須(アジア学院)対象:希望者→ COVID-19感染拡大により中止 海外の農村指導者を養成する機関を訪問し、農業実地体験等を通して世界の農村リーダーたちと交流する。				×
	9/14 第2回WWL調整会議 → オンライン開催			○	
	9/21～23 国内フィールドワーク(新潟県阿賀町)対象:希望者→ COVID-19感染拡大により中止 附属坂戸高校1年生希望者が新潟県阿賀町を訪問し、フィールドワーク(2泊3日の民泊)を通して、日本の将来の課題を発見し、日本の視点からその課題に取り組む。				×
11月	11/20 第3回運営指導委員会・検証委員会	11/20 午前 高校生国際ESDシンポジウム(ホスト:坂戸高校) → オンライン開催		○	
12月	12/19 全国高校生フォーラム(文部科学省・筑波大学共催) → オンライン開催 参加校は、附属坂戸高校及び連携校4校:附属高校、学大附属国際中等教育学校、カセサート大学附属高校(タイ)、フィリピン大学附属ルーラル高校			○	
	12/25・26 日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム(兼日本代表選考会)→ オンライン開催			○	
2月	2/12 第3回WWL・第25回総合学科研究大会 → オンライン開催			○	
	2/25 第3回WWL調整会議 → オンライン開催			○	
3月	3月 ASEAN校外学習(インドネシア、タイ、シンガポール・マレーシア)→ 代替措置として国内FW(3/15～18)→ 中止 附属坂戸高校1年生全員を対象にした海外派遣(国際フィールドワーク)で、インドネシア、シンガポール&マレーシア、タイ国の希望する国に海外派遣し、現地でのフィールドワーク。				×
	3月 国際合同フィールドワーク(豪州タスマニア州)→代替措置として長崎FW教員研修(3/15～17)→ 中止 管理機関、拠点校、連携校の教職員				×

Ⅱ 附属坂戸高等学校（拠点校）での 探究型カリキュラム開発

1 附属坂戸高等学校のカリキュラムの考え方

附属坂戸高等学校は総合学科の学校である。平成3年4月の第14期中央教育審議会答申の「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」の中で、今後の高等学校のあるべき姿として、

- ①量的拡大から、個々の生徒の特性にきめ細かく対応する質的拡大へ、
- ②形式的な平等から多様な生徒の個性に応じて多様な選択ができる実質的平等へ、
- ③偏差値偏重から個性尊重・人間性重視へ、

があげられた。

これを受けて、平成5年2月に、高等学校教育の改革の推進に関する会議から「総合学科の設置」について提言がなされ、平成6年度より総合学科高校が開設されることとなった。本校は平成6年度に開設された初年度校7校の一つである。総合学科高校は、「多様な選択科目の設置（課外活動を含む）、柔軟な単位認定、能力・適性等に対応した教育」によって、多様化と個別化を実現すること、また「様々な人やものとの関わりを通したキャリア意識の醸成、学びのためのガイダンス科目の設置」など、学ぶためのガイダンス機能の充実がその特徴である。この教育を通じて、生徒に自己肯定感（self-esteem）とそこを基盤として生み出されるエネルギー（empowerment）により、自分の内面（興味関心や価値観）および外側（他人や社会、国、世界）にあるものと主体的に関わる態度や資質・能力を育てることを目指している。別の表現をすれば、総合学科教育は「当事者性」を求める教育ともいえる。自分はナニモノで何を求めているのかなど自分を追究しようとする人材、つまり自分自身に対する当事者となること、また自分が社会の中で果たすべき役割は何かということを自律的に考える人材、つまり自分の外側に対する当事者となること、この二つの当事者性を持った人材を育てる教育が総合学科の価値といえる。本校は平成6年に総合学科を開設して以来、四半世紀にわたって総合学科教育の在り方について実践研究を重ねてきた。その中で、一貫して大切にしてきたことは、「学校が社会から切り離された特別な場所、ということではなく、学校が社会や人々とつながり、生徒も教職員も同じ時代をいきている主体者となって存在することを前提とし、この社会の幸せをとともに実現していくための力を身につけていく場所である」という考え方である。

では、その当事者性をどのような教育を通して育成しようとしているか。

図1を参照いただきたい。本校では総合学科の基本的な学びの枠組みを利用している。1年生では科目「産業社会と人間」を中心に自分の事をみつめ、2年生では「総合的学習の時間（本校ではT-GAPと呼んでいる）」で社会との関わりを広げ、3年次では「卒業研究」を通して、自ら学ぶ人間になっていく、3年間を通した、探究を軸とした一貫カリキュラムである。この図に示しているように、学校の教育が探究活動中心であるということが大きな特徴である。特に高等学校においては、教科科目の「主張」により、教育課程が組み立てられていくものと思われるが、本校では教科科目もこの探究活動を支えていくためのいわばパーツと考えている。

本校では15年ほど前からインドネシアのボゴール農科大学附属高等学校との交流を皮切りに、グローバル教育を推進してきた。SGH（スーパーグローバルハイスクール）やWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業などの、文部科学省の事業もその一つである。また、2017年からはIBDP（国際バカロレアディプロマプログラム）の認定校となった。このようなグローバル教育の推進は、別に用意された教育コンテンツを本校の教育活動にとってつけた、ということではない。本校ではグローバル教育の大切な要素と総合学科で実現させたい価値は、基本的に同じであり、それぞれは非常に親和性の高いものと認識している。

石井(2017)※は、「グローバル化は、国家による統治機能を弱める一方で、一国を越えた国際的な協議や統治を求めます（上方統合）。逆に、国家が担ってきたパブリックな領域の分権化も進み、市民活動等

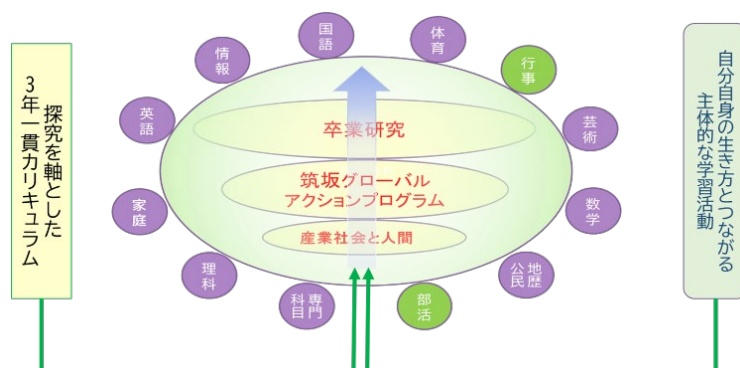


図1 本校カリキュラムの概念図

への参加を通じた地域コミュニティの再構築やローカルな意思決定・秩序の確立・民衆自治が今まで以上に重要となります（下方拡散）」と述べている。現代社会を生き抜くためには、「状況をよく観察し」「自らが判断し」「行動し」「振り返り」またさらにそれを繰り返す、そのような態度が必要である。これはまさに時代を生きる当事者としての態度に他ならない。グローバル教育の大切な要素、それもまた総合学科教育が大切にしている価値と同じであると言える。グローバル教育はともすると、英語力の向上をすればよい、とか、海外との交流を増やせばよい、という話になってしまうこともあるが、本校においては全く違った考え方である。総合学科教育の実践は、グローバル人材育成にもダイレクトにつながるものである、と考えている。自分が自分自身の当事者となること、そして、社会とつながる自分の役割を認識して、世の中に対する当事者となること、これが本校の人材育成の目標で有り、そのこと自体がグローバル人材育成につながっていくものと考えている。本校ではこの考え方を基本として、人材の育成を進めている。

※（石井英真、今求められる学力と学びとは、日本標準、2017、p.17）

2 各プログラム・科目のカリキュラムにおける位置付け

本校のカリキュラムの柱は1年次「産業社会と人間」、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」の継続した学習である。SGH 事業ではこのカリキュラムの柱に、グローバル人材の資質・能力の育成という視点を導入する目的でいくつかのプログラムを追加した（図2）。WWL 事業ではSGH 事業から引き継ぐプログラムとして「グローバルライフ」「国際フィールドワーク」「海外卒業研究支援」「インドネシア語」、WWL 事業で新たに追加したのが「阿賀町校外学習（国内フィールドワーク）」である（SGH 事業の1つである「国際フィールドワーク入門」は国内フィールドワークに統合した）。



図2 SGH、WWL 事業で教育課程に位置付けた事業

3 各プログラムについて

(I) グローバルライフ

1. はじめに

本校の WWL では、グローバルイシューに対して「当事者性」をもって取り組んでいくこと、そのためには様々な現場を訪れ1次情報に触れることを重視している。しかし、すべての高校生がそのような多くの現場で学ぶことはできない。そのため、「グローバルライフ」では、すべての生徒がグローバルな課題と向き合い、世界の諸課題に対して当事者として関わっていける素養を身に付けるために（地球市民性の醸成）、高等学校必修科目である「家庭基礎」をベースに開発を行っている。本科目は1年次生の必修科目として2単位で設置している。

本科目を WWL の基礎科目として開発するに至った背景に、「国際問題」「グローバル化」といった事柄に対して、一部の特別な人が関わるものだと考え自分事としてとらえられない生徒、そして教員も少なからずいる現状があげられる。この課題を解決するために、「日常生活がすでに世界とつながっている。これからは、誰もが世界とのつながりを考えたうえで生活をする必要がある」という当事者意識を芽生えさせる必要があると考えた。これを学校教育のなかで実現するには、生活課題から問題意識を育む家庭科の果たせる役割は大きく、そして家庭科と他教科が協働することでその可能性をさらに広げられるという考えのもと、本科目を SGH から引き続き実施している。

本科目の学習目標は、学習指導要領「家庭基礎」の目標に地球市民性を育むため、1) 日常生活の中から世界とのつながりを意識させること、2) 地球規模で考え、地球に暮らす一人としての意識を持たせることの2点を追加した。さらに地歴公民科、外国語科、国際科、農業科、工業科など複数の教科の教員で授業案の作成や授業運営を行った。今年度は4名の教員で授業を担当し、4クラス同時並行のローテーションで授業展開を行っている。

2. 本科目のカリキュラムデザイン

上記のような科目開発の背景をふまえ、本科目は目標を次のように設定している。

「人の一生、生活に関する学びを地球規模で考え、地球に暮らす一人としての意識を持たせる。家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得していく中で、日常生活の中から世界とのつながりを意識し、自分の生活、家庭、地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」

さらに、生徒に身につけてほしい力を次のように設定した。

「日本と世界とのつながりを理解し、これからの自分の生活を創造するための3つの力を身につける」

- 1) 日常生活の先にある世界を想像できる力
- 2) 日常生活から世界の課題を発見できる力
- 3) 自分の考えを他者に伝え相互に共有できる力

本科目は1年次における必修科目であるため、まずは私たちの生活が世界とつながっていることを「知る・気付く・理解する」という活動が多い。認知段階としては低次の段階であるが、各分野において行うグループワーク、相互インタビュー、ディベート、観察実習、情報収集・分析などの活動によって、高次の認知段階への到達を目指す。グローバルな課題の解決は容易ではない。だが、そこで諦めることなく「私にできること」を考え続ける・自分事によって地球市民性を醸成していきたい。

3. 食分野における実践とカリキュラム上の位置づけ

開発のベースとしている「家庭基礎」における学習分野は多岐にわたるが、本科目では、家庭基礎で身につけさせたい概念などをふまえつつ、生徒にとって実感しやすく発展的に考えるという点を考慮し「衣分野」「食分野」「共生社会分野」「生活とグローバル課題」という4分野に絞り、開発してきた。本科目では、いかに“自分のこと”としてとらえられるかを大切にし、身近なことから考え続けていくことを願い、題材を選定している。

本科目の年間計画の概要は下記の表の通りである。各分野における学習は、5回分で構成している。

	A組	B組	C組	D組
1学期	ガイダンス			
	衣	食	共生社会	生活とグローバル課題
	～やさしい日本語で伝える～			
	勝浦信幸先生講演「地域社会における外国人との関わり」			
	考查			
2学期	食	共生社会	生活とグローバル課題	衣
	考查			
	共生社会	生活とグローバル課題	衣	食
	考查			
	生活とグローバル課題	衣	食	共生社会
3学期	1枚の写真から自分の日常生活と世界とのつながりを考えてみよう			
	考查			

今年度は、食分野の授業を公開する。食分野の単元計画と目指すべき認知段階は下記の通りである。

具体の学習活動	手段	目的知	
日本食の現状: 私たちの日常食の現状について理解する 私たちが日常でよく食べる"日本の料理"について、他者と意見交換しながら料理の何を説明すると伝わるかを考え情報収集をし、食の多面的要素に気づく。	講義	理解	概念知
	グループワーク	情報収集 発表	方法知
私たちの日常食と日本の食料自給率: 食料自給率の推移を私たちの食生活の変化を中心に理解する。	講義	自己の生活 ふりかえり	メタ認知
		理解	概念知
私たちの食料と水: バーチャルウォーターや世界の穀物消費の内訳から私たちの食生活が世界に及ぼす影響を理解する。	講義	理解	概念知
私たちの食生活と食品ロス: 食品ロス問題に危機感をもつために必要な知るべきことを考える。 食品ロスを自分事にするためには、まず私たちは何を知るべきか。 私たちにできることは何かについて発表する。	話し合い	他者との 協働・自己の 生活認識	メタ認知
	発表	情報収集・ 資料作成	方法知

食分野における学習は、私の「食」生活をみつめることから始め、世界へと視野を広げていき、最後に改めて日本の食・私の食について考えていくことができるような展開とした。和食とは何か？から始め、和食をどのくらい食べているか、私たちの食事の変化、米の消費量の減少から食料自給率、バーチャルウォーター、世界における食料分配の不均衡へと学習を進めた。そのうえで、世界とのつながり無しには成り立たない私たち日本の食の実態に無駄はないかという視点で食品ロスをとらえさせた。

家庭科の学びは「私」の生活を起点に学習する。グローバルライフにおける学びにおいても、まずは私の生活を振り返り認識することは課題を発見し、自分に関係のあることとして考えていくために欠かせないと考えている。単元の流れを目指すべき認知段階の観点から大まかに整理すると、まずは自分の生活がどのようなものであるかを振り返り（メタ認知）、日本の食生活の変化や世界への影響を知り（概念知）、私たちの食生活の課題を自分に引き寄せて考えるにはどうしたらよいか、食品ロスを題材としてグループで意見交換しながらまとめ、発表する（方法知）をとらえられる。食分野に限らず、グローバルライフの学習では「私」や「私の生活」と学ぶ事象を往還させながら、「私にできること」を考える機会が多い。また本科目での学びを基礎にして、他教科・科目においても考え続けることで、高次の認知段階に到達することを期待している。

(第3回 WWL 研究大会第25回総合学科研究大会資料集より抜粋)
(横瀬 友紀子)

(Ⅱ) 4つの国内フィールドワーク

WWLの構想段階においては、1年次学年末に「ASEAN 校外学習」を実施し、1年次の段階で全員が海外で社会課題に携わる人物や団体を訪問することができるよう準備していた。だが、COVID-19の流行により、海外渡航を断念せざるを得なくなった。そのため、代替措置として急きょ「国内校外学習」を企画立案し、実施までこぎ着けた。現2年次生を対象に実施した内容を簡単に報告する。

【概要】

ASEAN 校外学習が中止に追い込まれたため、代替措置を国内にて検討してきた。できる限り、WWLの研究開発構想に沿う形で行先、及び体験内容を検討してきた。その結果、4方面に分かれて国内校外学習を実施する運びとなった。

①目的

- ・国内外において社会課題の解決に携わる人物、団体を訪問し現場で話を伺うことによって、「T-GAP（総合的な探究の時間）」のアクションへの示唆を得ること。
- ・問題発見・解決の現場で何が行われているか調査し、課題に対する当事者性を高めること。
- ・WWLの研究開発構想の一つであったASEAN 校外学習の代替措置とすること。

②参加生徒

2 年次 150 名（IB 生を除く学年全員）

③日程

【長 崎】2021 年 7 月 14 日（水）羽田発－2021 年 7 月 16 日（金）羽田着

【その他】2021 年 7 月 14 日（水）学校発－2021 年 7 月 17 日（土）学校着

④方面及び運営に関して

旅行会社	IC-NET&HIS		JTB	
行先	静岡県掛川市	長崎県西海市	山梨県笛吹市	長野県飯田市
生徒人数	16 名	37 名	26 名	62 名

⑤方面別の特徴

<Ⅰ>静岡県掛川市

静岡県と言えば名産品はお茶であるが、お茶の出荷量は減少傾向にある。また、人口減少も待ったなしの政策課題である。本コースは、お茶を活用した社会課題の解決に取り組む農家を訪問し、ビジネスアイディアの創出を通じて、社会課題を解決するためのきっかけを得る。そして、立案したビジネスアイディアを最終日に農家や市役所の方にプレゼンし、フィードバックを得る。

<Ⅱ>長崎県西海市

地域資源の活用は、地方創生を考えるうえで鍵となる。では、地域の人たちは地域資源を如何にして活用し、地方創生に取り組んでいるのだろうか？ 本コースは、長崎県西海市で民泊事業を通じて地方創生に取り組む団体、及び民泊受け入れ家庭を訪問し、地域資源の活用と地方創生について体験的に学習する。

<Ⅲ>山梨県笛吹市

石和温泉を有する笛吹市は、COVID-19 の感染者が少なく、学校旅行の受け入れ件数が徐々に増えつつある地域である。しかしながら、石和温泉は主に団体客向けの観光旅行を受け入れてきた温泉街であり、学校旅行を受け入れた実績は決して多くはない。そのため、本コースは生徒がフィールドワークを行い、笛吹市に対して学校旅行の提言を行うことを目的とする。最終日のプレゼンの後、笛吹市役所の職員よりフィードバックを得る。

<Ⅳ>長野県飯田市

南信州はグリーンツーリズムの訪問地として高い評価を得ている。2017 年には農業体験を通じて、その土地の文化や自然を学ぶことができる「農家民泊」が評価され、「COOL JAPAN AWARD 2017」を受賞した。生徒は、グリーンツーリズムや農業の六次産業化に取り組む農家及び団体を訪問し、農業の視点から地域創生について体験的に学習することができる。また、地域文化の継承や国際交流に取り組む団体にも訪問し、本校科目群の学びに対応した訪問先となっている。

【Ⅲ】「T-GAP」

1. はじめに

1-1 「T-GAP」の位置付け

「T-GAP」は本校 2 年次の必修修科目で「つくさかグローバルアクションプログラム」の頭文字を取ってつけられたもので、本校が SGH を実施するにあたって開発された科目の 1 つである。本校のキャリア教育・課題解決型学習の基幹を担う科目として、「総合的な学習の時間」に実施している。

本校の特徴的なカリキュラム開発上の重点として、3 年間を通じた全校的なキャリア教育の取り組みが挙げられる。1 年次「産業社会と人間（以下、「産社）」、2 年次「T-GAP」、3 年次「卒業研究（以下、「卒研）」の一連の流れの中でキャリア形成に資する基礎的・汎用的能力（2011、

中央教育審議会)を総合的に育成することが目指されている。そして、そうした能力の中でも、近年では「課題対応能力」に注目が集まっている。「T-GAP」は、生徒たちが社会課題を発見・設定し、高校生ができる解決策を考え、グループで協働してソーシャル・アクションを実行することに重きを置く。このような課題設定・情報収集・問題解決・まとめのサイクルを繰り返すことで、「卒業研究」への接続を担っている。

1-2 本年度の基本計画

(1) 「T-GAP」の目的

まず、本年度の「T-GAP」の目的を次のように設定した。

- [1] 自らの興味・関心を元に社会課題を設定し、解決の為の方策を考え、実行すること
- [2] 目的に向けて、他者に働きかけ、協働すること
- [3] 設定した社会課題がグローバルな課題であると理解すること
- [4] 活動内容を適切な様式で表現すること

これらは、本校でこれまでに実施されてきた「T-GAP」の目的を踏まえて設定をした。科目開発が進められる中で、生徒の実態や世の中の状況に応じてどの資質・能力の育成に焦点を当てるかは該当年次によって特徴が見られる一方、授業の大きな枠組みや科目目標に大きな違いは見られない。特に下記のように令和元年度からは文言もほぼ統一されており、ここからも本校の探究が「基礎的・汎用的能力」の課題対応能力、人間関係形成・社会形成能力に力を入れていることが分かる。さらに、平成22年度の目標には「アジア地域、特にASEANに関する基礎的・基本的な理解を図りながら、国際的な日本の立場や役割について考察できる視点」と国際的視野が明文化されていたが、令和2年度から「グローバルな課題であることを理解する」という言葉で再び目標の中に戻されている。

【令和2年度】

- [1] 自ら社会課題を設定し、解決のための方策を考え実行することができる。
- [2] 設定した社会課題の解決に向けて、グループで主体的・協働的に取り組むことができる。
- [3] アクションの過程・結果から、更なる課題を設定することができる。
- [4] 活動内容を適切な様式で表現することができる。
- [5] 設定した社会課題がグローバルな課題であることを理解することができる。

【令和元年度】

- ①社会課題を設定し、解決の為の方策を考え、実行すること
- ②目的に向けて、他者に働きかけ、協働すること
- ③活動内容を適切な様式で表現すること

また、生徒150名及び教員が常にこの目標を共有しながら指導に当たることができるよう、以下のような項目別のゴールも設定した。令和元年度、2年度の実践報告の中で担当教員の負担感に関する課題が挙げられていた。もちろん、この課題は様々な背景があるもので一概に同じものとは言えないが、今年度は事前に活動過程や意識してほしいことなどを示すことで、各チームがどの段階まで進んでいるか、今後どのように進めていくべきかなどを互いに共有しやすくなると考え、教員の指導上の負担感を減らすことができなかと考えたためである。

【表 1】

	ステップ1	ステップ2	ゴール	20%でも行けたら…なゴール
表現	報告書内で、段落作り、正しい引用、参考文献の書き方ができる。	書くべき内容を適切に選択し、言語化することができる。	章立てをし、章に合わせて内容をまとめることができる。	
課題発見	SDGsやインターネットを通じて、「社会」に溢れている課題を発見できる。	自分たちが関わることのできる（「自分の半径1m」にある）課題に気づくことができる。	自分たちが取り組むべき（取り組みたい）、大きすぎない課題設定ができる。	具体的な「困り感」や「対象」を想定できる課題設定ができる。
課題解決	ビジョン（活動のゴール）をイメージできる。	ビジョン（活動のゴール）へのミッション・タスク（道筋・必要なツール・手立て）を想定できる。	ミッション・タスクを基にして、活動を実行することができる。	ビジョン・ミッション・タスクを基に、活動を振り返ることができる。
グローバル	「グローバルって何??」 課題をグローバルな視点でとらえる力をつけてほしい…と思っています。でも、「グローバル」の意味は一人一人違うのかも??この1年間で一緒に考えていきたいなと思っています。			
協働性	自分のWILL（らしさ・意思）を持つ。	他者のWILL（らしさ・意思）を知る。	他者と自分のWILLを掛け合わせて物事に取り組む意識を持つ。	

アクション I の目的確認

	ステップ1	ステップ2	ゴール	20%でも行けたら…なゴール
表現	報告書内で、段落作り、正しい引用、参考文献の書き方ができる。	書くべき内容を適切に選択し、言語化することができる。	章立てをし、章に合わせて内容をまとめることができる。	
課題発見	SDGsやインターネットを通じて、「社会」に溢れている課題を発見できる。	自分たちが関わることのできる（「自分の半径1m」にある）課題に気づくことができる。	自分たちが取り組むべき（取り組みたい）、実現可能な課題を設定することができる。	具体的な「困り感」や「対象」を想定できる課題設定ができる。
課題解決	バリュー（活動のゴール）をイメージできる。	バリュー（活動のゴール）へのビジョン（道筋・必要なツール・手立て）を想定できる。	バリュー・ビジョンを基にして、ミッション（活動）を実行することができる。	バリュー・ビジョンを基にした、ミッション（活動）を振り返ることができる。
グローバル	「グローバルって何??」 課題をグローバルな視点でとらえる力をつけてほしい…と思っています。でも、「グローバル」の意味は一人一人違うのかも??この1年間で一緒に考えていきたいなと思っています。			
協働性	自分のWILL（らしさ・意思）を持つ。	他者のWILL（らしさ・意思）を知る。	他者と自分のWILLを掛け合わせて物事に取り組む意識を持つ。	

皆さんに身に付けてほしい力の段階

	ステップ1	ステップ2	ゴール	20%でも行けたら…なゴール
表現	報告書内で、段落作り、正しい引用、参考文献の書き方ができる。	書くべき内容を適切に選択し、言語化することができる。	章立てをし、章に合わせて内容をまとめることができる。	
課題発見	SDGsやインターネットを通じて、「社会」に溢れている課題を発見できる。	自分たちが関わることのできる（「自分の半径1m」にある）課題に気づくことができる。	自分たちが取り組むべき（取り組みたい）、実現可能な課題を設定することができる。	具体的な「困り感」や「対象」を想定できる課題設定ができる。
課題解決	バリュー（活動のゴール）をイメージできる。	バリュー（活動のゴール）へのビジョン（道筋・必要なツール・手立て）を想定できる。	バリュー・ビジョンを基にして、ミッション（活動）を実行することができる。	バリュー・ビジョンを基にした、ミッション（活動）を振り返ることができる。
グローバル	「グローバルって何??」 課題をグローバルな視点でとらえる力をつけてほしい…と思っています。でも、「グローバル」の意味は一人一人違うのかも??この1年間で一緒に考えていきたいなと思っています。			
協働性	自分のWILL（らしさ・意思）を持つ。	他者のWILL（らしさ・意思）を知る。	他者と自分のWILLを掛け合わせて物事に取り組む意識を持つ。	

【図 1】生徒への共有例

これらの目標を踏まえて、資料 1 のように年間指導計画を作成した。指導計画作成に際しては、過去の実践によって「（研究的な）リサーチスキルの指導不足（平成 30 年度、令和元年度）」「レポート作成スキルの指導不足（令和 2 年度）」などが挙げられており、今年度も同様に時間確保が難しい中ではあったが、「中間報告レポート」から「最終報告レポート」へと、段階的に「書く力」の指導・育成ができるよう指導内容を意識した。さらに、これまでに実践されていた、「アクション I」「アクション II」と二段構えでの実施も継続した。「アクション I」は活動の実施に必要な知識やスキルを習得することを目的としたもので、「アクション II」では実際に自分たちの身近なところで課題解決のための行動を起こす。課題探究型学習の経験があまりない生徒らにとって、アクション I は情報収集の機会となると共に自身が実際にアクションする前に必要なスキルの習得ができるという点で効果的なものとなっている。以下、1 年間の流れに沿って授業の詳細について説明していく。

2. 指導の実践

（1）クリエイティブ思考入門（3 月末）

本校では 1 年次の終わりに「海外 3 カ国校外学習」の機会が設けられ、その中で「個人研究」として、それぞれが課題を設定し、現地で「何らかの調査」をする活動を行っていた。活動を設定するねらいとして、本校研究紀要第 57 集「令和元年『T-GAP』実践報告」に、以下のように説明されている。

- ① 探究学習の初歩を経験し（「失敗」を含め）得た課題や知見を相互にフィードバックすることで「探究」が主となる「T-GAP」の導入とすること

- ② 難度の高い「海外での調査」を先に経験することによって、本年度、「国内で」の活動にかかる心理的な負担を相対的に軽減し、諸活動の活性化を促すこと

本学年ではコロナ禍により海外だけでなく国内での校外学習実施も延期となったため、別の形で「T-GAP」導入に向けた活動を実施することを検討した結果、校内教員からの紹介でデザイン事務所 Cauz 代表の芝哲也先生、一般社団法人クリエイティブ思考協会理事の大川陽介先生を講師にお招きし、「クリエイティブ思考入門」を行うことができた。芝先生には、「アイデア出し」として、課題の設定から解決策を見つける（コンセプト・コンテンツ作り）まで一通り経験する体験、大川先生には今までの自分を振り返り、自分の WILL（意志）を語る活動をお願いした。

1 年次の反省として、密回避のため例年よりも産社の授業でグループ活動を取り入れることができないというものがあった。上記の活動は全てグループ単位で実施をしたため、班のメンバーに自分の意見を伝える、意見をまとめる練習として良い機会となった。また、自分の WILL を語る場面では、語る側はもちろんのこと、聞く側が「場の作り方・深掘りの仕方」を学ぶことができたことは生徒にとっても大きな収穫である。「T-GAP」では、互いに今まで話したことのない者同士がチームを組む可能性もある。自分の意見をしっかりと伝えることはもちろん大事だが、互いのことを良く分かっていない状況で他者の意見を引き出し深めながら計画を立てるスキルは、アクションを進めていく上でも社会でも必要なものとなる。教員としても、生徒からアイデアを引き出すためのワークシートや声かけなどを学ぶことができた。生徒同士はもちろん、生徒教師間でも協働して探究活動を進めていく手順を共有し意識化できたことが T-GAP での生徒の成長につながったと考えられる。

（２）アクションⅠ（４月～５月末）

アクションⅠにおける最大の目的は、「グループを組みテーマを決めるところから、アクションを行うところまで、一度、PDCA サイクルをまわしてみる」ことであった。T-GAP は総合的な学習の時間に位置づけられる科目であるが、探究の要素が強く実際にアクションしなければならない本科目と、中学校までの「総合」とで、学習スタイルが大きく異なることへの戸惑いを感じる生徒も多い。そのため、アクションⅠで一度、PDCA サイクルをまわし、アクションの全体像を理解したうえでアクションⅡへ移行する展開とした。ただし、アクションⅠを終えてふり返った際、自らのグループのアクションを肯定的に捉えたり、上手いかずに悔しさを覚えたりしたグループは、アクションⅡを同じメンバー、テーマで行うことも認めている。アクションⅠでは、第一に過去のアクション事例の紹介を行った。生徒に具体的な学習のイメージを持たせることがねらいである。その上で、T-GAP と次年度に実施の卒業研究、そして進路活動とを関連づけさせるためのスケジュール案を作成・共有し、アクションの深度をイメージさせた。

第二に、自分の興味や身近な課題について書き出す「マンダラワード出し」を実施し、関連する分野での仮テーマ設定を行った。第三に、似たテーマを設定した生徒どうしてグループを組み、テーマの精度を上げるとともに外部団体と協働してアクションをする活動の、第一弾を実施した。なお、グループを組むことができない場合は教員側で設定した。このときの協働先との連携が、アクションⅡにまで継続している生徒が多数いる一方で、この段階では調べ学習に終始しているグループも一定数存在した。そこで、アクションⅠのふり返りをするとともに、他グループと比較して自分たちのグループの進捗を知りスケジュールを見直すために、アクションⅠ発表会を実施した。発表会で教員が確認したいのは、「身の回りにある課題を設定し、当事者としてアクションできている（アクションする準備ができている）かどうか」である。アクションの内容を自己評価する機会であると同時に、テーマ設定が妥当であったか判断する目的でもあった。

卒業までのスケジュール

2 年生												
4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	
アクションⅠ	Ⅰ→Ⅱ	アクションⅡ	まとめ			卒業研究						

3 年生												
4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	
分析・まとめ						最終報告会						
志望理由書						試験本番						
志望理由書・面接練習（・小論文練習）												

【図 2】生徒に提示したスケジュール表

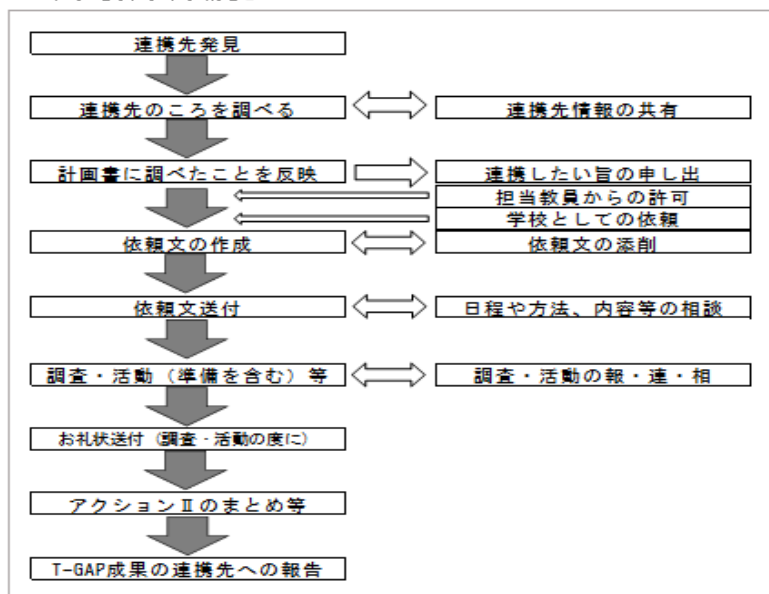
連携先へアクセスするために

～連携先へアクセスする際の手引き～

★大事なこと★

- ①連携先はT-GAPに協力して下さる立場。
- ②担当教員との報告・連絡・相談を密にする。
→「今、何をしているか」を担当教員が把握できているようにする。

1. アクセス時の手続き



【図 3】 連携先への手続き表

（3）校外学習（7月）

本校の校外学習の位置付けについては「（1）クリエイティブ思考入門」にて述べた通り、探究学習の導入的役割やインターネットや書籍だけでは得られない一次情報の収集・体験をするという目的があった。しかし、本学年では校外学習の時期を2年次7月に延期したため、特例的に校外学習の位置付けを考え直さなければならなかった。そこで、国際研究推進委員会（以下、CIS）や研究部と協議をした上で、昨年度に経験できなかった一次情報の収集・体験という目的はそのまま継続し、新たに「①実際に社会課題の解決に取り組んでいる大人に接して、そこから学んだことを自分たちのアクションに活かす」、「②自身のアクションについて、地域の方からフィードバックをいただく機会とする」という目標を加えた。

設定の背景には、校外学習から戻ってきてすぐに活動に移る生徒たちにとって自身の探究活動のヒントを得る機会にしてほしいと考えたこと、多くのチームが外部団体との協働を計画していたため学外の大人からフィードバックを受けることで外部団体とのやりとりの練習になるのではという教員側のねらいがあった。

今回はコロナ禍の実施ということで、人数の分散を図るために長崎県西海市コース、長野県飯田市コース、静岡県掛川市コース、山梨県笛吹市コースの4地域に分かれて実施をした。緊急事態宣言が出される前ではあったが、この時期に実施をするに辺り、引率者を含めた全員が2週間前から健康チェックを行い、また旅行中も毎朝検温を実施した。ホテルも一人一部屋対応で、感染拡大防止に努めた。全員が感染防止に努めながら実施した結果、新型コロナウイルスの感染者はもちろん、体調不良者を1名も出すことなく終わることが出来た。保護者・生徒の意識はもちろんのこと、受け入れ先の配慮や旅行会社の準備等のおかげであることは間違いない。この場を借りて御礼申し上げたい。本資料集では、長崎県西海市コースと山梨県笛吹市コースについて紹介する。

長崎県西海市コースは、7月14日から16日までの2泊3日で実施した。本コースでの学びの目的は、以下のとおりである。

- ①長崎市内において平和ガイドの方と行動を共にし、「平和をつくる」ために自分自身には今、何ができるかの具体的なアクションを考えること（1日目）。
- ②無人島・田島や民泊をとおして、地域資源を活用した地方創生の実践事例を体感し、T-GAPのアクションに活用すること（2日目）。
- ③西海市の位置する西彼杵半島の発展に尽力したド・ロ神父の関連遺産群の見学をとおして、地域の課題をどう発見し、解決のために住民と協働するのか理解すること（3日目）。



【図4】長崎県西海市コース集合写真
(筆者撮影)

初日では、長崎市内（平和公園、原爆資料館）における平和学習を行い世界や長崎の歩んできた歴史を地元のガイドの経験談を踏まえて学習した。本来は、「平和をつくる」ためにできるアクションを話し合う機会を設ける予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため Microsoft Teams を活用して感想の共有を図った。多くの生徒が平和をはじめ現代社会の抱える諸問題の解決とよりよい社会の実現のためには「当事者」になることが重要だと認識することができたようである。2日目には、地域資源を活用した地方創生の現場を訪れた。まず訪問したのは、大村湾に浮かぶ無人島・田島である。田島は地元では「何もないところ」と認識されていた。現在は、地元の若者が観光促進につなげようと、かつて使われていた古民家を利用した「冒険の場」を設けており、「何もない」を「何でもある」に変える活用法を学ぶことができた。午後には海や森林などの地域資源を活用した民泊に取り組む8家庭をグループごとに訪れ、地域の魅力を発見するとともに、地方創生の現状を体感した（新型コロナウイルス感染症防止のため、民泊では宿泊しなかった）。地元の課題がどこにあるのか、魅力は何なのか、それを理解し活かす取り組みをする人びとと時間を共有し、T-GAPでの課題設定や当事者として何ができるのかを考えるきっかけとなる2日目であった。最終日には、再び歴史の視点から、西海市の位置する西彼杵半島がどう発展してきたのかについて、関連する「ひと」に注目して学習した。

長崎がどういう地域なのか五感をとおして知ること、地域資源や地域の魅力を活かした地域づくりに取り組むということの大切さや困難さを「住民」の視点で学ぶことができた。自らの住む地域でも、学校のある坂戸でも、他の地域でも、当事者として課題や魅力を発見し、活用していくためのアイデアと得ることができた2泊3日であった。

山梨県笛吹市コースは3泊4日で実施した。山梨県は当時新型コロナウイルスの感染者数が少なく関東から日帰り可能な立地であることから、これまで京都や沖縄などに行っていた小中学校の修学旅行代替場所として注目されていた。笛吹市でも同様に教育旅行が増え探究型の教育旅行プランを作成していた際に、本校の校外学習の目的と一致したことで旅行会社から提案があった。旅行初日に笛吹市に関する講義を受け、最終日には自分たちが発見した課題や魅力を地域の方にプレゼンテーションを行うというプランの中で、特に驚いたのは2・3日目のスケジュールを全て生徒に考えさせる点であった。訪問先への連絡や許可取りは全て旅行会社の方で事前に行っていた。笛吹市は観光スポットが町の中に分散しており、車での移動を余儀なくされる。この点と感染拡大防止のための分散観光という理由から、生徒は3～5名でチームを組みタクシーでそれぞれの目的意識に合う場所を訪問することができた。

T-GAP でフラワーロスについて取り組むメンバーがいるチームは花屋でインタビューを行い、地域活性化に関するアクションをするチームは地元での認知度が低いけれど魅力のある店を訪問するなど、生徒たちはそれぞれの T-GAP アクションに関わる場所で情報を収集していた。このように生徒自身も今回の目的を十分に理解し、校外学習に臨めたと言える。最終日には、副市長を始めとする市役所関係部署の方を前に、それぞれの学びを発表し、活動に関するフィードバックを得ることができた。



【図5】山梨県笛吹市コース集合写真（筆者撮影）

（4）アクションⅡ「チーム分け」（6月）

アクションⅠの発表会后、生徒たちは教員が設定したグループを離れ、自分と興味・関心を同じくする仲間を見つけてチームを組むことになる。このグループ作りでは、授業の目的から外れて興味・関心ではなく仲の良さで仲間を選んでしまう可能性や、積極的に自分から声をかけられず孤立してしまう生徒が出てくる懸念があった。これまでの実践の中でもこのグループ作りに関しては、十分な時間を確保したり教員が生徒のニーズを元にチームを組んだりするなど様々な工夫がされていた。

今年度は、クリエイティブ思考入門で「他者と自分の WILL を掛け合わせてチームを作り上げていく」という活動をした生徒たちに、そのスキルを発揮して自らの力で仲間を探してほしいという希望があったため、教員がチームを組むことはしなかった。一方で、アクションⅠを行ったことでチーム作りに時間をかけることもできなかったため、以下のような流れで「自分プレゼン・WILL 探し」を行い、興味・関心を同じくする仲間を探してもらうこととした。

【1】自分の興味・関心や得意なこと、やってみたいことなどを A3 1 枚でまとめる。

【2】1 回目はランダムに、2 回目は関心分野が共通する者を集めて、その中で自分プレゼンをする。

【3】プレゼンを聞く中で、「一緒にやってみたい人」を見つけ、声をかけチームを組む。

《教員側が配慮したこと》

① それぞれの生徒の興味・関心を事前に把握し、合いそうな者は同じプレゼン会場に入れた。

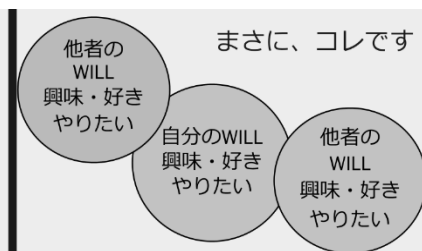
② 孤立する可能性のある生徒の情報を共有、観察の上、必要に応じて他者への声掛けをサポートした。

本日と来週の活動

- 本日は、ランダムで他者の話を聞く。
 - 来週は、分野ごとに分かれて、他者の話を聞く。
- 仲間を見つけていこう。

本日の活動を通じて

- ①「この人良いな!」「チームを組みたいな!」という気づき。
- ②他者のアイデアの良い部分を吸収して、自分のアクション案を具体的にしよう。



【図6】グループ作り説明 PPT

結果的に全員がグループを組むことができたが、適切な方法であったかは検証が必要である。教員側が配慮を必要とする生徒の情報を共有し全員が目で見守ったこと、特に該当生徒の担任が普段からその生徒のニーズを把握していたことはグループ作成の上で重要であったと考えている。

(5) アクション計画の作成（6月～7月）

アクション計画の作成に当たっては、昨年度の実践を参考に「ビジョン」「タスク」、そして「ミッション」の設定をさせた。昨年度 T-GAP 受講生は1年次の阿賀町校外学習にて、外部団体が目指すゴール（ビジョン）と自分たちの「目標」のズレを実感したという経験を元に行っているため、T-GAP において協働先の「ビジョン」を意識した計画作成を実行するというワークに取り組むための土台ができていた。協働先のニーズや win を、考えるという視点は課題探究活動をする上で重要である。しかし、本学年では1年次での体験が不足しており、そのまま活用することが難しかったため、今年度は「ビジョン」に資料3のような異なる意味を持たせた。その上で、実現可能な目標とその方法（ミッション）を考え、具体的な活動内容（タスク）をまとめるという流れで計画を立てさせることとした。

この方法は昨年度「グローバルパスポート」にて、アイシーネット株式会社がSG生を対象に実施したアイデアの出し方、そして3月のクリエイティブ思考入門で生徒たちが体験したプロトタイプ作成の過程を参考にしたものである。

(6) アクション実施・振り返り（7月～11月）

各グループは校外学習での学びを踏まえ、主に夏休みに活動を実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、対面での計画実施は避けメールやオンラインでの交流を促したことで、多くのチームが活動の修正を余儀なくされた。よって、本来は振り返り期間としていた9月にもアクションの実施ができるようにした。生徒たちは事前に準備していたタスクを、その時の状況に応じて適宜修正しながら活動を進めていた。各班の活動テーマと活動内容については、後述の「ゼミ別活動報告」をご参照いただきたい。なお、アクション実施期間だけでなく、その後も活動を継続した班も多かった。

振り返りでは7月に「中間報告会」を、11月には「最終報告会」を実施し、その他にもヒアリングやレポート等を通じて自身について見つめ直す機会を設けた。「中間報告」では、実施するアクションの内容についてループリックの項目を元にまとめていくことで、準備の抜けはないか活動内容がビジョン・ミッションで挙げた目標から外れていないかなどを確認させた。ゼミ教員が全てのグループを常に見ていくということは現実的ではないため、ループリックを事前に示すことで生徒が自分で振り返りを行えるよう工夫した。11月には、アクションの準備から実施までを通して「自分たちが達成したこと」を考えさせるよう意識した。同時に、その達成が自己満足で終わるのではなく、タスクを振り返り「達成」の根拠を明らかにするよう指導した。一方で、「何もできなかった」というチームも居たが、その場合もタスクのどの部分をどのようにすべきだったのか修正点まで考えるようにした。冒頭でも述べたように T-GAP は3年次の個人研究に繋がる資質・能力を育む科目である。活動して終わりではなく、経験を次に繋げていく意識を生徒自身に持たせることが大切だと考えた。

個人についてはヒアリングやレポートを通じて振り返りをさせた。産社でもレポートの書き方について学ぶ機会があったが、2年次ではその学びを活用する機会として7月は2000字以内、11月は4000字以上で活動の報告レポートを作成させた。11月を4000字以上としたのは7月のレポートで積極的に活動をした生徒が2000字「以内」に納めることに苦労していたためである。中には最終報告レポートが10000字を越える大作になった生徒もいた。

3. 本年度の成果と課題

今年は昨年度の反省を踏まえて、リサーチスキルの学習期間としてのアクションⅠに力を入れた。ヒアリングでも生徒の中から「自身にリサーチスキルが身についた」という声があったことから一定の成果があったと考えられる。一方で、グローバルな課題への意識については、生徒一人一人の

「グローバル」の定義が異なることもあり、T-GAPの中で意識向上が図れたかを確認することはできなかった。この点については今後アンケートなどを通じて、どの程度涵養されたのかを見ていきたい。生徒自身の興味・関心から発せられた課題探究活動は、「総合的な探究の時間」からも分かる通り学校教育で求められているものであると考える。一方で、コロナ禍において各校様々のご苦労をされてきたことと思う。本資料及び研究大会での生徒の発表を通じて忌憚ないご意見をいただければ幸いである。

T-GAP ゼミ別活動報告①：農林漁業および環境ゼミ

梅澤 智（農業科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、農業、林業、魚や海洋環境に関係する社会課題を扱った。

生物資源・環境科学科目群に属す生徒が中心となったグループ「アグロフォレストリー」は、コロナ禍における農業・林業の担い手不足を社会課題として設定し、とくに外国人技能実習生に焦点を当てた調査を「JAいるま野」に対して実施した。調査に基づき、校内で次世代の担い手を育成するためのセッションを実施した。

「カメラまん」のグループは、海洋環境汚染の影響でアカウミガメの生息域が減少していることを社会課題として設定し、千葉県は「一宮ウミガメを見守る会」の活動に参加し、課題の現状を理解するとともに広く社会に広報するWebページを制作した。

「プラなし」は、「JAMSTEC」と協働し、海洋プラスチック問題を解決するための行動規範を考案し、PRするWebページを制作した。

「ラブフィッシュプロジェクト」は、近隣の児童館や学童保育所等と協働し、小中学生の魚嫌いによる栄養の偏りを改善することを目的に活動し、魚嫌いの子ども向けの献立考案・提供に取り組んだ。

2. 事例紹介

【企画名】

「ラブフィッシュプロジェクト」（4名）

【活動目的】

社会課題として設定した「魚嫌いな子どもの増加」は、栄養の偏りに直結したり、和食文化の衰退に関与すると考え、「魚嫌いがいない世界」を創るというビジョンを立て、魚への抵抗をなくすための献立考案に取り組むことが目的である。

【活動内容】

まず、魚料理や魚食に関する小中学生の意識調査をするための事前アンケートを127名に対して実施した。得られたアンケート結果に基づき、魚嫌いの要因が骨や臭みにあることを推察し、苦手な子どもでも食べやすい献立を考案、くらぶち英語村にて3食提供してもらった。提供後のアンケートでは、概ね「この調理方法なら魚嫌いでも食べられる」という成果を得ることができた。さらに、献立を広く活用してもらうべく、パンフレットを制作し、お世話になった団体を中心に配布した。

【協働団体】

- | | |
|--------------------|------------------|
| ・くらぶち英語村 | ・坂戸市学童保育所にこにこクラブ |
| ・坂戸市学童保育所第2にこにこクラブ | ・三芳町藤久保児童館 |
| ・竹間沢児童館 | ・北永井児童館 |

【指導教員より】

このグループの活動では、自ら協働先を探し出すところから実際に料理として提供されるまで、生徒自ら運用し、事後アンケートで成果を検証したり、広く社会に活動を認知したりしてもらう活動まで取り組み、自主的にPDCAサイクルを回すことができていた。培った企画・計画力を、次年度の「卒業研究」に活かしてもらいたい。

T-GAP ゼミ別活動報告②：様々な社会問題

中井 毅（商業科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、様々な分野の社会課題を扱った。

「エナジードリンク研究会」は現在若者の間で愛飲されているエナジードリンクの問題点について着目した。彼らはエナジードリンクの過剰摂取による健康被害や知識不足からおこる問題を社会問題としてとらえた。NPO 法人遺伝子栄養学研究所の井上真季子様に指導を仰ぎ、エナジードリンクが医薬品ではなく「食品（炭酸飲料）」として扱われることによる問題、覚醒作用による健康被害など周知する目的で講演会を開催した。

「忘れないために」は、近隣の廃線である「太平洋セメント専用線廃線跡（高麗川～西大谷間）」の詳細な実地調査を行い、観光資源化の可能性などを探った。また、かつての所有者である企業や自治体（日高市）ともコンタクトを取り、パンフレットの作成などを試みた。

「H2O」は水質汚濁を社会問題としてとらえ、高校生としてできることを考察した。寄居町の「川の博物館」にインタビューを行い、水質汚濁の要因などを調査した。川のごみ拾いなど、ボランティア活動を企画したが、コロナ禍で叶わず、ポスター制作を行った。

「PTIB (Public Transport in Business)」は新型コロナウイルス蔓延に伴う鉄道利用客の減少を社会問題としてとらえ、高校生の視点で鉄道利用者を回復させる施策を鉄道会社に提案しようと試みた。乗客分散化の具体的方策、学校が一括して定期券を購入するビジネスモデルなど、様々な試案を作ったほか、実際のコロナ禍での取り組みを調査しようと、東武鉄道に調査依頼書を送付した。

2. 事例紹介

【企画名】

「This is ME」（5名）

【活動目的】

これからの社会を担う子どもたち（6～18歳）がLGBTQなどのマイノリティに対して正しい知識を身に付けられる機会を作ることを目的とした。当初、近隣の学校での講演を想定していたが、コロナ禍でそれが叶わず、校内で講演会として実施した。

【活動内容】

まず、自分たちがLGBTQに関する知識を身に付けるために「ティーンズ交流会（外部団体主催）」に参加し、どのような活動が当事者の助けになるか考えた。つぎに「にじいろシネマ（外部団体主催）」に参加し映画「カミングアウト出櫃中国 LGBT の叫び」を鑑賞し、今後の活動の方向性を明確化した。本校生徒にアンケート調査し、LGBTQに対する本校生徒の認知度を確認した上「みんなで考える！LGBTQのこと」と題する講演会をZoomにて実施した。事後アンケートも行い、自らの活動を検証した。

【協働団体】

レインボーさいたまの会（LGBT当事者団体）

【指導教員より】

生徒自らが積極的に外部団体と交渉した。講演会も良く練られたもので、グループディスカッションの議題も、1つ1つにきちんとした意図があるものであった。実際に行動しただけでなく、活動の随所に思考の跡が見られている。この姿勢を卒業研究等の学びにもつなげて欲しいと考える。

T-GAP ゼミ別活動報告③：健康および福祉

多田 省吾（保健体育科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、健康、スポーツ、福祉に関する社会課題を扱った。

運動部活動に所属しスポーツに関心がある生徒が中心となったグループ「運動量不足隊」は、コロナ禍における子供の運動環境の縮小と子どもの体力・運動能力の低下を社会課題として設定し、近隣の小学生を対象とし調査し、運動のできる場所の公園マップを作り配布した。調査は、対象の小学校の教諭や課外活動を専門とする大学教授にオンラインにてインタビュー調査を実施した。

ゲームに関心がある生徒が中心となったグループ「ゲーム依存症」は、近年注目されているゲーム依存症を自分たちの趣味でもあるゲームに関しての身近な社会課題として設定し調査し、高校生を対象としたゲーム依存症を知ってもらうためのパンフレットを作成し校内に掲示した。パンフレット作成するために筑波大学の依存症を専門とする大学教授から助言をいただきながら完成させた。

障害者スポーツに興味を持ったグループ「リアル」は、埼玉県的車いすバスケットボールチームを取材し、車いすバスケットボールの魅力を伝えることを目的に活動を行った。車いすバスケットボールチームと協働し、パラリンピックの車いすバスケットボールの試合のオンラインでの観戦や車いすバスケットボールの体験会も実施した。

海洋問題に興味があり、釣りが好きな生徒が中心となったグループ「つりけん」は、釣り初心者を対象に釣りの楽しさやマナーから環境問題を考えられるようなパンフレットを作製した。近隣の釣り堀で体験と釣り堀の経営者へのインタビュー調査を行い、大手釣りメーカーに初心者が釣りをを行う際の課題をインタビューした。

2. 事例紹介

【企画名】「運動量増やしたい」（4名）

【活動目的】

まず、論文調査より社会課題として「子どもの体力・運動能力の低下」を設定し小学生の現状を小学校の教諭を対象に行った。そこで「コロナ禍において運動機会や環境が減少している」ということを知った。そこで、小学生を対象にコロナ禍でも安全に運動する機会や環境を知ることができるようにすることを目的とした。

【活動内容】

まず、学習院大学の長沼豊先生にスポーツの価値やどのような環境が望まれるのかインタビューを行った。また、日本スポーツ協会のセミナー「アクティブチャイルドプログラム親子体験イベント」に参加し子供がどんな運動が必要なのかを学んだ。それらの調査と並行して小学校の先生方にアンケートをとったりインタビューをする中で小学生が気軽に安全に活動できる環境を知る仕組みを作ることが必要だと考え、運動できる公園マップ作りに取り組んだ。

【協働団体】

・川越市立南古谷小学校 ・鶴ヶ島市立藤小学校 ・学習院大学文学部教育学科 長沼豊先生

【指導教員より】

設定した社会課題に対して、当事者や専門家にしっかりと調査を行い社会貢献活動に告げることができた。また、コロナ禍ではあったがオンラインで多くの方々とつながり知識を深めていた。ただ、公園マップが完成し配布をしたが、その効果がどうだったかの検証が不十分ではあった。

T-GAP ゼミ別活動報告④：地域活性化・動物愛護・フラワーロスの取り組み

吉岡 静（国語科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、どのチームも実際の体験や自分の興味・関心から生まれた課題意識を基に、志を同じくするメンバーを集め、アクションを実施していた点が印象的である。

動物の殺処分ゼロを目指す「イヌネコプラス」では、メンバーの1人が1年次から継続して参加していた保護猫ボランティアの経験を踏まえて、犬や猫を飼えなくなってしまう原因に「飼う前と実際に飼った後のギャップ（世話の大変さ）」があると考え、保健所やボランティア団体にインタビューをしながら、動物を飼う前に知ってもらいたい内容をWebページにまとめ公開した。「春花秋冬」のグループは、元々植物に興味を抱いていたメンバーが、コロナ禍で結婚式などのイベントが中止になり大量の花弁が廃棄の対象になってしまうことに心を痛め、始めたアクションである。日常にもっと花を気軽に取り入れてもらえるようになればロスが減ると仮説を立て、子どもでも楽しく取り組むことができるバスボム作りに花をプラスし、ドライフラワーを使ったバスボム作りのイベントを実施した。「エーデルワイス」は、校外学習で山梨県笛吹市に行った際に、自分たち「外からの視点」が地域の観光資源発掘に繋がることを実感し、笛吹市と同じような条件に当てはまる埼玉県小川町をフィールドにしながら、双方の取り組みなどを調査し、「外からの視点」で観光プランについて考えるイベントを実施した。現地に行って実際に自身が体験したことで課題を発掘した「It for You」は、山梨県笛吹市の食事処などが掲載HPによって営業日や時間が違ったり、どのような観光スポットがあるのかを探ることに苦労したりしていたことをきっかけに、笛吹市内にある観光情報を一括で管理できないかと考えアクションを進めた。活動の中で、自身が専門的に学習している情報システムの観点からLINEを使った自動観光プラン作成アプリの提案を行った。

2. 事例紹介

【企画名】 「SET」（3名）

【活動目的】

課題探究型の教育旅行を中学校、山梨県笛吹市に提案することで、中学生のキャリア教育支援・笛吹市の地域活性化に貢献することを目的とした。

【活動内容】

事前に出身小・中学校ではどのような教育旅行が実施されているのかをアンケートで調査し、その結果を元に校外学習では、小中学校の教員が求めている活動ができるかを実地検証した。さらに、現在注目されている「課題探究」活動を事前学習や現地での活動に取り入れることで、学生の基礎的汎用的能力を育もうとしていた。

【協働団体】

・山梨県笛吹市役所	・JTB 甲府支店・川越支店	・毛呂山町立川角中学校
・鶴ヶ島市立藤中学校	・熊谷市立江南北小学校	・熊谷市立江南中学校

【指導教員より】

丁寧に先行研究・実践に触れ、現地に行った際も自身の目的意識を元にししっかりと情報収集をしていた。収集した情報を元に作成した、20ページを超える教育旅行用のテキストは圧巻の出来であった。

T-GAP ゼミ別活動報告⑤：自然や環境に関する取り組み

嶋田昌夫（農業科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、自然や環境に関する関心があるメンバーが集まった。ほとんどが「生物資源・環境科学科目群」を選択する生徒であった。近年多発している自然災害を課題にした「防災」のグループは本校生の防災意識を高めるため、日本で起きた主な自然災害をまとめたり、アンケート調査を基に将来災害が発生したときに役立つ知識を普及する活動を行った。虫好きが集まった「蟲の声」のグループは「生態系や農家に理解・配慮がされる世界の創生」をテーマに、特に外来種の有害性について理解してほしいと考え、学校周辺に生息する外来生物を特定することを課題とし文献調査、実態調査、アンケート調査を行った。中でも2019年に和歌山の梅農家で初めて確認されたヨコバイ科の一種のシンガポーラ・シンシャナの調査を行い、近隣の梅農家や校内の梅園からも発見することができたことから、この有害性を啓発するため発生時期、被害分布、身体的特徴、被害作物についての情報を記載したポスターを作成し山口農園のカフェや校内に掲示した。

2. 事例紹介

【企画名】 「みつどろぼう～ミツバチと人が共生できる環境を～」 （4名）

【活動目的】

ミツバチと人が共生できる環境の創成を達成するために「ミツバチが怖い」という印象やミツバチの存在を遠くに感じている人たちに、ミツバチのありがたさを知ってもらい、身近に感じてもらうことを目的にした。

【活動内容】

以下の4つを行った。1つ目は、ミツバチに関する知識を増やすため坂戸市の環境学館いずみのミツバチプロジェクトに参加しミツバチや養蜂の知識を増やした。実際に校内でミツバチを飼育するために飼育の方法や内検（巣箱内を点検して、蜂群の成育状況を調べる作業）の方法について学んだ。2つ目は、情報収集するため養蜂を行っている高校や企業と交流を行った。高校の交流では各校の活動紹介や問題点、またミツバチを理解してもらうための工夫、搾った蜜の活用方法等を共有することができた。また、企業（Beeslow）が開催したオンラインワークショップに参加し、ミツバチとコーヒーの密接な関係と気象変動の影響について学んだ。3つ目は校内で養蜂を実践し内検作業や蜜源のための花栽培も行った。内検は週1～2回実施、蜜源として夏にはヒマワリ、秋にはコスモスを栽培した。最後は、養蜂に取り組んでいる高校3校と養蜂研究家の干場英弘氏を招きオンラインワークショップを開催した。ミツバチにとっての社会課題についてのディスカッションを通して、各団体と継続的なかわりを持てるようになっただけでなく、ミツバチに関する新たな視点を得ることができた。

【協働団体】

- | | | |
|-------------|---------------|----------------|
| ・坂戸市環境学館いずみ | ・長野県富士見高校 | ・学校法人聖学院中学高等学校 |
| ・安田学園高等学校 | ・株式会社 Beeslow | |

【指導教員より】

早い時点で先行研究や情報収集に取り組みしっかりビジョンを設定していた。それに基づきミッションを設定し、実際に養蜂を行ったり、ワークショップを開催したり様々なアクションを行った。T-GAPに相応しい活動になったと言える。

T-GAP ゼミ別活動報告⑥：伝統工芸、SDGs、平和教育、日本語支援教育

加藤千絵美（国語科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、伝統文化、自然環境、平和教育、日本語支援に関する社会課題を扱った。

「きりのき」のグループは、坂戸市の伝統工芸である小川和紙が後継者不足であることから、若者に小川和紙の存在を知ってもらうことを目的とした活動を行った。小川和紙体験学習センターや小川町役所等へのインタビュー、歴史の調査などで得た情報をツイッターを使用して発信し、小川和紙の認知度を高める活動を行った。

「サステナブルなコスメブランド」のグループは、マイクロプラスチックを社会課題として取り上げ、その中でもコスメに焦点を当て、エシカルコスメを浸透させる取り組みを行った。筑坂生を対象としてコスメと環境に関する意識調査を行い、化粧品に含まれるマイクロプラスチックについての調査内容をInstagramにて発信した。

「メタルキング」のグループは、学校で平和教育が行われる機会が大きく減少しており、それが戦争を軽視する若者の態度に繋がっているとした上で、若者が平和のために行動する機会が必要であると考察した。そのため、若者であるメンバー自身が埼玉県平和資料館にてボランティア活動を行い、戦争と平和について学んだ。その学びから、来館者へのアンケート等を行い、また、筑坂生に平和を祈りながら千羽鶴を作成する企画を行い、平和資料館に贈呈した。

「J-advantage」のグループは、日本語を母国語としない子どもたちへのサポート方法について、当事者や教育機関等へのインタビュー、ボランティア活動への参加を通して考察を行った。

「kinder-17」のグループは、SDGsの認知度を上げるためには、幼少期からの教育が必要であると、幼稚園児を対象としたSDGs教育について考察を行った。SDGsに関する動画を作成し、幼稚園での上映およびアンケート調査を行った。

2. 事例紹介

【企画名】

「J-advantage」（2名）

【活動目的】

日本語を母国語としない子ども達が増加している。そういった子どもたちが自信をなくさずに日本での学校生活を送るためのサポートのあり方について分析・実践した。

【活動内容】

日本語学習支援の問題点について調査を行った上で、在住外国人を対象とした学習支援ボランティアに参加し、実際に日本語を母国語としない子ども達への学習支援を行った。また、実際に知人や学習支援団体にインタビューを行うことで、現在学習支援が抱える問題点、今後行うべきサポート方法について考察を行った。

【協働団体】

・坂戸市千代田日本語の会 ・一般社団法人 レク寺子屋

【指導教員より】

本グループは問題解決に向かって積極的に活動し、活動の中で今後の課題を提示した。また、当事者や支援団体に対するインタビューは、日本語学習支援のあり方を考える上で参考となる。

T-GAP ゼミ別活動報告⑦：国際ゼミ

神田 智史（英語科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、世界の人種問題、多文化交流、難民問題、固定観念について、グループ毎にテーマを決めた後、共同研究を行った。

ジェンダーや教育における固定観念や偏見について問題提起をしたグループ「Mr. Paulownia」は、ジェンダーをテーマとしたポスターを作成した。それらのポスターを SNS や当校の昇降口にプロジェクターで投影をし、ジェンダーにおける固定観念について考えさせるきっかけを与えた。

日韓関係改善に向けてアクションを起こした「IT-TTO」は、グループ内で韓国に対して興味を持って貰えるようなポスターを作成し、それらを教室や渡り廊下などに掲示をした。

「MINTH」は、日本国内の難民問題についてリサーチをし、難民の方々の悲惨な現状を知ってもらう取り組みを行った。1 つは、Zoom を使用してのオンラインイベントである。実際に国内に在住する難民の方々に講演を依頼して、どれだけ環境が劣悪であるか、日本が難民受け入れに対して保守的であるかについて話を頂いた。2 つ目は、日本国内の難民受け入れ問題について取り扱った「東京クルド」を本校で上映し、本校の生徒・教職員・地域の方々に入管法について考えさせる機会を提供した。

2. 事例紹介

【企画名】

「Spotlighting Refugees ～難民問題にスポットライトを当てる～」 （6名）

【活動目的】

日本の難民受け入れ問題に焦点を当て、一人でも多くの人に国内の難民受け入れ問題について知ってもらう事が目的である。

【活動内容】

日本の難民認定率は0.5%であり、先進国の中で非常に低い数値である。難民の受け入れの人数が増えない理由として、これらの問題について知る機会や多文化交流の場が非常に少ない事が原因ではないかと考えた。当校の生徒・学生・地域の方々に上映会やオンラインイベントを提供する事で、国内在住の難民の方々の生の声を聞き、現状を知る事が将来の日本の難民受け入れの認定率を上げる事に繋がると考え協働団体と共にアクションを起こした。

【協働団体】

- ・「東京クルド」上映実行委員会
- ・任意団体「with the small」
- ・NPO 法人「チーム東松山」

【指導教員より】

一人一人が、役割を全うできたと思う。特に当校での上映会や、オンライン講演会は、先方とのやり取りを綿密に行い非常に充実した発表の場を提供できたのではないかなと思う。持ち前の行動力を最大限に発揮し、卒業研究にも取り組んでほしい。

T-GAP ゼミ別活動報告⑧：心理・福祉教育・食品ロス・高齢者福祉

小澤 真尚（数学科）

1. ゼミの概要

本ゼミでは、心理、福祉教育、食品ロス、高齢者福祉について社会課題を扱った。

「アネシス」は、悩みやストレスを抱えている多くの高校生が誰にも相談できていない現状に対して、自分自身でそれらを軽減できるように、一人でも実施できるリラクゼーション法を被験者に実施してもらい、その効果を確認した。「教育×ハンセン病」は、ハンセン病回復者が高齢化し、ハンセン病について正しく語り継ぐことのできる人材が少なくなっている現状に対して、探究型のワークショップを開催することで参加者にハンセン病について知ってもらい、現状について考えてもらおうとした。「tendré（テンデュリー）」は、「自然体験を通じて、生活に関わる SDGs を学ぶ」プロジェクトに参加して、企業と消費者の双方が食品ロスを減らしたいと思うように、コンポストを利用したプログラムを開発した。「じいじとばあば」は、近年増加傾向にある高齢者の孤独死を防ぐために重要だとされている人とのつながりの中でも、特に食を通してつながりに着目し、継続的にコミュニティを形成する方法として Zoom によるオンラインランチ会を企画・開催した。

2. 事例紹介

【企画名】

「じいじとばあば」（4名）

【活動目的】

高齢者の孤独死は一人暮らしがもたらす様々なコミュニティとのつながりの減少により地域の中での孤立感や孤独感を感じやすくなることが原因として挙げられている。孤独死解決のためには、人とのつながりが重要であり、そのつながりが継続されるような仕組みを作っていく必要がある。特に食を通してつながることが重要である。そこで、高齢者のコミュニティづくりを行い、継続的に高齢者のコミュニティを形成していく方法としてオンラインランチ会を企画・開催した。

【活動内容】

オンラインランチ会の説明と紹介をするためのプロモーションビデオを作成し、高齢者が参加しやすい工夫を行った。その後、作成したオンラインランチ会の実施内容と実施方法を2つの協働団体に確認してもらい、計4回のオンラインランチ会を開催した。参加者からは会話しながら食事ができたことや若い人と会話ができたことへの好意的な意見が多く寄せられた。

【協働団体】

・坂戸市社会福祉協議会

・よりあい＊ええげえし

【指導教員より】

一人暮らしの高齢者が自宅から参加しコミュニティを作れる点は孤独死解決のヒントになりそうである。先行研究を十分に踏まえ、限られた時間の中でよい活動ができたが、参加者の多くが協働団体と日頃からつながりを持ち、Zoom の使い方にもある程度慣れていた。また、孤独死が多い男性参加者が少なかった。今後はより活動の認知度を高め、すでに孤立感・孤独感を感じている高齢者も含めて多くの参加者を集める工夫が必要だろう。

【資料①】年間指導計画

令和3年度 T-GAP年間指導計画

回	月日	単元	内容	備考	基礎的汎用的能力
1	4月9日		T-GAPガイダンス(ざっくり年間計画+夏休み前のゴール共有)		
2	4月12日	アクションⅠ	個人レポート発表会／班導入	個人レポートを持参させる。 教員が事前にグループ分けを行う。	ア、イ、ウ
3	4月15日		チームビルディング/情報収集①	なるべく、この期間に1次情報を得る体験+外部に連絡を取る練習をさせたい。	ウ
4	5月6日		校外学習行先ガイダンス／情報収集②	【修正点】コロナ禍により、外部と繋がるのが困難。家庭で保護者にインタビューなども方法に加える。	ウ
5	5月13日		情報収集③・紹介PPT作り		ア、ウ
6	5月20日		調査報告会／校外学習行先希望調査	班のテーマで収集した情報を他者に共有する。	ア、ウ
7	5月27日	Ⅰ↓ Ⅱへ	新グループ作り	今回は生徒同士で自由に作らせる	ア、イ
8	6月3日		アクションプラン作成	チームの意思／計画表作成／訪問・協働先とも連絡を取り相談し始める。	ア、ウ
9	6月10日		アクションプラン作成		ア、ウ
10	6月17日		ヒアリング(課題設定意図、アクション計画の現状、不足しているもの・こと)	アクションプランの進捗状況把握のため仮案提出	イ、ウ
11	7月1日	アクションⅡ	アクションプラン作成(／校外学習事前)		ア、ウ
12	7月8日		アクションプラン作成(／校外学習事前)		ア、ウ
13	7月12日		校外学習直前指導日／班別の調査内容確認		ア、イ、ウ
14	7月13日		班別の調査内容確認		ア、イ、ウ
15	7/14~17		校外学習		ア、イ、ウ、エ
16	7月19日		校外学習調査内容振り返り個人→班／アクションプラン修正		ア、イ、ウ
17	7月20日		アクションプラン修正	各ゼミ担当教員と必ず面談すること	ア、ウ
18	7月21日		ゼミごとアクションプラン発表会	アクションプラン(班)・中間報告書(個人)提出	ア、イ、ウ
アクション実施					ア、イ、ウ
19	9月2日	まとめ	ヒアリングガイダンス 今後の予定公開	【修正点】オンライン授業と外部への新規連絡を制限していたことから、アクションをしていない班多数。そのため、この期間の報告会をやめて指導教員がじっくり各班の様子を観察できるようにしたい。	
20	9月9日		(×)活動報告会準備→アクション期間		ア、ウ
21	9月16日		(×)活動報告会→アクション期間		ア、ウ
22	9月30日		ヒアリング(アクションの実際と反省、自分の役割や得たもの)	(裏)最終報告書作成に向けたポートフォリオまとめ	イ、ウ
	10月7日		最終報告会・報告書作成ガイダンス		ア、ウ
23	10月14日		(最終報告会・レポートガイダンス)発表準備①分析	自分たちが当初設定した「実現したい光景」とアクション後の「今」がどれくらい合致しているか。理由や原因はどこor何かなどを検討し、発表する。可能であれば、訪問・協働先からフィードバックもらえる機会を設けたい。	ア、ウ
24	10月21日		発表準備②分析・考察		ア、ウ
25	10月28日		発表準備③発表資料作成		ア、ウ
26	11月4日		T-GAPゼミごと発表会(ビデオ録画)		ア、ウ
27	11月11日		ゼミ代表発表会	最終報告書(個人)提出	イ、ウ、エ
28	11月18日		ヒアリング(T-GAPまとめ、新たに抱いた課題意識)	ポートフォリオにまとめる	イ、エ
29	12月9日	卒業研究	卒研に向けて①ガイダンス／校長講話		ア、イ、ウ、エ
30	12月16日		卒研に向けて②T-GAP→卒研へ	冬休み前に、自分が卒業研究で取り組んでみたいモノ・コトのきっかけが自分の中から出てくると良い。	ア、イ、ウ、エ
31	12月23日		卒研に向けて③T-GAP→卒研へ		ア、イ、ウ、エ
32	12月24日		冬休みに文献調査しておくこと		ア、イ、ウ、エ
33			情報収集をしよう。		ア、イ、ウ、エ
	1月13日		卒業研究のリサーチトピックを決めたい①研究分野調査	研究大会に向けてT-GAPの代表発表者を希望or選抜で決める。	ア、イ、ウ、エ
34	1月27日		卒業研究のリサーチトピックを決めたい②研究分野調査	T-GAPから卒研がつながりそうな生徒の発表も面白そう(居れば且つ余裕あれば)	ア、イ、ウ、エ
35	2月3日		卒業研究のリサーチトピックを決めたい③内容を絞れるか		イ、エ
36	2月17日		ヒアリング(現状報告…取り組みたい分野、トピックetc)	ポートフォリオにまとめる	ア、イ、ウ、エ
37	3月3日		卒研構想発表会ガイダンス		ア、イ、ウ、エ
38	年次裁量		卒研構想発表会 調査内容→取り組みたい内容	T-GAPアンケートも取る。	

2021/06/03
27th T.GAP.

2 年 租 資

（１）「アクションⅡ」の活動…
自らの「らしさ（興味・関心）」と他者・社会とを結び付けながら、課題を設定し、解決のための計画を立て、実際に行動に移す。」

(2) 評価基準について…以下の①～④を「ヒアリング」・「レポート（報告書）」・「発表」等で評価。

- ①【目標発見】
調査・分析により、自分が取り組みたい（取り組みべき）、実現可能性のある課題を設定できる。
- ②【課題解決】
活動のゴールを掲げた上で、適宜修正しながらも計画を立て、実行することができる。
- ③【成果性】
他者の WILL（らしき）や社会（幫がりたい人・企業・団体）と共に、活動を実行しようとする。

- (3) グループ:
グループ: ① 3～6人(目安)の間に興味関心を持つ者で組む。
② 原則7月以降～活動終了まで同じメンバーで活動する(予定11月まで)。
③ 6月中は進捗を把握しながらか、活動メンバーを添えていく。

(4) アクションⅡの流れ

4. アクションⅡの進め方	
6月3日(木)	【グループづくり】・他者のWILLを聞き、自分のWILLとつなげる。・15日までに、グループを組む。
10日(木)	【活動計画案】・目標設定のための調査・問題解決に向けたゴールや必要なツールの確認
17日(木)	【活動計画作成】・アクションⅡ(夏休集中)の計画を立てる。
7月1日(木)	【活動計画作成】・主担当新井孝博の元、必要なツールへの交渉を行う。
8日(木)	【活動計画作成】・
12~17日	【校外学習】・アクションⅡを概ねまとめた校外学習の学びのテーマを決める。・校外学習へ行って、活動の目標を導く。
19~20日	【振り返り】・校外学習で得た知識で自分たちの計画を見直す。・活動計画を最終確認する。
21日(水)	【活動計画発表】・自分たちの活動計画を発表する。 【発表会】 ・自分たちの活動計画を文書にする。 【レポート提出】
夏休作業中	【アクションⅡ】・活動計画に沿って、アクションを実行する。
9月~	【アクションⅡ】・活動計画に沿って、アクションを実行する。・活動計画や、実際の活動を振り返る。

一緒にアクションする「同士」を探そう！

I. 「同士」を探す流れ。

- ・6月3日(本日)・・・ランダムに他者の語をきこう！
 ★「この人面白い！」「チームを組みたいな！」という気づき。
 ★他者のアイデアの良い部分を吸収して、自分のアクションを具体的にしよう。
 ・6月10日(来週)・・・分野ごとに他者の語をきこう！

こんな人と組んでみたら？

- WILL、興味・好き・やりたい、課題意識、今やりたいことが共通する人。
- 自分にはない得意を持っている人(自分の苦手なところを補完してくれそうな人)。
- 分野は違っても、一緒にいればイノベティブなアクションを起こせそうな人

Ⅱ. 本日の活動

[illegible]

アクションⅡ アクションプラン計画案←

プロジェクト名

メンバーで話し合って、自分たちのチームの計画を立てよう。

指導教員

先生・アドバイザー

先生

最終更新日 06/17

プロジェクトリーダー ^②	組 番 ^②
プロジェクトメンバー ^②	②

ビジョン←

(アクションのゴール) ←

～アクションを通じて、「実現したい未来」、「目指す姿」、「見たい景色」は何？～

自分たちが設定した課題が「どうなる」と、自分たちの理想的な世界になるだろうか？

ミッション⇔

(ビジョンを実現するために達成したい目標)

～設定したビジョンを実現するために、自分たちが達成したい目標は？～

②具体的に「誰が(何が)／どのような課題が」「どうなる／どのように変化する」ことを目標にする？

～ミッションを実現するための具体的な活動を考えよう！～ ②に挙げた手段を実行するためにどのような準備が必要？④

具体的に必要な動き ^{a)}	この動きのために必要なヒト・モノ ^{a)}

【資料④】アクション振り返りシート 1

アクションⅡ 振り返りシート

2年 組 番 名前

ビジョン
(アクションのゴール)

ミッション
(ビジョンを実現するために達成したい目標)

タスク
(ミッションを実現するために必要な具体的な活動)

～アクションを通して、「実現したい未来」、「目指す姿」、「見たい景色」は何？～

①【思い出そう】自分たちが描いていたビジョンは何だったか？

～自分たちのミッションは、ビジョンの実現に貢献するものであったかを考えよう～

②自分たちが最終的に設定したミッションと、ミッションを達成するために用いた手段（具体的な活動）は何か？

「最終的に自分たちが設定したミッションは」

「具体的な活動は」

③改めて、自分たちは本当にミッションを達成できたと思うか。

《 できた ・ できなかった 》

④自分たちが達成できたことは何か。

⑤自分たちは、最初に設定したビジョンを実現するために活動することができたか？

《 そうだ、できた!! ・ まあまあ、先までなくとも一応は達成できた ・ いや、できなかった... 》

上配について考える前にチェックシートに取り組もう。チェックシートの内容を参考に上配の達成度を選択し、下配の内容（理由）を記入しよう。

自分たちが上配のように考えた理由：

【資料④】アクション振り返りシート 2

「⑤自分たちは、最初に設定したビジョンを実現するために活動することができたか？」 チェックシート

自分たちの活動について、項目ごとに振り返ってみよう。その時に気づいたことなどは下記スペースにメモしておこう。

項目をクリアしていると思ったら、その箇所も塗りつぶされるようにしておきましょう。（メンターの先生から質問されても焦らないように準備しておいてくださいね！）

人との関わり分野	計画性分野	情報収集・分析力分野
具体の活動（インタビューやイベント）時に先方や教員に対して、礼儀・マナーを意識して進めることができた。	アクションを実施するために設定したタスクは適切であり、そのために必要なものもしっかりと考えられた。	計画段階で、自分たちが選択した手段の妥当性を示す（根拠となる）資料を収集することができた。
イベントの告知・集客時や外部団体と連携する際に、相手の「ニーズ（win）」を考え聞き取って進めることができた。	自分たちのアクションの効果を、活動の詳細を根拠に説明することができる。 〈例〉機能性トマトの簡単な栽培方法と栽培キットを用意したので、高齢者の方も取り組みやすく普及しやすいはずだ！	先行研究や客観的資料を探す際に、その情報元の信ぴょう性を確かめてから使うことができた。
トラブルや予期せぬ中断などが起きた際に、チームで話し合い（ビジョンから逸れることなく）方向修正を図ることができた。	実施したインタビューやアンケートに際して、質問項目など他者から情報収集する項目・内容は、自分たちの活動の効果を証明する上で適切なものになっている。	自分たちのアクションが効果的であることを、収集したアンケートの結果や共同した外部団体からのフィードバックなど客観的な根拠に示すことができる。

記録用のメモコーナー

【資料⑤】 中間報告会ループリック

	ステップ1	ステップ2	ゴール	20%でも行けたら……なゴール
課題発見			自分たちが取り組むべき（取り組むたい）、大きすぎない課題設定ができる。	具体的な「困り感」や「対象」も想定できる課題設定ができる。
課題解決	ビジョン（活動のゴール）もイメージできる。	ビジョン（活動のゴール）へのミッション・タスク（道筋・必要なツール・手立て）も想定できる。		
協働性			他者と自分のWILLも掛け合わせて物事に取り組む意識を持つ。	

		7点	5点	3点	1点	評価物
発表	協働性		発表中にチームメンバー全員に役割がある。		発表中にチームメンバーの中で役割がない人がいる。	その場の発表態度
	資料（PPT）		PPTに載せる情報量を調整し、文字の配色を工夫している。	PPTに載せる情報量が調整されているが、文字の配色にも工夫が見られない。	PPTに載せる情報量が調整されておらず、文字の配色にも工夫が見られない。	PPT
身に 着 け て ほ し い 資 質 ・ 能 力	課題設定の背景	先行研究や実践・インタビューなどの資料やデータを自分たちで整理・分析した上で、自分たちが関わる社会課題を設定している。	★先行研究や実践・インタビューなどの資料やデータを収集した上で、自分たちが関わる社会課題を設定している。	情報収集をした形跡はないが、社会課題を設定できている。	課題が一般化されていないため、社会課題を設定しているとはいえない。	PPTと口頭での内容
	課題解決① ビジョン・ミッションの設定		発見した社会課題とビジョン（活動のゴール）・ミッション（目標や手段）に関連性がある+ミッションの具体的な「困り感」や「対象者」が想定できている。	発見した社会課題とビジョン（活動のゴール）・ミッション（目標や手段）に関連性がある。	発見した社会課題とビジョン（活動のゴール）・ミッション（目標や手段）に関連性がない。	PPT
	課題解決② タスクの具体性		目標達成に向けたタスクの「いつ」「どこで」「誰（どの団体）と」「誰が」「何を」などが具体的に設定されている上にアポ取りやその予定が示されており、すぐにアクションに入ることができる。	目標達成に向けたタスクの「いつ」「どこで」「誰（どの団体）と」「誰が」「何を」などに本人たちが気づいていないアポ取りの必要性や活動内容に抜けがあるものの、その点が修正できればアクションに入ることができる。	自分たちのタスクがほとんど設定できておらず、活動内容のほとんどが決まっていないため、急ぎタスクを設定しなければ、アクションは見込めない。	PPT

【資料⑥】 中間報告レポートループリック

		7点	5点	3点	1点
フォーマット①			こちらが設定した章それぞれに、適切な内容をまとめ、記述することができる。		こちらが設定した章立てを完全に無視した形式で記載している。
フォーマット②			参考文献の書き方が適切である。	参考文献の書き方に1～2か所誤りがあるものの、おおむね適切である。	参考文献の書き方に3か所以上誤りがある/そもそも参考文献
表現			誤字脱字、文のねじれ、主述の不一致などが1～2か所程度である。		誤字脱字、文のねじれ、主述の不一致などが4か所以上ある。
ビジョン				アクションを通じて、「実現したい未来」、「目指す姿」、「見たい景色」等を設定できている。	アクションを通じて、「実現したい未来」、「目指す姿」、「見たい景色」等を設定できていない。
ミッション（活動目標とその手段）			ビジョンと活動目標がつながっている。+自分たちが挙げた手段が目標を達成できるものになっている。		ビジョンと活動目標がつながっていない。+自分たちが挙げた手段が目標を達成できるものではない。
情報/事前知識の収集			似た活動をしている先行研究（論文等）、既に実施されている活動やその効果、校外学習で得てきた活動に関する知識などの情報を4つ以上入手して、活動を設定している。		似た活動をしている先行研究（論文等）、既に実施されている活動やその効果、校外学習で得てきた活動に関する知識などの情報を1～2つ入手して、活動を設定している。
タスクの具体性			タスクが設定されているが、「いつ」「どこで」、「誰（どの団体）と」「誰が」「何を」などが曖昧でもう少し計画を詰める必要がある。（しかし、曖昧な部分は一部でそこを詰めれば十分アクションに入ることができる）		タスクが設定されているが、「いつ」「誰（どの団体）と」などが決まっていないため、急ぎ内容を設定していく必要がある。（このままで真休み～9月のアクションは見込めない）

【資料⑦】 最終報告会ルーズリック

最終報告会		4	3	2	1
表	態度 ・（入試・特選の面接・プレゼンではメモを見ず話すことはできない。その練習として今から発表態度を練習しておきたい。） （質疑応答時の対応） ・【質問】に答える側の注意 ・「ご質問ありがとうございます」と謝意を述べ、誠実・端明に回答する。 ・質問の意図が分からない場合「～という質問内容で合っていますでしょうか」と確認する。 ・すぐに回答できない場合は「今すぐにお答えすることができません。今後の課題として、検討します」と伝えず対応する。	① 発表中にスライドや紙のメモを見ることなく（スライドや紙を手を見ながら）発表することができる。 ② かつ、質疑応答時の質問に対して速断（スムーズ）に回答することができる。	① 発表中にスライドや紙のメモを見ることなく（スライドや紙を手を見ながら）発表することができる。 ② しかし、質疑応答時の質問への対応に不足がある（スムーズに回答できなかった）。	① 発表中にスライドや紙のメモを見て発表している。 ② かつ、質疑応答時の質問への対応に不足がある。（スムーズに回答できなかった）。	
	資料（PPT） （PPTのポイント） 社会と情報の授業で習った観点を意識する。図や表など、視覚的にわかりやすい情報も活用したい。	① PPTに載せる情報量を調整し、② 文字の配色を工夫している。	① PPTに載せる情報量が調整されているが、② 文字の配色に工夫が見られない。	① PPTに載せる情報量が調整されておらず、② 文字の配色にも工夫が見られない。	
内		5	4	2	1
	【課題発見】 実在する社会課題を示し、自分たちのミッションを設定できているか。	① 自分たちが扱う社会課題についての客観的評価や分析が示されており、 ② ミッションがその社会課題の解決につながるという説明に説得力がある。	① 自分たちが扱う社会課題についての何かしらの評価が示されており、 ② ミッションがその社会課題の解決につながるという説明に説得力がある。	① 自分たちが扱う社会課題についての何かしらの評価が示されているが、 ② ミッションがその社会課題の解決につながるという説明に説得力がある。	① 自分たちが扱う社会課題についての評価が示されておらず本当に社会課題なのか分かりにくい上に、 ② ミッションがその社会課題の解決につながるという説明に説得力がない。
容	【課題解決活動】 自分たちが行ったアクションやタスクに関する説明があるか。 アクションを実施して得た成果（知識）や課題が示されているか。	① 自分たちが実施したイベントやインタビュー、調査等の①目的、②対象、③内容など具体的に示されていて、「何に」「なぜ」取り組んだのかが分かりやすい。 ② 実施して得た成果（知識）や課題が客観的資料と共に述べられている。	① 自分たちが実施したイベントやインタビュー、調査等の説明が曖昧で、「何に」「なぜ」取り組んだのかが分かりにくい。 ② 実施して得た成果（知識）や課題が自身の体験と共に述べられている。	① 自分たちが実施したイベントやインタビュー、調査等の説明が曖昧で、「何に」取り組んだのかが分かりにくい。 ② 実施して得た成果（知識）や課題が自身の体験と共に述べられている。	① 自分たちが実施したイベントやインタビュー、調査等の説明が曖昧で、「何に」取り組んだのかが分かりにくい。 ② 実施して得た成果（知識）や課題が述べられていない。
	【アクションの自己探求】 自分たちが設定したミッションや実際にを行ったタスクそのものの振り返りがある。	① 自分たちのミッション（活動内容）によりビジョン（実現したいゴール）が達成できたかどうかの言及がある。 ② ビジョン達成もしくは未達成である理由について、自分たちのタスクを客観的に分析しながら説明することができている上に、その説明に説得力がある。	① 自分たちのミッション（活動内容）によりビジョン（実現したいゴール）が達成できたかどうかの言及がある。 ② ビジョン達成もしくは未達成である理由について、自分たちのタスクを客観的に分析しながら説明することができている。	① 自分たちのミッション（活動内容）によりビジョン（実現したいゴール）が達成できたかどうかの言及がある。 ② ビジョン達成もしくは未達成である理由について、自分たちのタスクを分析しながら説明することができているが、その分析が主観的である。	① そもそも自分たちのミッション（活動内容）によりビジョン（実現したいゴール）が達成できたかどうかの言及がない。 ② ビジョン達成もしくは未達成である理由について、自分たちのタスクを分析しながら説明することができているが、その分析が主観的である。

【資料⑧】 中間報告レポートルーブリック

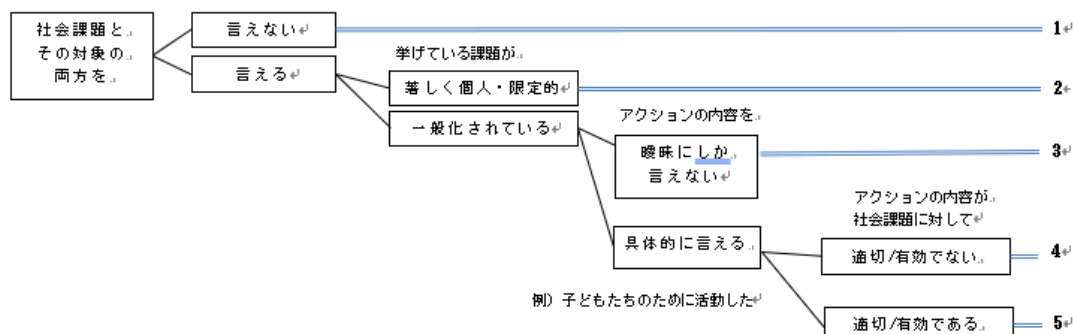
最終報告書		4	3	2	1	0
期限	期日が守られている（この項目は点数×2）	期日より過不足なく提出された。	期日よりやや過ぎた（2日以内）が提出された。	期日より大幅に過ぎた（3日以上）が提出された。	提出されない。	
書式	【フォーマット】 引用・表記の仕方が適切である。 ※本文・引用元を明らかにしており、引用箇所を「」・改行等で示し、自分の文章と区別していることがわかる。 ※参考引用文献＞書籍：著者名・『タイトル』・出版年・出版社／Web：Web作成者・『タイトル』・URL・参照日 が全て示されている。 【書体】 文体の統一（ダ・アル体で書くこと）、漢字や数字、文のねじれ、全角の半角などの書体上のミスがない。 ※間違例：漢字…漢字の変換ミス、打ち間違ひ／数字…勘算の抜け／文のねじれ…本文が読まずて内容がズレていく等	本文中の引用の仕方・参考引用文献一覧の書き方が<u>正しく書かれている</u>。 書体上のミスが<u>1つ未満</u>である。	本文中の引用の仕方・参考引用文献一覧の書き方が<u>ほぼ正しく書かれている</u>（例：引用元を明らかにしていないが、自分の文と分けていない等）が、参考引用文献一覧の書き方は<u>正しい</u>である。 書体上のミスが<u>2～3回程度</u>である。	本文中の引用の仕方・参考引用文献一覧の書き方のどちらにも<u>間違いが1つ以上</u>ある。 書体上のミスが<u>3回以上程度</u>ある。		
内容	【課題設定・先行研究】 課題設定について (1) 「社会」に実態に存在する課題であることが横断を元に表示されている。 (2) 活動目標（ミッション）が社会課題の解決につながるものが十分に説明されている。 先行研究について (3) アクションをするにあたり、研究や実証、インタビュー、校外学習等で得た地域等の客観的情報を4つ以上示している。 【課題解決活動】 活動の経路が具体的であり、十分に活動が行われたことが読み取れる。 (1) イベントやインタビュー等具体的なアクションを実施する目的が明らかにされている。 (2) 実施時期・対象・内容（5W1H）が具体的に示されている。 (3) アクションを実施して得た成果（知見）や課題が述べられている。 まとめ (1) 自分たちのミッション（活動内容）によりビジョン（実現したいゴール）が達成できたかどうかの言及がある。 (2) ビジョン達成もしくは未達成である理由を自分たちのタスクなどから分析できている。 (3) 自分たちが設定した社会課題がよりよくなるために、今後どのようなアクションができるかと考えるかが表示されている。 個人振り返り (1) 自身のT・GAP活動への関わりについての振り返りがある。 (2) 振り返りの内容が、具体的な説明や理由とともになされており説得力がある。 (3) この経路を今後どのように活かすか、自身の考えが表示されている。 ※例：取り組んだ課題について考えたこと（新たな視点、考えの更新）、さらに行うならどんなアクションが可能なか、など。	右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>1つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (内容や読者の中に少し不足しているところあり) 右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (読者の中であまりとした読者があるが、内容を理解できなくはない程度) 右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (明らかに不足とは、読者の中に読者があり、内容を理解できないことを指す) 右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>3つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。	右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (明らかに不足とは、読者の中に読者があり、内容を理解できないことを指す) 右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (明らかに不足とは、読者の中に読者があり、内容を理解できないことを指す) 右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (明らかに不足とは、読者の中に読者があり、内容を理解できないことを指す)	右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (明らかに不足とは、読者の中に読者があり、内容を理解できないことを指す) 右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (明らかに不足とは、読者の中に読者があり、内容を理解できないことを指す) 右に挙げた (1) ～ (3) のうち、<u>2つ以上を正しく示している</u>ことが見られる。 (明らかに不足とは、読者の中に読者があり、内容を理解できないことを指す)		

【資料⑨】ヒアリング 1 回目 評価基準

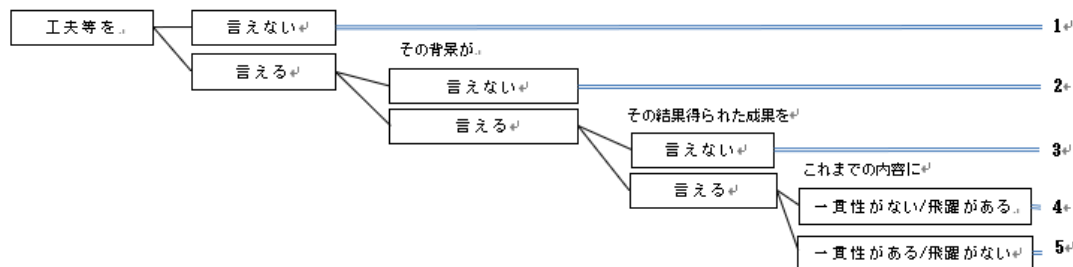
T-GAP 個人面談（ヒアリング）①（質問項目と評価の観点）

「これからヒアリングを始めます。質問に対して、簡潔に明確に答えて下さい。」

質問 1：T-GAP であなたの所属するグループ（1 人でアクションをしている人は個人で）は、どのような「社会課題」に対して、「誰」を対象とした、どのような「アクション」をしたのか、説明して下さい。



質問 2：質問 1 で答えたアクションをする中で、あなたやあなたの所属するグループではどのような工夫をしたか（苦労したこと・意識したことでも構わない）、説明して下さい。その上で、そのように考えた背景と、その結果得られた成果を述べ下さい。

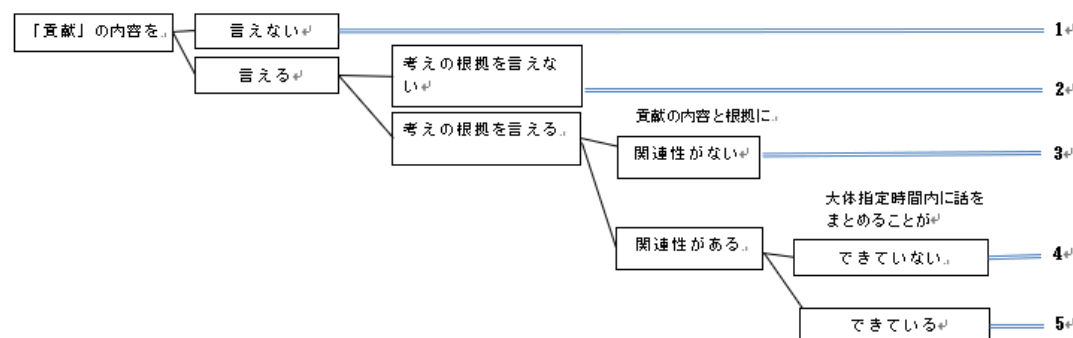


【資料⑩】ヒアリング 2 回目 評価基準

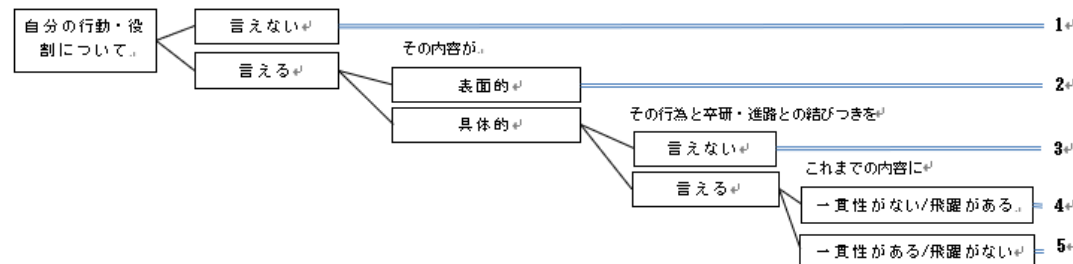
T-GAP 個人面談（ヒアリング）②（質問項目と評価の観点）

「これからヒアリングを始めます。質問に対して、簡潔に明確に答えて下さい。」

質問 1：あなたは T-GAP を通じて、社会に対してどのような貢献をしたと思いますか。設定したミッションやタスクの内容を根拠に、1 分～1 分 30 秒程度に説明して下さい。



質問 2：T-GAP を通じて、あなた自身はアクションやチームに対してどのような役割を果たしたのかを説明して下さい。次に、その行為やアクションから得た経験が自分自身の卒業研究または進路意識とどのように結びついたかを述べ下さい。



(第 3 回 WWL 研究大会第 25 回総合学科研究大会資料集より抜粋)
(令和 3 年度「T-GAP」委員会)

〔Ⅳ〕卒業研究

1. はじめに

本校における「卒業研究」では、1年次の「産業社会と人間」および2年次の「T-GAP」の授業を基盤として科目群選択科目や一般選択科目、校外学習、課外活動等を通して培った理論知・実践知とアカデミック・スキルを駆使して、生徒が自身の興味・関心を学術的に探究する。ここでは、学ぶ楽しさを味わうとともに、社会で必要とされる問題発見力・解決力、批判的思考力を養い、生涯にわたって学んでいこうとする態度を育てることを目指している。「卒業研究」の指導における教員の役割は、探究学習がアカデミック・スキルのみならず生徒自身のメタ認知や自己調整学習を求める性格を踏まえ、生徒一人一人の自主的・自発的な研究活動をファシリテート（援助）することを基軸に据えている。

本校のこれまでの研究紀要報告において、①アカデミック・スキルを系統的に理解するための手立て、②研究に不慣れな生徒が混乱しないよう論文体裁や研究手法などの教員間の共通理解、③オンラインツールを効果的かつ効率的に活用した運営、以上の3点が課題として挙げられている。②③に関しては、生徒と教員双方の負担軽減になり、さらなる「卒業研究」の質の向上につながると考えられる。

これらの課題に加え、新型コロナウイルス感染拡大に伴う、急な臨時休校やオンライン授業への移行が考えられる。そのため、生徒と教員がともにオンラインでの「卒業研究」にスムーズに対応できる運営を普段から行っておく必要がある。また、近年、研究者のみならず大学生への倫理教育と研究ガバナンスの重要性が指摘されているが、これは高校生にとっても同様であり本校でも適切な対策と研究倫理教育が求められる。本稿では、これらを踏まえて得られた実践成果を主に報告する。

2. 本年度の「卒業研究」の構想

2-1 本科目の目標

- (ア) 探究活動を通じて、事象を多様な情報から実証的・論理的にとらえる視点を養い、多角的に調査や分析を行う能力を身に付ける。
- (イ) 論文の作成・発表・指導教員との対話を通じて、論理的に情報を整理し、わかりやすく表現する能力を身に付ける。
- (ウ) 探究活動を通じて、自分自身の興味・関心や志向するキャリアを認識し、主体的に継続的に学習に取り組む姿勢を養う。

2-2 運営体制

- (ア) 学校指定必修科目として、毎週金曜日5・6限（2単位）に実施する。
- (イ) 学習成績評価は5段階評定で算定する。
- (ウ) 指導教員は21名体制とする。指導教員と生徒の組み合わせは、生徒の研究課題・興味関心と指導教員の専門性によって決定し、1人の教員につき生徒6～8名が指導・評価・フィードバックの一連の研究指導を受ける（表1）。

表1 本年度の「卒業研究」指導教員の教科別人数

教科	担当教員数	教科	担当教員数	教科	担当教員数
国語科	1	理科	2	情報科	1
数学科	1	保健体育科	1	家庭科	2
外国語科	2	農業科	4	福祉科	1
地歴公民科	1	工業科	2	商業科	3

- (エ) 毎週金曜日の授業開始前に、グループウェアプラットフォーム「Teams」を用いて活動記録に関するポートフォリオ課題を配信し、次の日曜日までに回答するように指導する。生徒が自身の活動を振り返りポートフォリオとして蓄積するとともに、指導教員が個々の生徒の活動状況を把握しフィードバックを行う。そして、各種資料を印刷して配布するのではなく配信（「Teams」上に保管し閲覧可能な状態）にするなど、いつでもどこでも活動しやすい環境の実現と、ペーパーレスを意識した運営を目指す。さらに、担当教員が生徒とのチームを作成して普段の指導から活

用し、新型コロナウイルス感染拡大に伴うオンライン授業への移行にも対応できる体制を整える。

(オ)「卒業研究」の指導に際しては、探究活動において求められる知識・理解、思考力・表現力、卒業研究に対する姿勢を包括的に評価するために、論文作成、発表会、ヒアリング（定期面談）等、多岐にわたる学習機会を設定する。

2-3 評価の概要

<1 学期（年間評価の約 30%）>

①進捗状況報告会 ②中間発表会 ③ 卒業論文第 1 稿 ④ 活動記録

<2 学期（年間評価の約 50%）>

① 定期面談による進捗状況報告 ② 卒業論文第 2 稿 ③ 最終報告会 ④ 卒業論文最終稿
⑤ 活動記録

<3 学期（年間評価の約 20%）>

① 卒業論文完成稿（綴じ込み用） ② 学年代表発表会ワークシート ③ 活動記録

3. 指導の実際

3-1 プレ卒業研究（令和 2 年 12 月～令和 3 年 3 月：2 年次 3 学期）

（1）「問い」の設定のための思考の整理と深化

生徒は 1 年次の「産業社会と人間」や 2 年次の「T-GAP」（ソーシャルアクションの展開および活動報告書の作成）、その他の各授業において、テーマの設定や情報収集・整理、文章化や口頭発表など、探究活動を進める際に求められるアカデミック・スキルの素地を身に付けている。この時期は、「研究とは何か」「論文を執筆するためには何が必要か」について生徒に再度指導した。具体的には、研究と活動の違い、先行研究の読み方（着目すべき点）、文献の調べ方等の講義を踏まえ、自身の考えや興味・関心をマインドマップで可視化し、自身が探究したいテーマを探した。ここでは、可視化されたマインドマップからキーワードをピックアップし、その中から「What～（～とは何か）」「How～（～はどうなっているか）」「True or not～（～は本当か）」という視点から、生徒が抱く「大きな問い」を「小さな問い」へと分割させていく活動を行った。さらに、自身の「問い」を他生徒と共有し意見を交換することで、「問い」の具体化や抽象化を繰り返し、卒業研究のテーマが徐々に決まっていっていった。

さらに、本校教員の研究専門分野や得意分野などをまとめた「活動支援のための専門分野リスト」を生徒に配信し、オンライン環境下でも生徒が自身の興味・関心にもとづいて自発的に様々な教員に相談できるようにし、「問い」の設定のための環境を整えた。

（2）卒業研究構想発表会（令和 3 年 3 月 22 日）

「問い」のジャンルが近い生徒を 8 会場に分けて、卒業研究構想発表会を行った。発表形態はデスクトッププレゼンテーション（パワーポイント）を標準として、発表時間を 5 分、質疑応答を 2 分の計 7 分で設定し、最後に各会場の担当教員によるコメントという流れで実施した。また、発表を参観している生徒は、発表内容に対して「Office365 Forms」を用いて面白かった点や疑問点などのコメントをし、それを発表者にフィードバックすることで 4 月以降の卒業研究へ繋げた。

3-2 高大連携による卒業研究支援プログラム（令和 2 年 12 月～令和 3 年 3 月）

本プログラムでは、生徒が筑波大学の研究室にて卒業構想発表を行い、第一線の研究者や大学院生・大学生からの助言・講評を得ることにより、学習意欲を喚起するとともに、実験・調査の知識や技術の基礎を得ることを目的としている。プログラムへの参加を希望する生徒は、研究計画書を作成したうえで学校長への研究構想発表を行い、その中から学校長の推薦を得た者が本プログラムへ参加した。以下に、本プログラムの流れを示す。

（1）高大連携卒業研究支援プログラムのガイダンス

プログラムへの参加を検討している 38 名の生徒を対象とし、学校長による研究についての講話や、本プログラムのガイダンスを実施した。ここでは、以下の 5 点について指導をした。

- ①T-GAP や科目群科目の学び、ボランティア等課外活動から自分自身の興味関心から研究テーマを設定すること。
- ②自分の興味関心を研究につなげるためには、書籍、先行研究からの文献調査を徹底すること。
- ③総合科学科の多様な先生方と相談すること。
- ④筑波大学のホームページ研究者総覧 TRIOS で支援を受けたい研究室を選ぶこと。
- ⑤本プログラムへの申し込み方法と学校長面談の日程と発表資料の作成。

（２）学校長面談

１）一次面談（2020 年 12 月 24 日，25 日）

プログラム参加のための学校長との一次面談に参加した生徒は 19 名で、研究構想及び支援希望の研究室について、パワーポイントを用いて 5～10 分程度でプレゼンした。生徒のプレゼンに対して、学校長から問いの根拠となる先行研究の重要性や前提となる情報収集の大切さなどの指導・助言を受けた。さらに、冬休みの個別課題を具体的に提示いただいた。

２）二次面談（2021 年 1 月 19 日，20 日 ※オンライン）

学校長との二次面談は、コロナウィルスの感染拡大防止の為、オンライン（Zoom）で実施した。面談に参加した生徒は 13 名で、文献調査の方向性や具体的な研究計画へのアドバイスをいただいた。特に、壮大なテーマで進めようとしている生徒に対しては、先行研究をさらに調べたり本校の専門の先生に相談することを努め、現実的なテーマに近づくよう助言をいただいた。一次面接に参加し二次面接に参加しなかった 6 名の生徒の辞退理由は、学校長からの個別課題を実施できなかったことや研究テーマの変更、支援を受ける研究室が無いことなどであった。

３）三次面談（2021 年 2 月～3 月）

二次面談に参加した生徒は、助言内容を参考にして先行研究をさらに調べたり研究計画書を練り上げたりすることを繰り返した。そして、三次面談は、3 月 31 日までに生徒が自分で学校長とアポイントメントをとり研究計画書を提出したうえで行われた。三次面談に参加した生徒は 4 名で、そのうち 2 名が学校長の推薦を受け筑波大学の研究室から支援を受けることとなった。残りの 2 名は、コロナウィルス感染拡大のため研究計画の実施が困難となったり、研究倫理の観点から計画の再考となったりした。二次面談に参加し三次面談に参加しなかった 9 名の生徒は、先行研究の調査不足や現実的で実現可能な研究テーマにすることができなかったため辞退した。

３－３ 卒業研究（【資料 1】「年間指導計画（実施報告）」を参照）

（１）ゼミの立ち上げ（令和 3 年 4 月）

4 月に入り、各生徒に指導教員がついて卒業研究が本格的にスタートした。スタートに際して、指導教員に、担当生徒の研究テーマやプレ卒研の内容を共有した。

卒業研究は大きく分けて、学年全体で行う「オリエンテーション」と担当教員ごとに別れて行う「ゼミ指導」の 2 つの形式で進めた。特に本年度は、研究倫理教育に関する新たな取り組みをいくつか実施した。SNS など様々なサービスの登場により、第三者へのアンケート調査や、外部の専門家へアプローチすることが比較的容易になった。こういったサービスは、新型コロナウイルス感染拡大状況下においても卒業研究を進めることに有用である反面、実施内容によっては研究倫理に抵触する危険性もある。そこで、研究部の教員による研究倫理についての講義を実施したほか、生徒自身が「研究倫理審査」に関するチェックシート（【資料 2】）に記入し提出することを義務化し、研究倫理についての意識づけを行った。

（２）全体での指導内容

（ア）卒業論文

本科目における最も主要な評価対象物である卒業論文については、初稿（令和３年６月提出）、第２稿（令和３年９月提出）、最終稿（令和３年１１月提出）、完成稿（令和４年１月提出）の４回の提出を求めた。論文の基本体裁は、①A4 縦長・横書き・文字 10.5 ポイント、② 40 字×40 行、③ 余白上下 20mm 左右 15 mm とし、最終稿では本文のみで A4・12 枚以上の論文執筆を課した。

卒業論文の内容・構成を評価する上で、初稿、第２稿、最終稿と段階的に学びを進めていけるよう、指導を行った（表２）。その際、全教員と生徒が共通した論文の体裁を共有するために、論文執筆の際の「指示書」や「サンプル」を作成した。参考までに、第２稿作成の際の「指示書」「サンプル」を資料として添付する（【資料４】【資料５】）。

表２ 提出稿の指示内容と留意点・到達点

	指示内容	留意点・到達点
初稿	本文を３ページ以上書くこと。 研究概要、研究目的、研究方法を第１章に必ず書くこと。 先行研究として書籍２冊以上、論文５本以上を読み、第２章に反映させる事。	ページ設定や、表紙の体裁などを整えることに慣れること。他者の意見と自身の意見を分けて記述できること。テーマを具現化すること等。
第２稿	本文を１０ページ以上書くこと。 先行研究をより丁寧に書くこと。 自身の実験や調査の分析・考察を第３章に記載すること。	必ず先行研究だけでなく、自身で行った実験や調査の分析・考察を、先行研究とは別に記載し、オリジナリティを出すこと等。
最終稿	本文を１２ページ以上書くこと 研究要旨を加える（４００～６００字）。研究目的、研究対象、研究方法、結論を簡潔に述べること。 第２稿の内容に加えて、「自身の実験や調査の分析・考察」について研究の進捗を踏まえて、より精選されたものにする。	論文全体として、構成や表現について見直し、より洗練された研究論文を目指すこと等。
完成稿	基本的な指示は最終稿と同様。	指導教員からのフィードバックを受け、より質の高い論文に仕上げる。

本年度は、海外に教育歴を有する生徒や外国籍の生徒が在籍していた。その教育的配慮として、論文執筆に使用する言語として英語を認め、１名の生徒が英語で執筆した。また、卒業論文は本科目における評価に占める割合が大きいことから、教員による「評価の偏り」を是正する必要がある。そのため、論文の３回の査読を主査（指導教員）と副査の２名で行い、副査に関しては毎回異なる教員が担当するようにした。評価基準（ルーブリック）に関しては昨年度の内容を引き継ぎ、各課題で評価するアカデミック・スキルを限定した上で「内容と表現」「形式に対する理解」「卒研に対する態度」の３領域をそれぞれ５段階のリッカート尺度で測定できるように構成した。その際、本年度の指導内容や生徒の状況を考慮し、基準の項目を微修正している。

本年度からの新たな取り組みとして、学問的誠実性の観点から、盗用・剽窃等の不正行為への防止対策と研究倫理審査を、研究部が主体となって実施した。具体的には、盗用・剽窃チェックツールである「iThenticate」を活用して教員が担当生徒の論文をチェックし、必要に応じて論文の書き方（特に引用に関して）の指導を行った。研究倫理審査に関しては、全生徒が研究倫理審査チェックシートを用いて、研究倫理審査対象となるか否かをチェックした。

(イ) 発表会

①中間発表会（令和3年7月13日）

例年、中間発表会では、質疑応答を含めて一人10分ほどで設定し、1日をかけて実施する。本年度は新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置によるオンライン授業の影響などもあり、発表会を簡素化した。発表時間4分、質疑応答1分半の計5分半で設定し、4クラスをそれぞれ2グループに分割し、8会場で実施した。この発表会では、「研究動機」「先行研究」「研究目的」「研究方法」「研究計画」の要素を発表に入れることを必須とした。

②最終発表会（令和3年10月22日）

最終発表会では、発表時間8分、質疑応答2分の計10分で設定し、オンラインで自身の研究内容・成果をパワーポイントで発表した。この発表会では、中間発表会での発表内容に加え、「研究結果」「考察」を加えることを必須とした。

本年度の最終発表会はZoomを活用して実施し、1,2年次生や保護者も参観できるように設計した。1,2年生には、事前に発表タイトルと会場（Zoom ID・PASS）を共有し、興味・関心に応じて好きな発表を参観できるようにした。

③学年代表発表会（令和3年12月10日、17日）

学年代表発表会では、発表時間12分、質疑応答3分の計15分で設定し、最終発表会を経て代表として選出された12名の生徒が発表した。例年は1つの大規模教室に3年次生全員が集まり最終発表会を実施するが、本年度は新型コロナウイルスの感染予防のため、発表者は本会場からZoomを用いての発表とし、参観する3年次生徒は各HR教室のスクリーンで発表を参観した。

(ウ) ヒアリング（定期面談）

ヒアリングでは、自身の研究の進捗を口頭で説明する。ヒアリングを令和3年7月、令和3年11月の計2回実施した。質問項目は生徒の進捗状況を踏まえた上で決定し、事前に生徒に提示した上で実施した（表3）。評価に関しては、「ヒアリング（口頭試問）評価フロー」を資料として添付した（【資料3】）。

表3 ヒアリングにおける質問項目

回・日付	質問項目
第1回目 (令和3年7月9日)	[1] あなたの卒業研究の研究課題（研究目的）を冒頭に明確に述べなさい。その上で、なぜ、そのような研究課題になったのかを先行研究や調査資料、自分独自の調査などを複数挙げて説明してください。 [2] 質問 [1] に述べた研究課題を明らかにするために、どのような調査や実験などを考えているか、時期や手順を含めて具体的に説明してください。
第2回目 (令和3年11月5日)	[1] あなたの卒業研究の結論（または、その見込み）を冒頭に明確に述べなさい。その上で、なぜ、そのような結論に至るのかを論理の道筋（理路）を明らかにして説明してください。 [2] あなたが行った研究の「価値」（どのような意味があったのか）を適切に説明してください。

(エ) 活動記録

生徒は、毎授業後に「今日の振り返り」「卒業研究計画の進捗状況」「メモ」を記録した活動記録を提出する。「今日の振り返り」は、今日の目標は達成できたかどうかや、指導教員の先生との面談コメントなどを記載できるようにした。「卒業研究計画の進捗状況」は、現段階での自身の状況と向き合い、今後の計画について記述する。活動記録は、提出期日を遵守しているかどうかや、生徒が自身の探究活動の成果や課題を認識しているかどうかを評価対象とした。

4. おわりに

以上に述べてきたように、本年度はアカデミック・スキルを系統的に理解するための手立てを意識してカリキュラムを設計した。1 年次「産業社会と人間」や 2 年次「T-GAP」での指導を踏まえ、卒業論文の初稿、第 2 稿、最終稿と、生徒の実態に応じて段階的に指導することができた。しかし、生徒が、アカデミック・スキルとは何か、さらに、どのスキルがどの程度身につけているのか振り返る時間を十分に取ることができなかった。「卒業研究」を終え、これから生徒が探究活動に対してどのように感じたのか、教員が意図した資質・能力を伸長させることができたのかを確認するアンケートを実施する予定ではあるが、要所で上記のことを確認し、その都度自身の活動を振り返り修正することも必要であろう。論文の体裁に関しては、指示書やサンプル（【資料 4】 【資料 5】）を参照し、ほとんどの生徒が比較的整ったものを作成することができた。さらに、指導教員間での共通理解もでき、論文体裁に貸しては一貫した指導がある程度できていたと思われる。しかし、文献等の情報収集の仕方についての指導は 1 年生の頃から継続的に行っていたが、それらを批判的に読むクリティカル・リーディングについての指導とその練習については不十分であった。これを 3 年次の「卒業研究」の時間で行うことは時間的に困難であるため、2 年次の「T-GAP」やブレ卒研のうちに実施することが望ましい。

【資料 1】

2021年度（26期生）「卒業研究」年間計画				
回	月日	活動内容	活動の目安	行事・進路など
1	4月16日	5時間目：全体ガイダンス＊予定、評価など 6時間目：顔合わせ＆アイスブレイク	●計画に基づくデータ収集 ・文献調査 ・実験 ・製作 etc.	ベネッセスタディサポート(4/9) 小論文模試 なんでも進路相談(4/12)
2	4月23日	ゼミ開き 兼 進捗状況ミニ報告会 (フィードバック)		
	4月30日			※緊急事態発令により「年次集会」のため休講
3	5月7日	ゼミ別指導		
4	5月14日	卒研ガイダンス ※論文の書き方／外部での活動について		
5	5月28日	ゼミ別指導		体育祭(5/22)
6	5月28日	卒研ガイダンス ※第一稿／研究計画	○発表会の資料作成 ○レポート作成	英検
7	6月4日	ゼミ別指導		
8	6月11日	ゼミ別指導		
9	6月18日	★第1次レポート提出(◎◎まで) 研究題目、課題(目的)、仮説、実験や研究方法を説明する。		1学期成績はここまで
	6月25日	1学期末考査：休講		
10	7月2日	ゼミ別指導 ※第一稿フィードバック	●夏休みの活動計画の確定 ●データの分析	
11	7月9日	ヒアリング①		
	7月12～16	(特別時間割期間)		
	7月13日	卒業研究クラス別中間発表会		漢検、数検
	9月3日	★第2次レポート提出	●結果のまとめ・考察 ○レポート作成 ○発表会の資料作成	【9月～大学・短大AO入試】 黎明祭
12	9月10日	ゼミ別指導 ※第二稿フィードバック① (オンライン)		
13	9月17日	ゼミ別指導 ※第二稿フィードバック② (オンライン)		
	9月24日	黎明祭代休		
	9月29日	<金曜日課>→水曜日課 ☆研究題目＆課題(目的)提出(下級生用)		
	10月1日	開学記念日：休講		【10月～大学・短大・専門推薦入試】 英検、中間考査
14	10月5日	<金曜日課> ゼミ別指導 (スライド準備)	○発表会でのコメントを参考にレポート完成	
	10月8日	【2学期中間考査実施せず】 ★最終発表会・PPT資料提出		
16	10月15日	最終発表会リハ・準備		
17	10月22日	最終発表会(2班・発表質疑で8分予定)【終日】		マラソン大会
18	10月29日	ゼミ指導(最終稿執筆) ※代表候補者打ち合わせ		数検、漢検
19	11月5日	個別面談(ヒアリング②)		期末考査
20	11月12日	ゼミ指導(最終稿執筆)	○卒業研究、筑坂での学習のふりかえり	
21	11月19日	ゼミ指導(最終稿提出期限)		
22	11月26日	論文の推敲 ※個人写真撮影		
23	12月10日	代表発表会①		
24	12月17日	代表発表会②		【大学入学共通テスト】
25	1月14日	薬物乱用講座 ※同週LHRで学年で製本に向けた取り組み ★製本用レポート提出(最終)		学年末考査、英検、漢検
26	1月18日	<金曜日課> 製本作業、卒研総括		【2月～一般入試】 テスト返却(登校日)

【資料 2】

筑波大学附属坂戸高等学校 研究倫理審査委員会

様式 1

筑波大学附属坂戸高等学校「研究倫理審査」に関するチェックシート

20 年 月 日

申請者（研究従事者） 年次・クラス・氏名	年 組 番 氏名
研究課題名	

1. 研究の立案・計画に際し、本チェックシートにより、「研究倫理・安全性審査委員会」による研究倫理審査対象となるか否かを判断します。本シートの提出がない、あるいは承認を得られていない場合は、本校における研究活動とは認められません。
2. 倫理申請は事前審査が原則です。必ず、調査・実験開始前に申請して下さい。調査・実験の内容や適用範囲が変わった際には、その都度、本シートによるチェックを要します。
3. チェック項目について、申請者は留意すべき事項であることを確認して下さい。一方で、一つでも「はい」に該当したからといって、直ちに倫理審査あるいは研究が差し止められるものではありません。あくまで倫理的に適切な研究を推進するためのチェックです。申請者は、あわせて研究倫理に関する事前の講義など授業内で取り扱った内容を確認・参照して下さい。
4. 研究指導者はすべての項目について確認し、定められた要領に従って末尾の適用区分 A・B・Cのいずれかにチェックと署名をして下さい。本用紙を複写し、複写を申請者に返却し、原本は区分に応じて提出してください。

○全申請者共通項目

【実験・調査の安全性】

1. 精神的、または身体的にあなた自身に、日常生活で起こりうる範囲を超える危険または不利益が生じると予想されるものですか？	☐ はい ☐ いいえ
---	--

【事後手続き】

2. 外部機関より、研究倫理審査委員会等の承認を受けることを要請されているものですか？ ・ 研究資金提供先（官民間問わず）・指導を受ける外部団体（大学等） ・ 発表予定の学術雑誌・ジャーナルなどの投稿規程 など	☐ はい ☐ いいえ
---	--

実験・調査の対象が人以外の生物（動・植物・微生物を含みます）の場合⇒ 項目 3～5 へ

人の場合 ⇒ 項目 6～（裏面） へ

それ以外の実験・調査対象の場合 ⇒ チェックは終了です。研究指導者に提出して下さい。

○人以外の生物を対象とする研究

3. 脊椎動物を対象とする実験を行いますか？	☐ はい ☐ いいえ
4. 人間や他の生物、自然環境に有害な影響を与える可能性のある動植物、微生物を対象として実験を行いますか？ ・ 菌などの菌類、細菌類、ウイルスなどの培養や実験 ・ 外来種にあたる昆虫類や動植物の扱い など	☐ はい ☐ いいえ
5. 遺伝子操作をとまう、もしくは遺伝子操作をとまう動植物をあつかう実験ですか？ ・ゲノム編集をした植物の栽培 など	☐ はい ☐ いいえ

○人を対象とする研究

【人の尊厳・人権配慮・プライバシー保護の観点】

6.	本校以外の人物及び団体を対象とするものですか？	☐ はい ☐ いいえ
7.	社会的弱者になりやすい特徴を有する個人・集団（いじめや差別を受けたことのある者、不登校児、病人や介護状態にある人、障害者やその家族、精神疾患のある人等）を対象とするものですか？	☐ はい ☐ いいえ
8.	運動・訓練の実施や、食事・睡眠・その他行為の制限、物理的刺激の供与等を行なうことにより、研究対象者に日常生活で起こりうる範囲を超える身体的な痛みを与える、または我慢や不便を強いるものですか？	☐ はい ☐ いいえ
9.	実験・調査の手続きに、介入（心理的介入を含む。ネガティブな気分を起こさせる、ストレスになる記憶を思い出させる等）が含まれていますか？	☐ はい ☐ いいえ
10.	個人の本质に関わる情報を収集するもので、かつ個人が特定される可能性のあるものですか？	☐ はい ☐ いいえ
11.	研究対象者本人とインフォームド・コンセント（事前に研究・調査の内容と方法について説明と了解を得ること）を得られないものですか？ ※虚偽・欺瞞のある研究方法を採用するなど、一時的であれ研究対象者をだましたり、十分な情報を与えないで実施するものなど。	☐ はい ☐ いいえ
12.	当該研究で得た情報を比較・計量・図表化するなど操作を加えることで、個人や集団の性向などを明らかにし、結果的に研究対象に望ましくない印象や影響を与える可能性はありますか？ ※法律に基づいて実施された調査のデータや、既に匿名化された情報（特定の個人を識別することができず、対応表が作成されていないもの）は除きます。	☐ はい ☐ いいえ

【対象者・研究関係者への影響】

13.	研究対象者及び研究対象者以外の関係者（研究対象者の家族・遺族、研究成果の読者、関連団体等）に不利益を与える恐れはありますか？	☐ はい ☐ いいえ
14.	研究対象者及び研究対象者以外の関係者と謝金など他の金銭的授受（交通費その他の実費を除く）をともなうものですか？	☐ はい ☐ いいえ

質問は以上です。

上記のチェック項目について、申請者と十分に確認し、相違ないものと認めます。

研究指導者 所属

職位

署名（直筆）

〈適用区分チェック〉

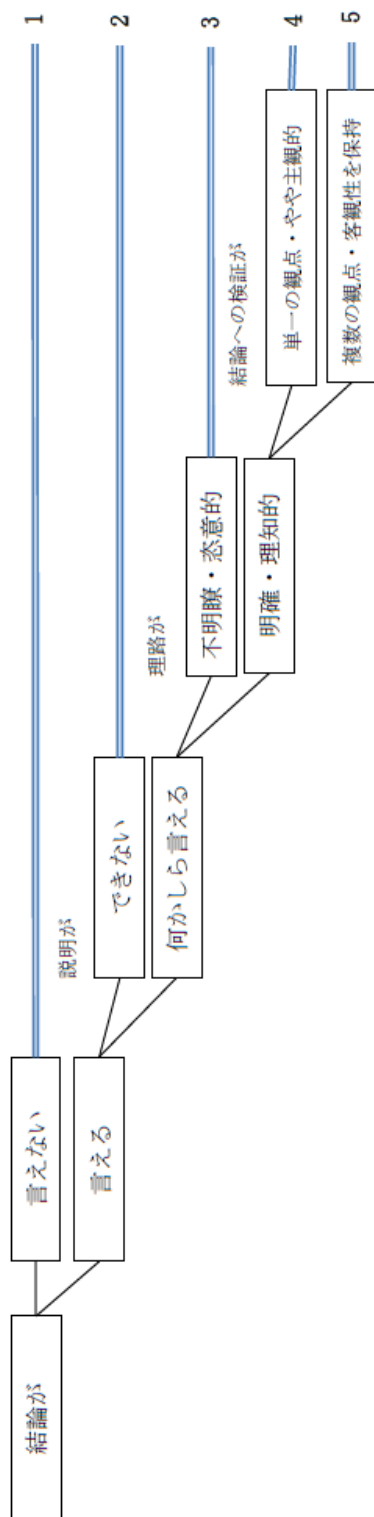
- ☐ 区分A 倫理審査 対象外 原本を教務室ファイルに綴込
- ☐ 区分B 倫理審査 審議対象 原本を当該生徒年次主任に提出
- ☐ 区分C 倫理審査 対象 原本を研究部主幹教諭に提出

申請者に〈様式2 倫理審査申請用紙〉を配付してください。

卒業研究個人面談（ヒアリング）②（質問項目と評価の観点）

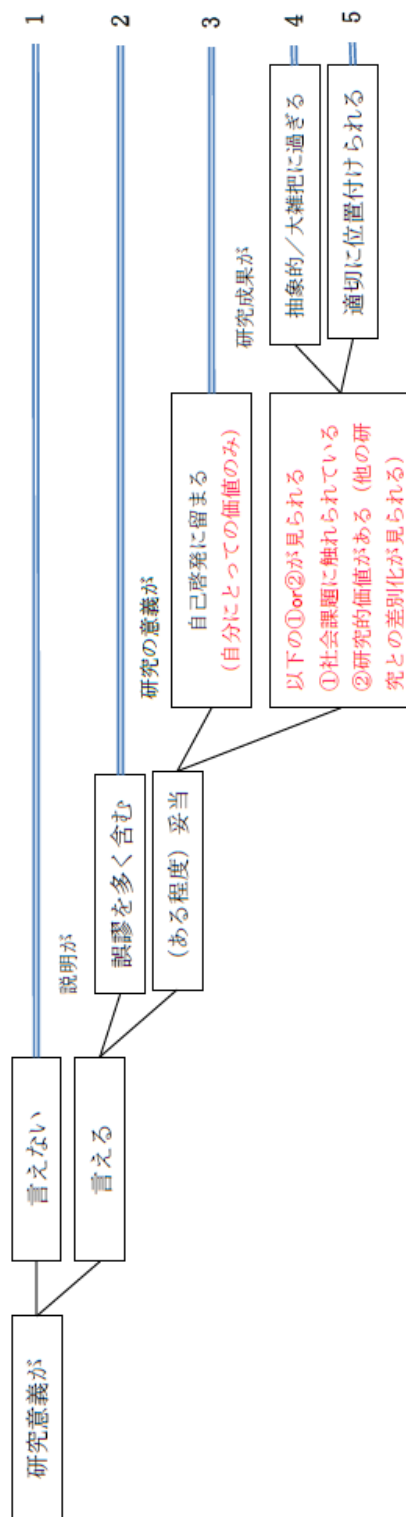
「これからヒアリングを始めます。質問に対して、簡潔に明確に答えて下さい。」

質問 1：あなたの卒業研究の結論（または、その見込み）を冒頭に明確に述べなさい。その上で、なぜ、そのような結論に至るのかを論理の道筋（理路）を明らかにして説明してください。※「結論」の項目の適切な叙述を促すための問い



質問 2：あなたが行った研究の「価値」（どのような意味があったのか）を適切に説明してください。

※「展望」の項目の適切な叙述を促すための問い



模範例) 「私の研究は〇〇という社会課題に対して、××の側面から解決を促すために必要な 1 調査だったと考える。××の側面では他に…や…の研究を重ねていくことで…。(もしくは〇〇に対しては××以外に△△や□□の側面でのアプローチが必要であり…)」かつ内容が妥当であれば「5」。



やばい...どうしよう

【卒業研究 第二稿 0903 提出】 についての指示書



私にできるか不安

1. 提出のポイント(主な変更点は赤色, 第1稿を反省して意識してほしい点は青色)

- ① 本文で **10 ページ以上** 書く。※詳細は2を参照。
※10 ページ以上とは、10 ページ目の **8 割程度**まで本文で書けていることを指す。
- ② 「題名」「指導教員」「名前」を表紙に書く。**※2 枚目に目次を付す。**
- ③ 〈研究の背景（先行研究）〉をさらに丁寧に書く。
- ④ 第一稿の内容に加えて「**自身の実験や調査の分析・考察**」も内容に入れる。
※例えば、文献調査・実験・アンケート調査など。
- ⑤ 提出期限 **2021 年 9 月 3 日(金)17 時** 厳守! @Teams 課題配信

2. 提出の前に、体裁を整えよう!!!

① 全体のページ設定

- ・枚数：本文 **10 ページ以上**（上限なし）。
※ページ数には、表紙、目次、今後の研究計画、参考・引用文献は含めない。**図表でスペースを取った場合は、その分の本文を増やす。**
- ・ページ設定：サイズ A4、余白 上下 20mm 左右 15mm、
文字の大きさは 10.5 ポイント、
和文は「MS 明朝体」、英文・数式は「Times New Roman」
- ・字数と行数：40 字×40 行
- ・ページ番号：本文の **1 ページ目**から「下部中央」に付す。



② 表紙と目次の体裁

表紙の体裁は以下を、目次の体裁は資料を参照する。

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 行目：「令和 3 年度 卒業論文 第一稿」 | ※【中央揃え、フォント 12, MS ゴシック】 |
| 中央やや上：題目（自分でつける） | ※【中央揃え、フォント 16, MS ゴシック】 |
| 下部中央：年・組・番号・氏名 | ※【中央揃え、フォント 12, MS ゴシック】 |
| | 年・組・番号と指名の間は 1 マスあける |
| ：指導教員 | ※【年組番氏名に同じ】 |

※ 次ページに「表紙」の参考図を掲載(図 1)。

令和 3 年度 卒業論文 第二稿

遣唐使に随行した道昭が古代日本の奈良仏教に果たした役割
－玄奘三蔵と行基との師弟関係に着目して－

筑波大学附属坂戸高等学校

総合科学科

3 年 B 組 42 番 岩井 香奈

担当教員 井上 卓也

2021 年 6 月 18 日

図 1 「表紙」の作成例

③ 本文(1ページ目)からの文字の体裁

- ・章・節・項は、【MS ゴシック】。
- ・本文の文字は、【和文は「MS 明朝体」、英文・数式は「Times New Roman」】。

④ 本文の構成（例） ※学問分野によって、好ましいあり方が異なる場合があります。

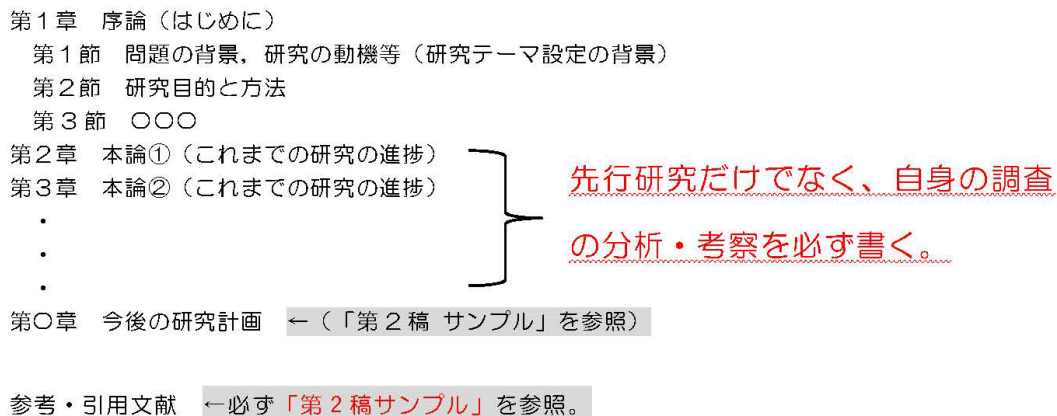


図2 「目次や本文の構成」参考図
（筆者作成）

⑤提出期限・方法

- ・時間：9月3日（金）17時まで
- ・提出先：各指導教員の先生の Teams 上の課題配信に **Word ファイル**を提出。
- ・ファイル名：**【B42 岩井香奈 「卒業研究」第二稿】**のフォーマットで。

⑥評価項目

- (a) 体裁を守っている。
- (b) 提出期限を守っている。
- (c) 参考引用文献の書き方が正確、かつ本文で引用したもの全て掲載している。
- (d) 他者の考え（引用）と自分自身の考えが区別できる書き方をしている。
- (e) 研究目的が具体化、焦点化され現実的である（壮大過ぎない）。
- (f) **自身の調査や実験に対する分析・考察が書かれている。**
- (g) 問題意識、研究目的、研究方法、仮説、内容、が一貫している。
- (h) その他、「指示書」や『学びの技』に記載されていることが守られている。

⑦第一稿を踏まえた、注意事項

本文

- ☐ ページ数を必ず付すこと。
→ ページ数は、本文から付す（やり方が分からない場合は検索）。
- ☐ 項と項の間も1行空ける。
- ☐ 誤字・脱字をなくす。
- ☐ 段落先頭の一字下げ。

図表

- ☐ 正しくナンバリングされている。
- ☐ タイトルを適切につけている。

引用

- ☐ 必要箇所のみ引用する。何でもかんでも長い文章を直接引用すればいいというわけではない。論文は、簡潔明瞭に。
- ☐ 引用の表記法の徹底（次ページ資料を参照）。

〔引用の表記法〕

1. 直接引用のしかた

引用部分を「 」で囲み、末尾に著者の姓、出版年、所在ページを（ ）内に書く。このとき文末の句点「。」は通常用いない。

(1) 短い引用文の場合

例 1)

塚原 (2020) は、「筑坂生の 95%が大トロの握りが…………である」 (p.60) と述べている。

例 2)

「筑坂生の 95%が大トロの握りが…………である」 (塚原, 2020, p.60) ことが明らかになった。
※ページが複数にまたがる場合は、「pp.60-61」と書く。

(2) 長い引用文の場合 (3 行以上)

引用の前後を 1 行を空け、引用部分は左右 2 マス空ける。

例)

塚原 (2020) は、26 期生の食の嗜好について、次のように述べている。

筑坂生の 95%が大トロの握りが好きである。大トロ、いうなれば至宝である。その価値はつねに筑坂生全体で意識され、その味わいは、常にドーパミンを増やすことにつながっている。従って、筑坂における大トロの現状分析は豊かな筑坂生活の実践研究の出発点において、欠くことのできないものである。(筑坂, 2020, p.60)

この結果から、26 期生の食生活について、いくつかの課題が浮き彫りになる。

2. 間接引用のしかた

間接引用では、内容を要約して書き、著者の姓、出版年を書く。

(1) 著者が 1 人のとき

例 1)

塚原 (2020) によると、筑坂生活の実践研究の出発点には、大トロの現状分析が不可欠である。

例 2)

筑坂生活の実践研究の出発点には、大トロの現状分析が不可欠である (塚原, 2020)。

(2) 著者が 2 人のとき

例 1) 塚原・井上 (2020) 例 2) (塚原・井上, 2020)

(3) 著者が 3 人以上のとき

例 1) 塚原他 (2020) 例 2) (塚原他, 2020)

目次（12 ポイント中央揃え）

（10.5 ポイント，「【Word】目次作成の便利技 タイトルとページの間に点線（リーダー）を入れる方法」などで検索）

第1章 はじめに	
第1節 研究テーマ設定の背景	1
第2節 研究目的と方法	2
第2章 ○○○○○	
第1節 ○○に対するアンケートの実施	3
第1項 ○○アンケート実施概要	
第2項 ○○アンケート分析結果と考察	
第2節 △△町に対する聞き取り（インタビュー）調査の実施	6
第1項 △△町聞き取り調査実施概要	
第2項 △△町聞き取り調査分析結果	
第3項 △△町聞き取り調査結果からの考察および仮説	
第3節 ○○アンケートと△△町聞き取り調査の比較	11
第1項 共通点および相違点	
第2項 考察とまとめ	
第3章 ○○○○○	
第1節 ○○に対するアンケートの実施	15
第1項 ○○アンケート実施概要	
第2項 ○○アンケート分析結果と考察	
第2節 △△町に対する聞き取り（インタビュー）調査の実施	18
第1項 △△町聞き取り調査実施概要	
第2項 △△町聞き取り調査分析結果	
第3項 △△町聞き取り調査結果からの考察および仮説	
第3節 ○○アンケートと△△町聞き取り調査の比較	21
第1項 共通点および相違点	
第2項 考察とまとめ など	
第4章 おわりに	
第1節 結論	23
第2節 今後の課題・展望	24
謝辞	25
参考・引用文献	26
資料	27

【資料 5】

卒業論文 第二稿 サンプル

サンプル

【表紙】 ←灰色の網掛けはサンプルの説明です。本番では必要のないものです。

令和3年度 卒業論文 第一稿

学校現場における働き方改革を再考する
—生徒は課外活動のあり方をどのように考えているのか—

筑波大学附属坂戸高等学校

総合科学科

3年B組 42番 岩井 香奈

担当教員 井上 卓也

2021年6月18日

ページをかえる

※「表紙の後、1ページ目の前」に目次を1枚入れる。ページ数には含まない。

【1 ページ目】

第1章 はじめに←【フォント 10.5 MS ゴシック】（以下、章・節・項タイトルは同様）

第1節 研究テーマ設定の背景 ←【フォント 10.5 MS ゴシック】

近年、日本では、労働者の労働時間の長期化が社会問題として挙げられる。（中略）とりわけ、学校の教職員においては、残業時間が月に平均 100 時間を超える等、その深刻さがマスメディアを通して報道されている¹。将来、高校教員になることを志望している私にとって、……。したがって、……を目的とした活動を推進することは、……という点で意義があると考えた。

〕節と節のあいだは1行あける

第2節 研究目的と方法

前節での議論を踏まえ、本研究の目的は、学校教育現場の働き方改革を推進する過程における、生徒や保護者の部活動に対する考え方の変容明らかにすることである。その方法として、先行研究を精査し〇〇を明らかにするためにアンケートを実施する。そのアンケート結果をもとにワークショップを実施し、……。

そして、……を分析し、……を推進する上での示唆を得る。

研究方法では、アンケート調査、文献調査、実験、
実地調査などを踏まえてどういった手順で研究を進めるのか、詳細に記す。

目的は簡潔に一文で述べる。

脚注：

本文に盛り込む程ではないが根拠として必要な情報は、「脚注」に書きましょう。「参照設定」の脚注でできます。←【フォント 9 MS 明朝】（以下、脚注は同様に）

¹ 『学校教員の実態（仮）』p.187によると、岩井氏は学校教員の業務時間数に関して……と述べており、○年○月○日「○○新聞」朝刊では「……」と報じられるなど、様々なメディアで取り上げられている。

上記で述べた、研究目的に対する研究方法を経て、最終的にどのような結果が出るかが想定されるか、仮説があればそれを記す。(先行研究を踏まえて仮説を立てていると GOOD)

※事前に特定の仮説を持たず、研究を進めていく過程で仮説を見いだすものもある。

第2章 学校教育現場を取り巻く問題の背景

第1節 学校教育現場において働き方改革の推進が求められる背景

2018年に実施されたOECDによる国際教員指導環境調査(Teaching and Learning International Survey;以下、TALISと略記)によれば、「・・・²」と指摘されている(国立教育政策研究所, 2019, p.○)。この調査では、先進国の中でも日本の教員の労働環境が・・・。(中略)さらに、持続可能な開発(以下、SDGsと略記)においては「質の高い教育をみんなに」という理念が掲げられており、・・・(中略)。学校における部活動のあり方について、内田(2017)は、「・・・」と述べている。(中略)したがって、現状の学校教育現場の労働条件が改善されなければ、将来を担う児童生徒に対する教育の質の低下を招くことは必至である。よって、学校教育現場における働き方改革を促進させることは、社会的にみて重要であると考えられる。

第2節 学校教育現場における働き方改革の事例

第1項 日本における近年の働き方改革を指向した教育制度

・・・。

〕項と項のあいだは1行あける

第2項 筑波大学附属坂戸高等学校の取り組み

3年B組では・・・。

・・・。

〕章と章のあいだは2行あける

〕

第3章 今後の研究計画

本章では、現時点での進捗状況や今後の課題を、なるべく詳細に、赤裸々にならして書きましょう。

(これは第1稿のための章であり、本番の最終提出では書きません。)

また、この章ばかり分量を増やしてページ数を稼いでも点数になりませんのでご注意ください。

「今後の研究計画」の書き方の例は次ページ(表1) ㊦

² ○○では、「・・・」と述べられており、・・・ということが明らかとなっている。

表1 今後の研究計画の例

日程	計画の大項目	計画の小項目	期限
6月	坂戸市の夏野菜の成分の特徴を明らかにする。	・『坂戸の野菜（仮）』を読破する。	・6月16日（水）
		・埼玉県とその他地域の夏野菜の成分について調べ、共通点と相違点をまとめる。	
	調べた成分の特徴から、本研究で使用する野菜を決定する。	・・・・・・・・・・・	・6月23日（水）
	対象とする小学校を決定する。	・坂戸市内のどこの小学校で実践できそうか、渋木先生に相談する。	・6月25日（金）
7月	・野菜が苦手な小学生に対して、既に坂戸市内で行われていることを調査する。	・給食センターの方にインタビューとアンケートを行う。	・7月10日（土）
		・坂戸市内の小学校から給食カレンダーをいただき、教員と児童にインタビューをする。	
8月			

※表にしなくても良いが、内容と期限を具体的に記載すること。

卒業論文 第二稿 サンプル

※
※サンプルでは便宜上5行あけていますが、※
※本番は詰めてくださいませ。※
※※

参考文献の書き方

活動を進めるにあたり使用した資料や論文等はすべて参考文献として一覧にする必要があります。

参考・引用文献 ←【10.5 ポイント、MS ゴシック】

【図書】

内田良『ブラック部活動 子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版、2017年
国立教育政策研究所『教員環境の国際比較 OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2018 報告書 学び続ける教員と校長』ぎょうせい、2019年 ←2行目からは2マス空け
柴田三郎『知られざる仏像』岩井堂出版、2020年
沼田二郎『日本の仏像を見るぞう』岩井出版会、2020年
山田太郎『仏像はなぜ容姿端麗なのか』岩井出版、2020年

【図書】〈形式〉

「著者名、書名、出版社、出版年」
を基本とする。

【雑誌・論文】〈形式〉

「著者名、タイトル、誌名、巻・号数、
出版年、掲載ページ」を基本とする。 ※URL は原則必要無

【雑誌・新聞】

林田四郎「ミッフィー展を逃したとは言わせない?!」『日刊岩井新聞』2021年1月7日、朝刊、p.3

【論文】

岩井香奈「東部ユーラシア世界の仏教交流史-道昭の軌跡から-」『THE 日本史研究』35 (1)、2021年
pp. 45-48 ←2行目からは2マス空け

【ウェブサイト】

中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像 (答申)」『文部科学省』2005年11月26日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm , (最終閲覧日: 2021年1月28日)

【ウェブサイト】〈形式〉

「著者名、ウェブページタイトル、ウェブサイトの名称、
更新日付 (画面に表示がある場合)、入手先 (URL)、入手日付」
を基本とする。

Ⅲ 附属坂戸高等学校（拠点校）での高大連携と 高度な学習環境の整備

拠点校では、SGH 指定以来、筑波大学との連携を中心に、高大連携と高度な学習環境の整備をすすめてきた。とくに WWL 事業の主要な海外パートナーである ASEAN 各国の大学およびその附属学校とは 2010 年度から国際交流を開始し、2012 年から毎年、高校生が主体となった「高校生国際 ESD シンポジウム」を開催している。ASEAN の附属学校とは、順次、国際連携協定を締結し連携を深めてきたため、Covid-19 の影響下にあっても揺るぎない連携事業を実施できた。

WWL 事業では、その目標達成をめざし、組織的に高大連携を進めていく必要がある。WWL 事業のターゲットとして設定している、課題研究の高度化では、筑波大学教員による指導を受けることができる体制構築、国際的なネットワークの構築とプログラム開発については、東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) や AIMS (ASEAN International Mobility for Students) を担当している大学国際室と連携をおこなっている。本年度は、1) 大学教員による課題研究の指導、2) 大学国際室との連携、3) 先取り履修を視野に入れた高度な学びの整備状況やその他の特徴的な事例についてまとめる。

1 筑波大学教員による課題研究指導（令和 3 年度の事例）

本プログラムでは、生徒が筑波大学の研究室にて卒業構想発表を行い、筑波大学の教員や大学院生・大学生からの助言・講評を得ることにより、学習意欲を喚起するとともに、実験・調査の知識や技術の基礎を得ることを目的としている。プログラムへの参加を希望する生徒は、研究計画書を作成したうえで学校長への研究構想発表を行い、その中から学校長の推薦を得た者が本プログラムへ参加した。以下に、本プログラムの流れを示す。

（1）高大連携卒業研究支援プログラムのガイダンス

プログラムへの参加を検討している 38 名の生徒を対象とし、学校長による研究についての講話や、本プログラムのガイダンスを実施した。ここでは、以下の 5 点について指導をした。

- ① T-GAP や科目群科目の学び、ボランティア等課外活動から自分自身の興味関心から研究テーマを設定すること。
- ② 自分の興味関心を研究につなげるためには、書籍、先行研究からの文献調査を徹底すること。
- ③ 総合科学科の多様な先生方と相談すること。
- ④ 筑波大学のホームページ研究者総覧 TRIOS で支援を受けたい研究室を選ぶこと。
- ⑤ 本プログラムへの申し込み方法と学校長面談の日程と発表資料の作成。

（2）学校長面談

1) 一次面談（2020 年 12 月 24 日、25 日）

プログラム参加のための学校長との一次面談に参加した生徒は 19 名で、研究構想及び支援希望の研究室について、パワーポイントを用いて 5～10 分程度でプレゼンした。生徒のプレゼンに対して、学校長から問いの根拠となる先行研究の重要性や前提となる情報収集の大切さなどの指導・助言を受けた。さらに、冬休みの個別課題を具体的に提示いただいた。

2) 二次面談（2021 年 1 月 19 日、20 日 ※オンライン）

学校長との二次面談は、コロナウィルスの感染拡大防止の為、オンライン（Zoom）で実施した。面談に参加した生徒は 13 名で、文献調査の方向性や具体的な研究計画へのアドバイスをいただいた。特に、壮大なテーマで進めようとしている生徒に対しては、先行研究をさらに調べたり本校の専門の先生に相談することを努め、現実的なテーマに近づくよう助言をいただいた。一次面接に参加し二次面接に参加しなかった 6 名の生徒の辞退理由は、学校長からの個別課題を実施できなかったことや研究テーマの変更、支援を受ける研究室が無いことなどであった。

3) 三次面談（2021 年 2 月～3 月）

二次面談に参加した生徒は、助言内容を参考にして先行研究をさらに調べたり研究計画書を練り上げたりすることを繰り返した。そして、三次面談は、3 月 31 日までに生徒が自分で学校長とアポイントメントをとり研究計画書を提出したうえで行われた。三次面談に参加した生徒は 4 名で、そのうち 2 名が学校長の推薦を受け筑波大学の研究室から支援を受けることとなった。残りの 2 名は、コロナウィルス感染拡大のため研究計画の実施が困難となったり、研究倫理の観点から計画の再考

となったりした。二次面談に参加し三次面談に参加しなかった 9 名の生徒は、先行研究の調査不足や現実的で実現可能な研究テーマにすることができなかったため辞退した。

2 筑波大学国際室及び東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）との連携

SGH 事業において、筑波大学とはとくに、アセアン横断型グローバル課題挑戦的教育プログラム（AIMS）（平成 25 年度文部科学省・大学の世界展開力強化事業）との連携を 5 年間にわたり深めてきた。AIMS は拠点校の SGH プログラムと非常に親和性が高い。世界展開力事業としての文部科学省の指定はすでに終わったが、筑波大学独自の事業として継続されている。

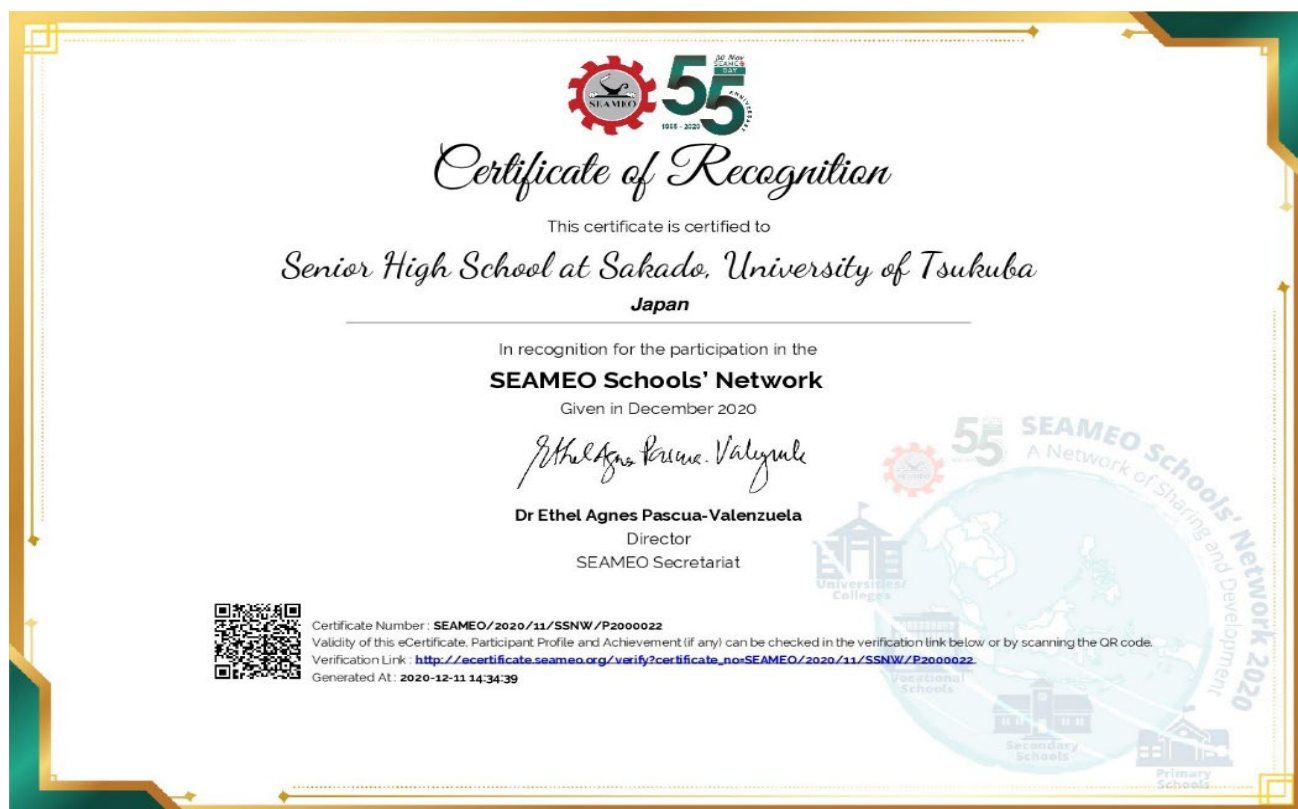
また、WWL 事業ではあらたに、国際室を通じて東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）との連携を深めている。SEAMEO は、加盟国間で教育実習を相互に実施する SEA-teacher プログラムを実施している（<https://seateacher.seameo.org/>）。

2016 年から開始され、年 2 回のペースで実施されている。日本の Affiliate メンバーである筑波大学にもこのプログラムへの参画が期待され、2020 年 2 月に、拠点校をベースに日本ではじめて SEA-teacher プログラムのパイロットプロジェクトが実施された。インドネシア教育大学（理科 2 名）、コンケン大学（英語 2 名）、ルソン州立中央大学（公民科 2 名）から来日し、2020 年 2 月 6 日から 27 日までの 3 週間にわたり、校内の多目的交流棟（合宿所）に宿泊し実施した。2020 年度も受け入れを計画していたが、Covid-19 の影響により中止となった。一方で、オンラインによる教育実習の受け入れの検討を開始しており、新たな展開が期待されている。

本年度の成果は、SEAMEO Schools' Network 加盟校が「高校生国際 ESD シンポジウム」に参加したことである。SEAMEO 事務局に広報を依頼したところ、465 件の問い合わせがあった。残念ながら、オンライン会議システムのキャパシティと教員の業務負荷を考慮し、200 校まで参加校を絞らざるを得なかった。

英語の課題研究発表会は、東南アジア諸国の高校生及び教員が積極的に発言し、例年以上に盛況だった。また、英語開催のワークショップではグループディスカッションに積極的に参加し、生徒・教員共にアクティブな面が目立った。

今後は、SEAMEO 加盟校の生徒に研究発表の機会を提供することが出来るかどうか、検討したい。また、SEAMEO に加盟する教員養成を主とする大学の教員が多数参観した。そのため、生徒の活動に対してフィードバックが得られる機会も提供したいと考えている。



SEAMEO Schools' Network 加盟認定書（2020 年 12 月 11 日）

3 先取り履修を視野に入れた高度な学びの整備状況やその他の特徴的な取組

先取り履修の実現に向けた、大学の講義の聴講や共同プログラムの試行に関しては、2020 年度、筑波大学生物資源学類の科目として、「国際農業研修Ⅶ」が開設された。高校生・大学生が同時に履修できる科目であり、大学のシラバスにも掲載された。しかし、COVID-19 の影響により海外渡航が中止となったため、授業自体も開講の中止が決定された。

しかし、シラバスに掲載され高校生・大学生が海外で同時にフィールドワークを実施できる体制は整った。海外が難しい場合は、国内フィールドワークで代替できるかどうか、検討したい。

EC41173	国際農業研修Ⅶ	3	2.0	1 - 3					(インターンシップ) 国外。2020/10/01 開講中止決定。 英語で授業。 2020年度開講せず。	シラバス 授業概要
---------	---------	---	-----	-------	--	--	--	--	---	--------------

海外の農村におけるPBLを通じた開発支援を目的とした国際援助の在り方について学修する。附属坂戸高校と共同で実施。
[詳しく](#) 筑波大学教育課程編成支援システム (KdB) より <https://kdb.tsukuba.ac.jp>

Ⅳ 国内外連携校との取組

1 国内連携校での海外合同フィールドワーク代替措置（中止）

COVID-19 感染拡大のため、2021 年度のタスマニア合同フィールドワークの代替措置として、以下の国内教員研修を計画したが、感染拡大第 6 波の影響で中止とした。

コロナ感染拡大で中止

長崎西海市での教員研修のご案内

WWL 筑波大学コンソーシアム連携校校長 殿

筑波大学附属学校教育局教育長 溝上智恵子

2019 年度に発足しました筑波大学の WWL コンソーシアム構築支援事業では、連携校としてご協力いただき、厚く御礼申し上げます。また、11 月 20 日（土）に実施いたしました附属坂戸高等学校でのオンラインによる「高校生国際 ESD シンポジウム」は、多くの国内外連携校の参加により充実した国際会議となりましたこと、深く感謝申し上げます。

Covid-19 感染拡大により、2020～2021 年度の教員研修を兼ねた海外合同フィールドワーク（オーストラリア・タスマニア島）は、残念ながら中止となりました。その代替措置として、拠点校の附属坂戸高等学校が計画した国内フィールドワーク「地域資源を生かしたまちづくりフィールドトリップー長崎県・西海市の地域活性化の取り組みを知ろうー」に連携校の教員が同行し、地方創生や地域活性化を主体的に学習するフィールドワークの在り方を研修し、今後の探究型学習に役立てたいと考えております。

いまだに続いております Covid-19 の影響で、多くの校外学習等の行事が中止あるいは延期されております。今後の感染状況も予断を許しませんが、参加を希望される先生がおられましたら、ご紹介ください。

◇ 研修期間 2020 年 3 月 15 日（火）～17 日（木）2 泊 3 日

◇ 参加対象

筑波大学附属学校教育局教職員（梶山正明教育長補佐、久保尊洋特任助教、事務）
各連携校教員より 1 名（筑波大学附属高等学校・駒場中高等学校・視覚特別支援学校高等部・聴覚特別支援学校高等部・桐が丘特別支援学校高等部、東京学芸大学附属国際中等教育学校、お茶の水女子大学附属高等学校）

◇ 行程（計画中）

- 3 月 15 日（火） 移動（羽田空港→長崎空港）→昼食→“平和学習ー地域を知ろう、歴史を知ろうー”→移動（車：長崎市内→西海市）→西海市のホテル
3 月 16 日（水） 朝食→“地域資源を生かした取組みを体験しよう①：無人島事業”→昼食→“地域資源を生かした取組みを体験しよう②：体験民泊事業”→西海市のホテル
3 月 17 日（木） 朝食→まとめ活動→移動（長崎空港→羽田 or 成田空港）

※ 参考資料 「地域資源を生かしたまちづくりフィールドトリップー長崎県・西海市の地域活性化の取り組みを知ろうー」

◇ 出張経費 筑波大学の WWL コンソーシアム構築支援事業より支出

◇ その他

- ・文部科学省に変更を申請し、その結果を受けて上記の計画を具体化していきます。
- ・三密回避の対策を講じますが、今後のコロナ感染状況によっては中止となる場合があります。
- ・第一次募集締め切りは令和 4 年 1 月 11 日（火）とし、それまでにご一報下さい。

2 全国高校生フォーラムでの連携

令和3年12月19日（日）に、文部科学省・筑波大学主催による「2021年度全国高校生フォーラム」が開催された。COVID-19感染拡大のため、ポスター発表は動画によるプレゼンテーションへ、分科会はオンライン開催に変更されて実施された。本学のWWLコンソーシアムからは、下図の5校が参加した。

WWL2019

W201901-1 筑波大学附属坂戸高等学校/Senior High School at Sakado, University of Tsukuba

森林火災における土壌への影響/Impact of forest fires on soil

 Presentation Video

 Presentation Data

 Outline

W201901-3 カセサート大学付属学校/Kasetsart University Laboratory School

鉢植え用の混合土の農業利用のための肥沃度の評価/Fertility evaluation for agricultural uses in potting soil mix

 Presentation Video

 Presentation Data

 Outline

W201901-4 フィリピン大学附属ルーラル高等学校/University of the Philippines Rural High School

フィリピンの自然環境/Natural Environment in the Philippines

 Presentation Video

 Presentation Data

 Outline

SGHN026 筑波大学附属高等学校/Senior High School at Otsuka, University of Tsukuba

SDGs教育に最適なロールプレイングゲーム/Role playing game for learning about SDGs

 Presentation Video

 Presentation Data

 Outline

SGHN028 東京学芸大学附属国際中等教育学校/Tokyo Gakugei University International Secondary School

プラスチック製品の紙素材による代替商品の開発/Development of paper products to tackle plastic pollution

 Presentation Video

 Presentation Data

 Outline

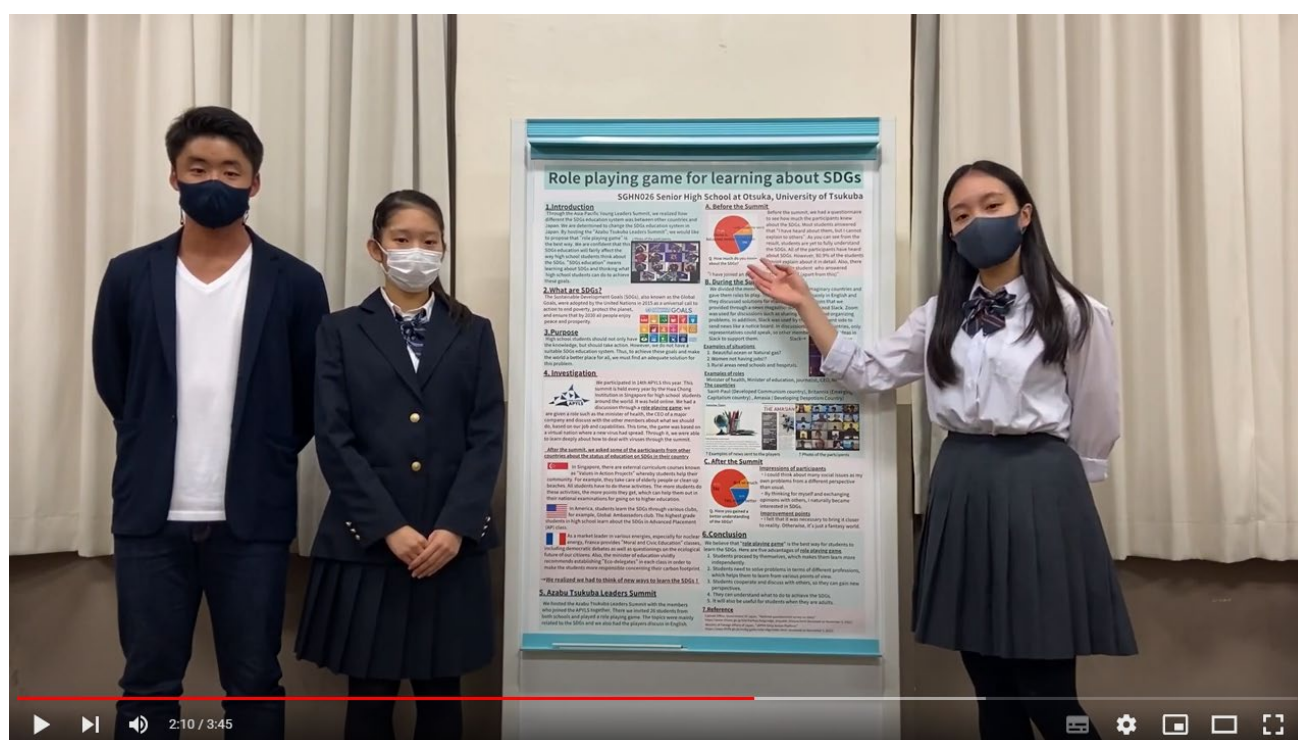
以上の5校の発表の様子を次頁より掲載し紹介する。また、英語によるプレゼンテーションの動画は、右URLから視聴することができる。

<https://b-wwl.jp/forum2021/>

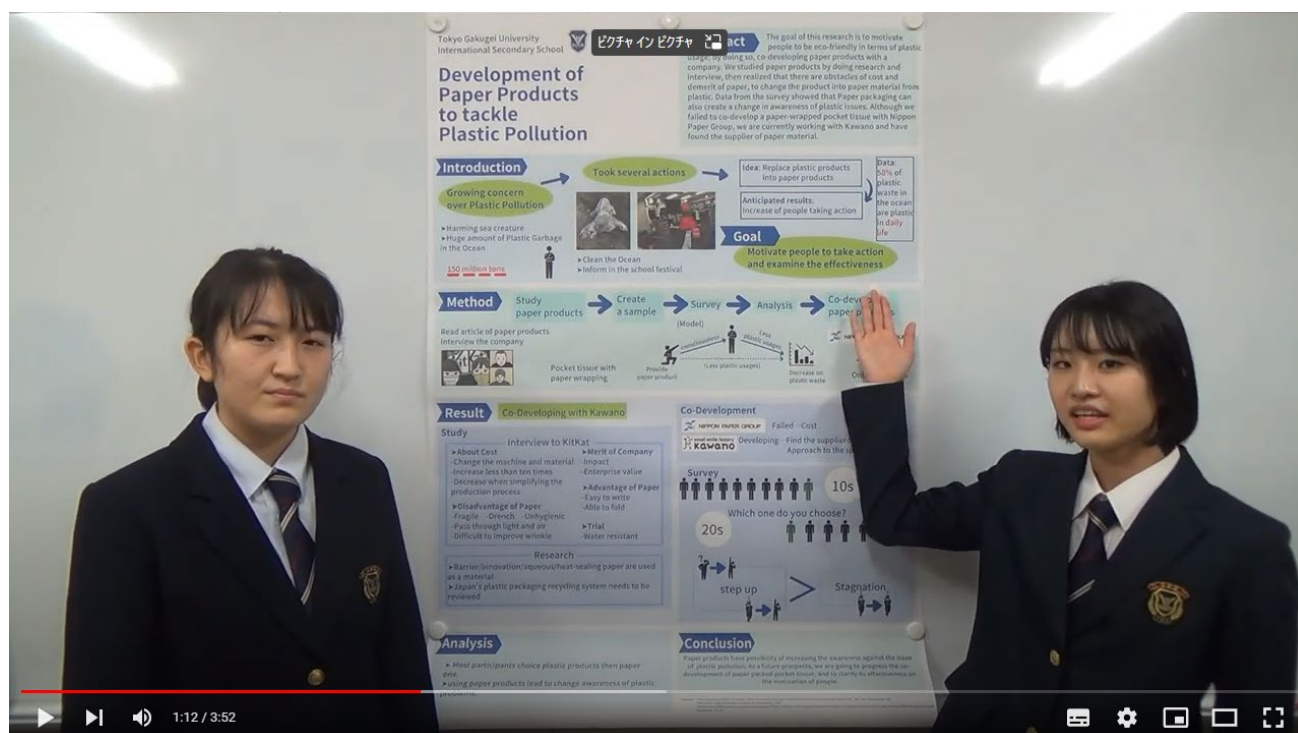
◇ 筑波大学附属坂戸高等学校



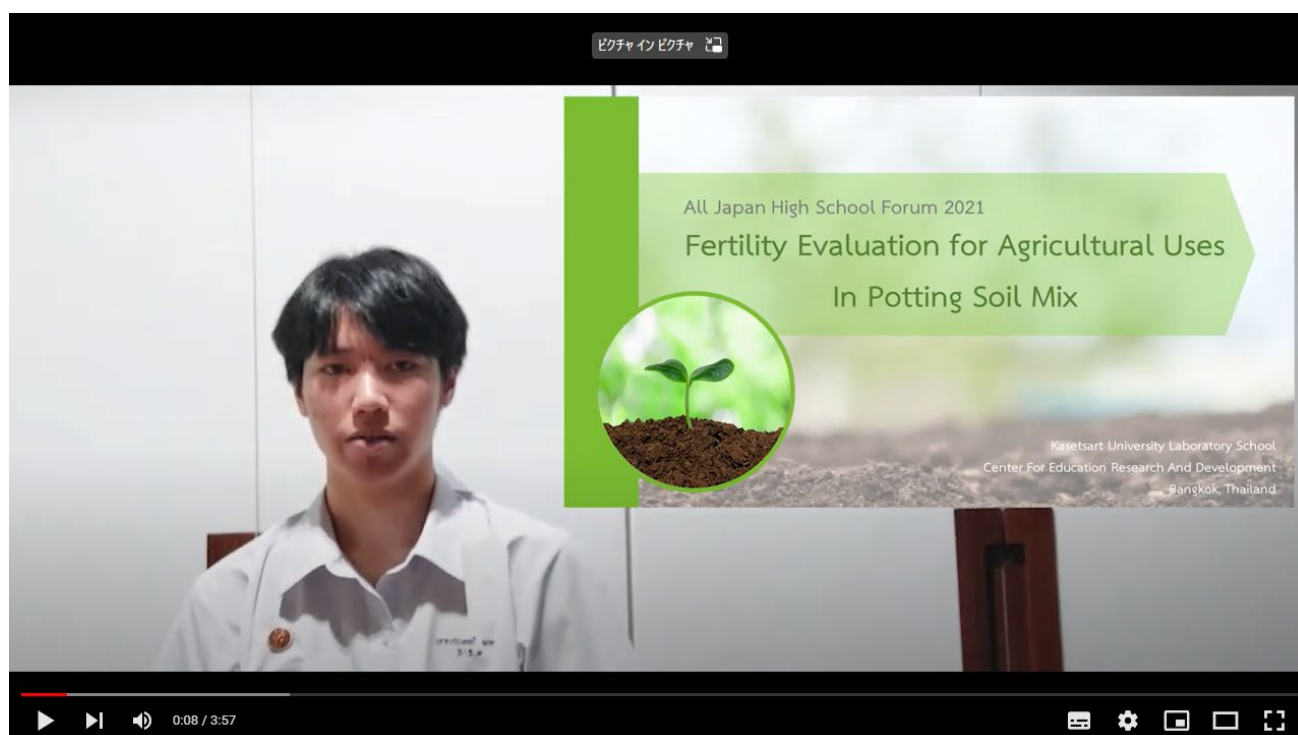
◇ 筑波大学附属高等学校



◇ 東京学芸大学附属国際中等教育学校



◇ カセサート大学附属高等学校



◇ フィリピン大学附属ルーラル高等学校



**V 筑波大学附属学校群の特色を活かした
「オリンピック・パラリンピック教育」と
「インクルーシブ教育」の推進**

1 日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムの開催

近代オリンピックの創始者の名を冠した「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」が 1997 年度より隔年の持ち回りで開かれている。

日本からは 2009 年より生徒の派遣を開始し、日本の生徒の評価は高く、2015 年から 7 名のフルメンバーでの参加が認められた。2013 年 9 月に 2020 東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まり、国内の「オリパラ教育」推進に追い風が吹く中で、国際 YF への派遣生徒の選考会を兼ねた高校生向けのオリンピック教育事業が企画され、「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム（国内 YF）」が始まった。

2021 年はキプロスで第 13 回国際 YF が予定されていたが、COVID-19 感染拡大のため 2022 年に延期された。そこで、2020 年 12 月にオンラインで開催された国内 YF で日本代表に選出された高校生に対し、2021 年 6 月 8 日に「国際 ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム日本代表者研修」をオンラインで実施した。

さらに、2022 年 10 月 8～15 日に延期された「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム・キプロス大会」の代表選考会を兼ね、「日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 2021」を以下の要領で開催した。

国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム	
第1回	1997年 ル・アーブル(フランス)
第2回	1999年 マッチ・ウェンロック(イギリス)
第3回	2001年 ローザンヌ(スイス)
第4回	2003年 アレンツァーノ(イタリア)
第5回	2005年 ラートシュタット(オーストリア)
第6回	2007年 ターボル(チェコ共和国) ... 日本に紹介
第7回	2009年 オリンピア、パリニ(ギリシア) ... 日本初参加
第8回	2011年 北京(中国) ... 筑附高から2名
第9回	2013年 リレハンメル(ノルウェー) ... 筑附高から2名
第10回	2015年 ピエスチャニ(スロバキア) ... 日本から7名
第11回	2017年 ウルヌルメ(エストニア) ... 日本から7名
第12回	2019年 マコン(フランス) ... 日本から6名
第13回	「2021年キプロス」だったが...

◇ 事業概要

【目的】

- 1) オリンピック教育：日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムの理解
- 2) 選考：第 13 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの参加者選考

【主催】 日本ピエール・ド・クーベルタン委員会 (CJPC)

【主管】 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム (CORE)、中京大学
特定非営利活動法人サロン 2002

【協力】 特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー (JOA)
東京都高等学校体育連盟研究部、東海学園大学

【期 日】 2021 年 12 月 25 日 (土)、26 日 (日) ※両日とも 9:00～17:00

【会 場】 オンライン (Zoom を利用)

【参加者】 高校生 26 名 (男 4 名、女 22 名)

筑波大学附属高校 (3 名)、筑波大学附属坂戸高校 (2 名)、自由学園男子部・女子部 (4 名)、国士舘高校 (2 名)、中京大学附属中京高校 (13 名)、名古屋大学教育学部附属高校 (2 名)

注) 2015 年度以降、計 6 回 (宿泊研修 3 回、都内での 2 日間の研修 2 回、オンライン研修 1 回) 開かれた本事業に生徒を派遣した高校 (筑波大学附属高校・同附属駒場高校・同附属坂戸高校、中京大学附属中京高校、帝京高校、自由学園 (男女)、クラーク記念国際高校、東京都高体連研究部常任委員校ほか) およびスポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」推進校などを対象に募集した。

【プログラムとスケジュール】

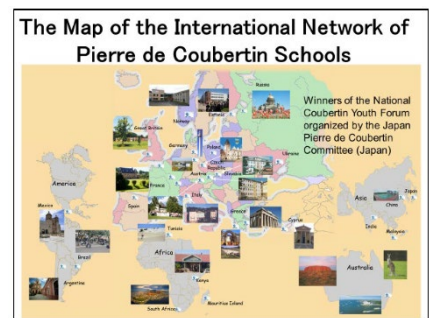
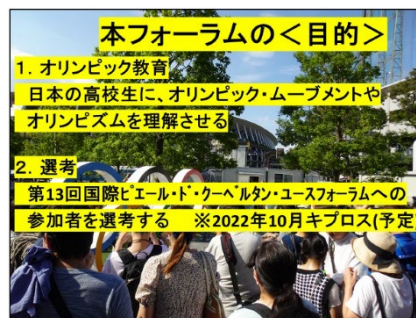
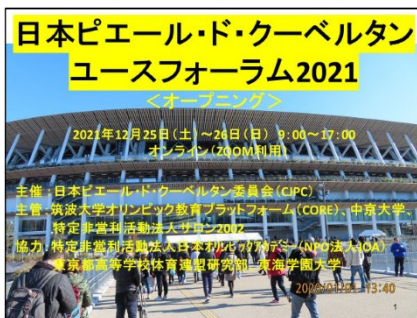
◆12 月 25 日 (土)

- 9:00～10:00 オープニング／オリエンテーション (田原淳子、中塚義実)
- 10:10～11:00 講義① クーベルタンの思想と行動からオリンピズムを考えよう (和田浩一)
- 11:10～12:00 講義② 嘉納治五郎とオリンピック・ムーブメント (真田久)
- 13:00～14:50 講義③ 国際スポーツ大会におけるおもてなしの心 (江上いずみ)
- 15:00～17:00 演習① 中京大スポーツミュージアム (伊東佳那子、来田享子)

◆12月26日（日）

- 9:00～10:20 演習② オリンピックと持続可能な社会（宮崎明世）
 10:30～11:00 特別講演 海外からみた東京2020大会（Helen Brownlee）
 11:00～12:30 演習③ 英語での討議（嶋崎雅規）
 13:30～15:00 演習④ まとめと発表
 15:20～15:50 オンラインエクササイズ（山田恵子）
 16:00～16:45 クロージング
 17:00 解散

※ 課題レポートを12月27日（月）中に提出する



オンラインエクササイズの様子

2 共生シンポジウムの開催

三浦海岸で計画していた共同生活は COVID-19 感染拡大のため中止になったが、12 月 12 日に「共生社会を目指す芸術・文化交流の集い」をオンラインで開催し、各附属学校の児童生徒および保護者約 200 人が参加して、熱心に視聴した。

詳細は URL で、https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/2021_symposium/

◇ 開催要項

【目的】 筑波大学の附属学校群 11 校の幼児児童生徒，保護者，教職員を対象として，芸術・文化活動を通じた交流により，共生社会に向けた意識の涵養を図る。

【日時】 令和 2 年 12 月 12 日（日）13:00～15:30

【発信会場】 筑波大学附属桐が丘特別支援学校

【開催方法】 Zoom による開催

【参加者】 附属学校所属の幼児児童生徒，保護者，教職員等

【プログラム】

13:00 教育長挨拶・事業の説明等

13:10～14:10 【第 1 部】講演

『小さなことも、面白がりながら積み重ねる』

石田智哉氏（附属桐が丘特別支援学校・卒、映画監督
立教大学大学院博士前期課程在学中）

14:10～15:25 【第 2 部】プレゼンテーションリレー

『交流・共生』をテーマにした各附属学校児童生徒による

発表

①大塚 「あなたといっしょに「ユーとチューブ体操」」（動画&生出演）

②小学校「ともだちはいいもんだ」（動画：影絵&生出演）

③久里浜「私たちの修学旅行」（動画&生出演）

④中学校「オンラインでの交流会活動」（生出演）

⑤高校 「“ふつう”ってなんだろう」（動画：影絵&生出演）

⑥視覚 「音楽から考える共生社会 ～東京藝術大学とともにつくる演奏会～」 （動画）

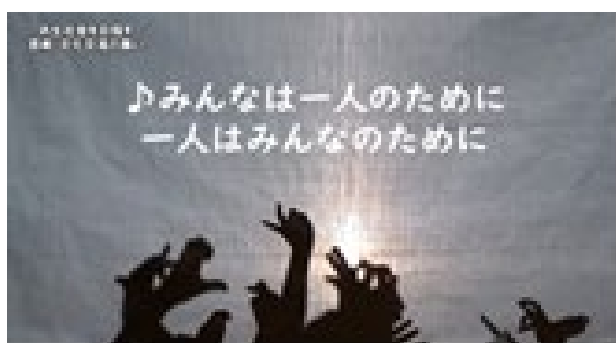
⑦坂戸 「コロナ禍の交流会」（動画）

⑧聴覚 「聴覚障害者について私たちが伝えたいこと」（動画&生出演）

⑨駒場 「附属視覚と附属中学との 3 校間交流を通して」（動画）

⑩桐が丘 「高校生になって、共生について感じていること」（動画）

15:25 教育局次長感想



発表 筑波大学附属小学校



発表 筑波大学附属視覚特別支援学校

VI 高校生国際ESDシンポジウムの報告

2012 年度から拠点校では、高校生国際 ESD シンポジウムを毎年開催し、2021 年度で 10 回目の開催となった。SGH 指定期間中は、これとあわせて全国 SGH 校生徒成果発表会を実施してきた。WWL 指定後から、The SDGs Global Engagement Conference Tokyo とし、WWL で掲げている SDGs に関する国際会議を開催している。Covid-19 の影響で、この 2 年間は新たな取組みとして、オンラインでの国際会議の開催に挑戦した。

1 大会概要

1. 目的：海外の高校生および WWL 校、SGH 校、地域協働事業校の生徒および教員が集い、国際シンポジウムを開催することを通じて、参加者が持続可能な社会の実現を目指してグローバル課題に主体的に取り組む姿勢を涵養し、グローバル人材としての資質を高める。さらに、学びの深化のためのネットワークづくりを進め、SDGs を実現するためのコンソーシアムを構築する。
2. 大会メインテーマ
 - ① Let's make a difference Only ten years left to meet our SDGs
 - ② 行動するための 10 年—残された時間はわずかだ—
3. 日 時 令和 3 年 11 月 20 日（土）9 時 50 分～12 時 30 分（日本標準時間）
4. 大会名称 「第 10 回高校生国際 ESD シンポジウム」および
「The 3rd SDGs Global Engagement Conference 」 On-line Version
5. 主 催 筑波大学附属坂戸高等学校・筑波大学附属学校教育局
6. 対 象 全国の WWL 事業拠点校・共同実施校・連携校、SGH ネットワーク校、
地域協働事業指定校等の生徒および教員、教育関係者、SDGs 関連団体等
7. 参 加 校 国内約 200 校



2 大会内容

2021 年度の大会プログラムは以下の通りである。



***The Decennial High School
Students'
International ESD Symposium
Online version 2021
&
The 3rd SDGs
Global Engagement Conference***

November 20, 2021
9:50 – 12:30 (JST, UTC+0900)
@ wherever you are

Senior High School at Sakado, University of Tsukuba
筑波大学附属坂戸高等学校

Program

(Starts at 9:50)

【ZOOM ID: 987 3532 9459 Passcode: 650174】

<https://zoom.us/j/98735329459?pwd=enlqeTYxWDNRelhmTWI3WjNVQnZ3UT09>

Opening Address

Dr. Chieko MIZOUE

(Vice President, University of Tsukuba)

Opening Session

Hanano SUZUKI, Isora YAMAZAKI

(Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)

Keynote Speech

Dr. Masahisa SATO

(Professor, Graduate School of Environmental and Information Studies, Tokyo City University)

Section Meeting (10:45-12:00)

Section Number	Title
Room A	Ethical Consumption Workshop (Japanese)
Room B	Think Soybeans, Act SDGs! Workshop (English)
Room C	Oral presentations in English
Room D	Oral presentations in English
Room E	COVID-19: Its Impacts and Beyond Workshop (English)
Room F	Oral presentations in Japanese
Room G	Oral presentations in Japanese
Room I	Special session (Agriculture and Sustainability) (Japanese)
Room J	Special session for junior high students (Japanese)
Room K	Special session for 1D students (Japanese)

***** Starts at 12:15 【ZOOM ID: 987 3532 9459

Passcode: 650174】

<https://zoom.us/j/98735329459?pwd=enlqeTYxWDNRelhmTWI3WjNVQnZ3UT09>

Review

Dr. Nakao NOMURA

(Associate Professor, University of Tsukuba)

Closing Session

Hanano SUZUKI, Isora YAMAZAKI

(Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)

(Ends at 12:30)

Participants

Forestry Vocational High School Republic of Indonesia, Indonesia

Bogor Agricultural University Kornita Senior High School,

Indonesia University of the Philippines Rural High School, the

Philippines Laboratory School of Indonesia University of Education,

Indonesia Kasetsart University Laboratory School Bangkok Campus,

Thailand Elanora State High School, Australia

Brihaspati Vidyasadan High School, Nepal

The Olympia Schools, Vietnam

VNU University of Education, The High School of Education Sciences, Vietnam

Ehime University Senior High School, Japan

Ibaraki Prefectural Mito Agricultural High School, Japan

Nagano Prefectural Ueda Senior High School, Japan

Tokyo Gakugei University International Secondary School, Japan

Senior High School at Otsuka, University of Tsukuba, Japan

Special Needs Education School for the Deaf, University of Tsukuba, Japan

SEAMEO School's Network

Senior High School at Sakado, University of Tsukuba, Japan

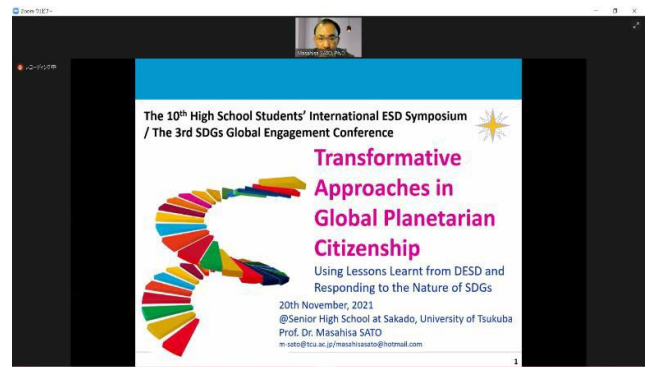
Presenters

Room C	Oral presentation 1 (English) University of the Philippines Rural High School (Group 1) Ummul Quro Senior High school (Indonesia) UPI Laboratory School, Indonesia University of Education Senior High School at Otsuka, University of Tsukuba
Room D	Oral presentation 2 (English) Forestry Vocational High School Republic of Indonesia Kornita Senior High School, Bogor Agricultural University (Indonesia) Kasetsart University Laboratory School (Thailand) University of the Philippines Rural High School (Group 2)
Room F	課題研究発表 筑波大学附属坂戸高等学校「This is ME. LGBTQ に関するソーシャルアクション」 筑波大学附属坂戸高等学校「ばあばとじいじ：高齢者の孤食について」 東京学芸大学附属国際中等教育学校「プラスチック製品の代用商品の開発」 筑波大学附属坂戸高等学校「運動量増やし隊：子供の体力低下について」
Room G	課題研究発表 筑波大学附属坂戸高等学校「サステナブルツールズム実施拡大をめざす」 筑波大学附属坂戸高等学校「開発途上国における人材育成の課題と展望」 東京学芸大学附属国際中等教育学校 「エシカル消費の形骸化から脱却するために求められる消費者像」 筑波大学附属坂戸高等学校 「東日本大震災以前と現在の防災教育について 小学校教育に着目して」
Room I	課題研究発表「農業×高校生—愛媛大附属・水戸農・筑坂コラボ企画—」 農業の専門科目を開講する高校による課題研究発表。 筑波大学附属坂戸高等学校 愛媛大学附属高等学校 茨城県立水戸農業高等学校

大会の様子



司会生徒（筑波大学附属坂戸高等学校）



基調講演（佐藤教授）



分科会（筑波大学附属坂戸高等学校）

参加者の感想（筑波大学附属視覚特別支援学校高等部の生徒より）

1. ESD シンポジウムに参加しての全体的な感想
2. 参加してよかったこと
(特にどの発表が良かったか、またその発表が私の学習にどう役立ったかを書いてください)
3. 参加して困ったこと
4. オンラインで不便だったこと
5. 今度はこんなテーマの発表を聞いてみたい、もしくは今度私はこのテーマで発表してみたいこと
6. その他、気づいたこと、改善してほしいこと等

【高校生の感想】

1. 私は以前から社会問題や SDGs といったものに興味があり、今回 ESD シンポジウムを視聴しました。参加したことで、様々な社会問題は、これからの未来を作っていく私たち10代にとって決して遠く離れたものではないことを再確認し、これらの諸問題に対する興味が強くなりました。前半の佐藤真久先生のスピーチでは、「社会を変えるのではなく、1人1人が変わっていく」というお話が印象に残っています。私もその「1人」として、できることを見つけたいです。このイベントに参加したことが、私にとっては新しい知識を得て、視野を広げることだったので、「変わる」ことにつながったように思います。
後半の分科会は、C のオーラルプレゼンテーションを視聴しました。自分の同世代がこのような場で意見を表明しているのを聞いて大きな刺激になりました。私も一つのことを探究しそれを誰かに伝えたいと思いました。
全体を通して、私も興味のある分野を探究し、他言語運用能力を高め、世界に情報を発信できるようになりたいです。
2. 私は C のオーラルプレゼンテーションを視聴していました。特に、筑波大学附属高等学校の3名の方のプレゼンテーションが印象に残っています。3名の方は高齢者を支えるロボットについてプレゼンテーションをしていました。近年、製品の製造や障害のある人のサポートなど、様々な分野においてロボットが注目されています。その中で、日本の高齢者数の増加にあわせてケアするロボットに注目しているところに興味を持ちました。ロボットの種類だけではなく、コミュニケーションのあり方や人間の仕事についても話していて、ロボットと私たちがともに生活する未来を考えることができました。
3. 特にありません。
4. 特にありません。
5. 特にありません。
6. プレゼンテーションの大きなテーマを事前に知れると、少しそれに関する情報が集められるので、より考えながら聞くことができると思いました。

【教員の感想】

1. Global issues に対して、10 代の生徒たちが 2030 年までにどう考え、action を起こすのか（起こしているのか）、若い人たちの熱い想いや考えを共有できるシンポジウムでした。Keynote Speech にあったように MDGs の時代では、発展途上国における諸課題の解決、そこから SDGs では発展途上国も先進国もみんな、全世界で諸課題を「複合的に」考え、解決に向けて行動するのが今の時代です。本校を含む学校現場で、教科・領域を問わず広く横断的に、SDGs の取り組みについて積極的に考えていかなければならないと改めて感じましたし、今後の本校の国際教育拠点として、視覚障害教育と SDGs の取り組みを特色の 1 つとして展開と発信をしなければならないと思いました。
2. 分科会 C と D に参加しました。どの発表も本当に素晴らしく、中には高校生がやっているとは思えないほどの実験研究と SDGs に関する発表があり、レベルの高さに驚きました。（特に、University of the Philippines Rural High School と、Kasetsart University Laboratory School のご発表）
また Q & A の時間でも、生徒のみなさんの質問の多さとそれに対して、発表者が適切にご自身の思いや考えを含めて真摯に答えられていることがとても良かったです。特に、分科会 C の附属高校の生徒さんの Q & A の中で、発表者が AI やロボットの発展により、AI やロボットが人間に変わってできること、人間でしかできないことに対して、思いを語られていました。Society 5.0 を意識した生徒さんご自身のお考えを述べられていたところが面白かったです。

VII 幹事管理機関としての活動の報告

1 WWL コンソーシアム構築支援事業・SGH ネットワーク連絡協議会の開催

令和3年6月30日(水)に「令和3年度 WWL コンソーシアム構築支援事業・SGH ネットワーク連絡協議会」(文部科学省・筑波大学主催)が、オンラインで開催され、WWL 事業の28拠点の管理機関・拠点校及びSGH ネットワーク参加校91校が参加し、WWL 事業企画評価会議協力者とともに活動事例共有や意見交換を行った。その概要は以下のとおり。

【プログラム】

午前の部(10:00～12:20)

時間	内容	司会	発表者・発言者
10:00	開会	文 部 科 学 省	文部科学省
10:00-10:03 (3 分)	WWL 企画評価会議代表挨拶		松 本 茂 WWL コンソーシアム構築支援 事業企画評価会議副座長(東京国 際大学言語コミュニケーション 学部教授)
10:03-10:20 (17 分)	WWL コンソーシアム構築支援事業に関する事務局説明(カリキュラム開発拠点校からの質問に対する回答含む)		文部科学省参事官(高等学校担当)付
10:20-10:40 (20 分)	WWL 取組発表①(令和元年度指定校) 表題: 国際会議実施に係るプロセスで苦労した点や工夫点について ☆10 分/拠点×2 拠点	筑 波 大 学	・ 筑波大学附属坂戸高等学校 ・ 渋谷教育学園渋谷高等学校
10:40-11:00 (20 分)	WWL 取組発表②(令和2年度指定校) 表題: 高大連携の取組に係るプロセスで苦労した点や工夫点について ☆10 分/拠点×2 拠点		・ 広島大学附属福山中・高等学校 ・ 宮崎県立宮崎大宮高等学校
11:00-11:40 (40 分)	意見交換① 表題: 国際会議実施に係るプロセスで苦労した点や工夫点について 観点: WWL の取組発表①に対し、これまでの経験を踏まえたアドバイス・コメントを行う ☆進行の流れ 1. 5 拠点より R1 発表校へのコメント(3 分/拠点×5 拠点) 2. 企画評価会議委員より R1 発表校へのコメント(2 分×4 名) 3. WWL 取組発表①の発表校より上記1.2.に対するコメント(2 分/拠点×2 発表校) 4. 事前提出質問に関する回答		・ 静岡県立三島北高等学校 ・ 立命館宇治高等学校 ・ 神戸市立葺合高等学校 ・ 長野県上田高等学校 ・ 同志社国際高等学校 ・ 筑波大学附属坂戸高等学校 ・ 渋谷教育学園渋谷高等学校

11:40-12:20 (40 分)	意見交換② 表題：高大連携の取組に係るプロセスで苦労した点や工夫点について 観点：WWL の取組発表②に対し、これまでの経験を踏まえたアドバイス・コメントを行う ☆進行の流れ 1. 6 拠点より R2 発表校へのコメント (3 分/拠点×6 拠点) 2. 企画評価会議委員より R2 発表校へのコメント (2 分×4 名) 3. WWL 取組発表②の発表校より上記 1. 2. に対するコメント(2 分/拠点×2 発表校) 4. 事前提出質問に関する回答		・金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 ・関西学院高等部 ・京都府立鳥羽高等学校 ・大阪教育大学附属高等学校平野校舎 ・愛媛大学附属高等学校 ・長崎県立長崎東中学校・長崎東高等学校 ・広島大学附属福山中・高等学校 ・宮崎県立宮崎大宮高等学校
-----------------------	--	--	---

午後の部 (14:00～16:20)

時間	内容	司会	発表者
14:00-14:30 (30 分)	WWL 取組発表③ (令和 3 年度指定校) 表題：これからの取り組み内容 ☆5 分/拠点×6 拠点		・北海学園札幌高等学校 ・新潟県立三条高等学校 ・愛知県立千種高等学校 ・名古屋大学教育学部附属中・高等学校 ・京都先端科学大学附属高等学校 ・奈良県立国際高等学校
14:30-14:55 (25 分)	意見交換③-1 (令和元年度指定校) 表題：これからの取り組み内容 観点：WWL の取組発表③の前半の 3 発表に対し、これまでの経験を踏まえたアドバイス・コメントを行う ☆進行の流れ 1. 3 拠点より R3 発表校へのコメント (3 分/拠点×3 拠点) 2. 企画評価会議委員より R3 発表校へのコメント (3 分×2 名) 3. WWL 取組発表③の発表校より上記1. 2. に対するコメント (2 分/拠点×R3発表校(うち 3 校))	筑波大学	・東京都立南多摩中等教育学校 ・大阪府立北野高等学校 ・広島県立広島国泰寺高等学校 ・北海学園札幌高等学校 ・新潟県立三条高等学校 ・愛知県立千種高等学校

14:55-15:20 (25 分)	意見交換③-2 (令和2年度指定校) 表題: これからの取り組み内容 観点: WWL の取組発表③の後半の 3 発表 に対し、これまでの経験を踏まえたアドバイス・コメントを行う ☆進行の流れ 1. 4 拠点より R3 発表校へのコメント (3 分/拠点×4 拠点) 2. 企画評価会議委員より R3 発表校へのコメント (2 分×3 名) 3. WWL 取組発表③の発表校より上記1. 2. に対するコメント (2 分/拠点×R3発表校(残り 3 校)) 4. 事前提出質問に関する回答		・富士見丘高等学校 ・岡山県立岡山操山中学校・高等学校 ・中村学園女子高等学校 ・熊本県立熊本高等学校 ・名古屋大学教育学部附属中・高等学校 ・京都先端科学大学附属高等学校 ・奈良県立国際高等学校
15:20-15:40 (20 分)	SGH の取組発表 (SGH ネットワーク校) 表題: テーマ設定→課題研究→発表資料への落とし込みのプロセスでの苦労した点や工夫点について ☆4 拠点×5 分		・埼玉県立浦和第一女子高等学校 ・創価高等学校 ・大阪府立三国丘高等学校 ・高槻高等学校・中学校
15:40-15:45 (5 分)	幹事管理機関挨拶		筑波大学副学長・附属学校教育局 教育長 溝上 智恵子
15:45-15:50	休憩	—	
15:50-16:00 (10 分)	海外留学支援制度(学部学位取得型)等施策について	文部科学省	文部科学省 高等教育局学生・留学生課留学生交流室 外国留学係長 是永 寛志
16:00-16:10 (10 分)	トビタテ! 留学 JAPAN の高校生向け施策 (#せかい部) について		文部科学省 官民協働海外留学 創出プロジェクト 広報担当 西川 朋子
16:10-16:20 (10 分)	高校生の国際交流の促進について		文部科学省 総合教育政策局 国際教育課 国際理解教育専門官 濱部 威一郎
16:20	閉会		文部科学省 参事官(高等学校担当)付

【発表校および発表テーマ】

◇ WWL の取組発表①（令和元年度指定校）

表題：国際会議実施に係るプロセスで苦労した点や工夫点について

発表校	テーマ
筑波大学附属坂戸高等学校	国際会議の成功は、日ごろからのネットワーキングに依存する
渋谷教育学園渋谷中学高等学校	SOLA21-学びのオリンピック-開催にむけた生徒主体の取り組みについて～生徒たちの成長を支援する国際会議の在り方とは～

◇ WWL の取組発表②（令和2年度指定校）

表題：高大連携の取組に係るプロセスで苦労した点や工夫について

発表校	テーマ
広島大学附属福山中・高等学校	広島大学における高大連携や先取り履修の取り組みについて
宮崎県立宮崎大宮高等学校	高大協創

◇ WWL の取組発表③（令和3年度指定校）

表題：これからの取り組み内容

発表校	テーマ
北海学園札幌高等学校	Snow Crystal Project in HOKKAIDO
新潟県立三条高等学校	希望に満ちた未来を創るリーダー育成システムの構築 ～地場産業の町・日本の穀倉地帯からSDGs達成を目指す～
愛知県立千種高等学校	次世代型イノベティブ・グローバルリーダーの育成 ～「愛知の力」を原動力に～
名古屋大学教育学部附属中・高等学校	Society 5.0 をリードするコンソーシアム TOKAI の構築 ～STEAM for SDGs We are the World～
京都先端科学大学附属高等学校	世界協働のプラットフォーム構築に向けて
奈良県立国際高等学校	最古の国際都市奈良から発信 ～持続可能な社会に向けて～

◇ SGH の取組発表（SGH ネットワーク参加校）

表題：テーマ設定→課題研究→発表資料への落とし込みのプロセスでの苦労した点や工夫点について

発表校	テーマ
埼玉県立浦和第一女子高等学校	浦和一女における課題研究の取組
創価高等学校	海外核廃絶教育プログラムを利用した探究活動
大阪府立三国丘高等学校	課題研究プロセスの工夫点
高槻高等学校・中学校	コロナ禍における課題探究の実践について

2 全国高校生フォーラムの開催

令和3年12月19日（日）に「2021年度WWLコンソーシアム構築支援事業およびスーパーグローバルハイスクール（SGH）ネットワーク全国高校生フォーラム」

（文部科学省・筑波大学主催）がオンラインで開催され、令和元年度WWL25校・令和2年度WWL24校・令和3年度WWL9校・SGHネットワーク62校の計120校の生徒及び関係者約500名が参加した。

本フォーラムは、SGHの高校生が参加した平成29年度および平成30年度、新たにWWLコンソーシアム構築支援事業及び地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）の高校生も加わった令和元年度（平成31年度）、WWLおよびSGH最終年度の高校生が参加した令和2年度につづき、5回目の開催となり、全国規模で開催される国内で最大規模の高校生フォーラムとなっている。

本年度は、SGHネットワークの立ち上げ初年度となり、WWL事業やSGHネットワーク参加校の高校生がオンラインにより一堂に会し、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案等を話し合うとともに、各学校のプレゼンテーションについてコメント等で意見交換を行った。

当日のプログラムとしては、開会式、プレゼンテーション、参加生徒交流会（テーマ別分科会）、文部科学省施策説明、受賞校の発表、講評、閉会式の構成（13:00-17:30）で行われた。

◇ 開催日時 12月19日（日）13:00～17:30

◇ 開催方法 Zoom ミーティングによるオンライン開催

◇ 全体プログラム



13:00～13:07	開会式・全体説明
13:08～15:04	プレゼンテーション
15:05～15:15	休憩
15:15～16:35	生徒交流会（テーマ別分科会）
16:36～16:41	文部科学省施策説明（トビタテ！留学JAPAN）
16:42～16:50	休憩
16:50～17:30	講評・受賞校コメント・閉会式 各賞の発表・受賞校コメント 生徒投票賞 審査委員長特別賞 審査委員長賞 文部科学大臣賞 講評 総評 閉会式

令和 3 年度 全国高校生フォーラム 生徒交流会（オンライン） 生徒用資料

1. テーマ別生徒分科会（オンライン）について

（1）ねらい

- ・国際的な課題意識をもった生徒が集まり、SDGs の 17 目標に関するディスカッションを通して、他校の生徒や留学生とつながり、グローバルな視点を身に着け、今後の研究の糧となるようなきっかけづくりをする。
- ・地球規模の課題についてのグローバルな視点を活かし、当事者として地域や社会にどう貢献するかを考えるきっかけづくりをする。
- ・以上について、英語で分かりやすく説明し、さらに国際社会で積極的に議論する力を養う。

（2）テーマ別分科会の設定

SDGs の 17 目標を下記のように 4 つの大テーマに設定し、各大テーマにつき 2～3 の分科会に分ける。

【A：格差のない社会をめざして】→分科会 A-1(14 校)、A-2(13 校)

①貧困をなくそう、②飢餓をゼロに、③すべての人に健康と福祉を、⑤ジェンダー平等を実現しよう

【B：自然環境と生活】→ 分科会 B-1(13 校)、B-2(12 校)

⑥安全な水とトイレを世界中に、⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに、

⑬気候変動に具体的な対策を、⑭海の豊かさを、⑮陸の豊かさを守ろう

【C：社会的環境と生活】→ 分科会 C-1(10 校)、分科会 C-2(9 校)、分科会 C-3(11 校)

④質の高い教育をみんなに、⑧働きがいも経済成長も、⑩人や国の不平等をなくそう、

⑯平和と公平をすべての人に

【D：持続可能な産業と開発】→ 分科会 D-1(11 校)、D-2 (11 校)、D-3 (13 校)

⑨産業と技術革新の基盤をつくろう、⑪住み続けられるまちづくりを、

⑫つくる責任つかう責任、⑰パートナーシップで目標を達成しよう

（3）内容

テーマ別分科会では、ラウンド 1～3 において発言および討論を行う。

【ラウンド 1】問題提起と分析（プレゼンテーションのテーマを軸に意見交換 約 25 分）

- ①（**高校生の発言**）プレゼンテーションのテーマを軸に、「国際的な視点で解決しなければならない重要な課題は何か？」、「そのための解決策として考えられることは何か？」について、情報および意見を交換する。

※ 各学校のプレゼンテーションのテーマは 11 月下旬に通知します。

【ラウンド 2】若い研究者との意見交換（TA（地球規模課題に取り組む大学生）との質疑応答 約 20 分）

- ②（**TA の発言**）TA がまず、「なぜ、現在の研究分野に取り組もうと思ったのか？」、「なぜ、日本（筑波大学）で学ぼうと思ったのか？」、「母国と日本の共通点と相違点は何か？」等を発言する。（約 5 分）
- ③（**質疑応答**）高校生が TA に自由に質問し、TA が先輩としてアドバイスする。（約 15 分）

【ラウンド 3】課題解決へ向かって（約 25 分）

- ④（**自由討議→提言**）グローバルな視点から身近な課題にも目を向け、「解決のために当事者としてどう取り組むか？」、「将来、どのように地域や世界に貢献したいか？」、「いま、高校生としてできることは何か？」を自由に討議する。分科会として提言できる内容があれば、それをまとめる。

(4) テーマ別分科会の進め方

所要時間：80分（15:15～16:35）

参加校数：各分科会 10～14校（アジアの架け橋事業の留学生含む）

タイムスケジュール

時刻	分科会の内容	
15:10	アドバイザーの先生とTAの入室	
15:15	分科会内容の説明（約10分）	
司会進行	TA	参加校をPC上での確認（出欠点呼なし）、自己紹介（簡単に）
内容説明	アドバイザーの先生	・自己紹介（所属と研究分野を含めて） ・テーマ別分科会の「(1)ねらい」の確認 ・分科会の進め方（3つのラウンド構成）
15:25	ラウンド1：問題提起と分析（約25分）	
司会進行	TA	各学校の指名→生徒発表後にアドバイザーへ→（繰り返す）→終了
生徒発表	各学校の生徒 （代表のアカウントで）	・「国際的な視点で解決しなければならない重要な課題は何か？」 ・「そのための解決策として考えられることは何か？」 （参考）発表テーマが類似している学校は発言しやすい
アドバイス	アドバイザーの先生	各校からの発言への助言と終了時のまとめ
15:50	ラウンド2：若い研究者との意見交換（約20分）	
司会進行	アドバイザーの先生	TAの発言→補足→質疑応答（各アカウントの生徒）→随時助言
TA発言	TA	・「なぜ、現在の研究分野に取り組もうと思ったのか？」 ・「なぜ、日本（筑波大学）で学ぼうと思ったのか？」 ・「母国と日本の共通点と相違点は何か？」など
質疑応答	各アカウントの生徒	・TAへの質問
アドバイス	アドバイザーの先生	TAの発言の補足、質疑応答のまとめ
16:10	ラウンド3：課題解決へ向かって（約25分）	
司会進行	アドバイザーとTA	各アカウントの指名→生徒の発言→アドバイザーの助言を繰り返す
生徒発表	各アカウントの生徒	・「解決のために当事者としてどう取り組むか？」 ・「将来、どのように地域や世界に貢献したいか？」 ・「いま、高校生としてできることは何か？」
まとめ	アドバイザー	高校生からの提言のまとめ
16:35	終了→全体会へ	

(5) ポイント

- ・事前に同じ分科会に参加する高校のプレゼン動画を視聴し、当日は分科会参加校の発表資料を手元に用意する。

※ 発表データの閲覧 https://b-wwl.jp/forum2021_all/

- ・活発な議論となるよう、積極的に発言する。同時に、全員が議論に参加できるように、英語で分かりやすくゆっくりと発言するように心がける。
- ・ラウンド1では、学校ごとに発言する。（複数のアカウントがある場合は代表のアカウントから発言する）
- ・ラウンド2では、アカウントごとに発言する。地球規模課題や生命環境等に取り組む大学生（留学生）の発言に対して、いただいた興味や関心について積極的に質問する。
- ・ラウンド3では、アカウントごとに発言する。問題解決の当事者となり、「私たちに何ができるか」「将来、どう貢献したいか」の観点から、実現可能性を十分に考えて分科会としての提言を協力してまとめる。

(6) その他

- ・留学生の皆さんも、他の生徒と同じように、自身の経験や関心にもとづきながら、積極的に発言する。
- ・視聴者枠として、学校外の関係者が視聴している。

Declaration of A-1, All Japan High School Forum 2021

PREAMBLE

We, Japanese and international students of schools of Worldwide Learning Consortium (WWL) and Super Global High School Network (SGH), assembled to discuss global issues and to propose solutions to them in All Japan High School Forum 2021, organized by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan and University of Tsukuba. We recognized the necessity to understand a variety of issues, and communication with other students in order to solve global issues. Discussion Group A-1 shared matters related to "Reducing Disparities," which is related to SDGs Goals 1 "End poverty in all its forms everywhere," 2 "End hunger, achieve food security and improved nutrition, and promote sustainable agriculture", 3 "Ensure healthy lives and promote well-being for all at all ages" and 5 "Achieve gender equality and empower all women and girls" and discussed possible solutions.

As custodians of the future, we hereby declare:

Article 1

All gender should be respected to realize human rights, and gender diversity should be included in education.

Article 2

Education since the birth to cultivate the ability to think by themselves is an important tool to solve social issues.

Article 3

The relationship between the environment and humans needs to be solved to save our future.

Article 4

Local, governmental and global partnership is necessary to reduce disparities.

Article 5

When solutions to global issues are discussed, their possible limitations also need to be recognized to propose realistic solutions. After we propose realistic solution, we also need to have unrealistic solution.

Article 6

Believe ourselves to change the world.

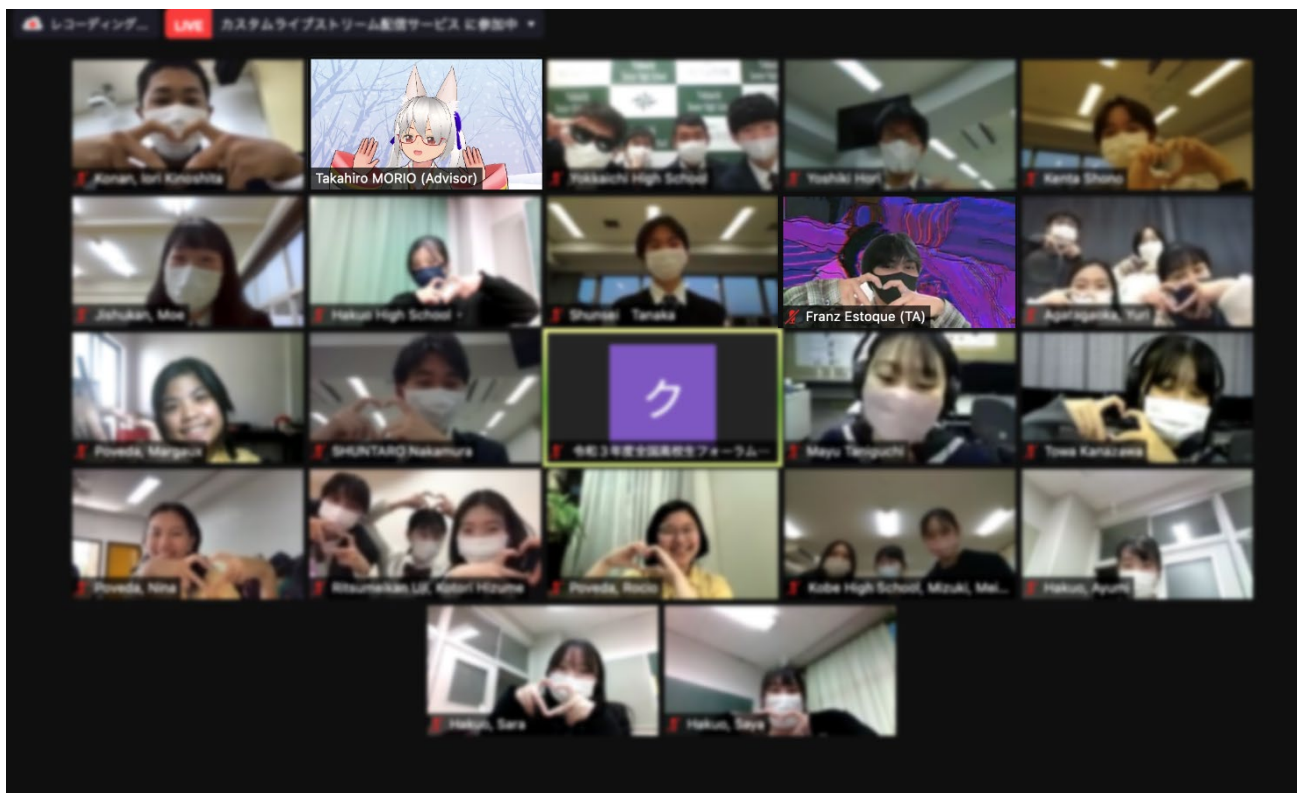
【テーマ別分科会一覧】

分科会	アドバイザー／TA	学校 ID	学 校
A (27)	A1 (14)		
		W201902-1	東京都立南多摩中等教育学校 Tokyo Metropolitan Minamitama Secondary Education School
		W201905-2	静岡県立静岡高等学校 Shizuoka Prefectural Shizuoka Senior High School
		W202005-1	大阪教育大学附属高等学校平野校舎 Hirano Senior High School Attached To Osaka Kyoiku University
		W202006-1	岡山県立岡山操山中学校・高等学校 Okayama Prefectural Okayama Sozan Junior and Senior High School
		W202006-*	アジア留学生（マレーシア：岡山操山中学校・高等学校） Asia Kakehashi Students(Okayama Sozan Junior and Senior High School)
		W202006-4	岡山県立玉島高等学校 Okayama Prefectural Tamashima High School
		W202103-1	愛知県立千種高等学校 Aichi Prefectural Chigusa High School
		SGHN009	盛岡中央高等学校 Morioka Chuo high school
		SGHN016	栃木県立佐野高等学校 Tochigi Prefectural Sano High school
		SGHN035	順天高等学校 JUNTEN SENIOR HIGH SCHOOL
		SGHN041	神奈川学園中学・高等学校 Kanagawa Gakuen Junior & Senior High School
		SGHN055	愛知県立津島高等学校 Aichi Prefectural Tsushima Senior High School
		SGHN081	清教学園高等学校 Seikyo Gakuen Senior High School
		SGHN096	岡山学芸館高等学校 OKAYAMA GAKUGEIKAN HIGH SCHOOL
	A2 (13)	W201902-3	東京都立日比谷高等学校 Tokyo Metropolitan Hibiya High School
		W201907-1	大阪府立北野高等学校 Osaka Prefectural Kitano Senior High School
		W202002-1	長野県上田高等学校 Nagano Prefectural Ueda Senior High School
		W202006-2	岡山県立岡山一宮高等学校 OKAYAMA PREFECTURAL OKAYAMA ICHINOMIYA SENIOR HIGH SCHOOL
		W202101-1	北海学園札幌高等学校 Hokkai-Gakuen Sapporo High School
		SGHN014	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 Fukushima Prefectural Futaba Future School
		SGHN034	大妻中野中学校・高等学校 Otsuma Nakano Junior and Senior High School
		SGHN038	神奈川県立横浜国際高等学校 Kanagawa Prefectural Yokohama Senior High School of International Studies
		SGHN047	福井県立高志高等学校 Fukui Prefectural Koshi Senior High School
		SGHN080	高槻高等学校・中学校 Takatsuki Senior and Junior High School
		SGHN080-*	アジア留学生（インドネシア：高槻高等学校・中学校） Asia Kakehashi Students(Takatsuki Senior and Junior High School)
		SGHN092	和歌山信愛中学校高等学校 Wakayama shin-ai High School
		SGHN102	高知県立高知西高等学校（高知県立高知国際高等学校） Kochi Nishi High School

分科会	アドバイザー／TA	学校 ID	学 校
B (25)	B1 (13)		
		W201901-1	筑波大学附属坂戸高等学校 Senior High School at Sakado, University of Tsukuba
		W201901-3	カセサート大学附属高等学校（タイ） Kasetsart University Laboratory School
		W201904-2	石川県立七尾高等学校 Ishikawa Prefectural Nanao senior high school
		W201905-3	静岡市立高等学校 Shizuoka Municipal High School
		W202006-3	岡山県立倉敷天城中学校・高等学校 Okayama Prefectural Kurashiki Junior and Senior High School
		W202012-1	宮崎県立宮崎大宮高等学校 Miyazaki Omiya Senior High School
		W202105-1	京都先端科学大学附属中学校高等学校 Kyoto University of Advanced Science Junior & Senior High School
		SGHN007	札幌日本大学高等学校 Sapporo Nihon University Junior and Senior High School
		SGHN015	東洋大学附属牛久中学校・高等学校 Toyo University Ushiku senior High School
		SGHN084	関西創価高等学校 Kansai Soka High School
		SGHN091	和歌山県立日高高等学校 Wakayama Prefectural Hidaka High School
		SGHN093	鳥取県立鳥取西高等学校 Tottori Nishi High School
		SGHN098	広島県立広島中学校・広島高等学校 Hiroshima Prefectural Hiroshima Senior High School
	B2 (12)	W201901-4	フィリピン大学附属ルーラル高等学校（フィリピン） University of the Philippines Rural High School
		W202001-1	富士見丘高等学校 Fujimigaoka High School for Girls
		W202002-3	長野県須坂高等学校 Nagano Prefectural Suzaka Senior High School
		W202011-2	佐賀県立佐賀西高等学校 Saga prefectural Saga Nishi senior high school
		W202102-1	新潟県立三条高等学校 Niigata Prefectural Sanjo Senior High School
		W202102-2	新潟県立高田高等学校 Niigata Prefectural Takada Senior High School
		W202106-1	奈良県立国際高等学校 Nara Prefectural KOKUSAI High School
		SGHN012	仙台白百合学園中学・高等学校 SENDAI SHIRAYURI GAKUEN Junior High School & High School
		SGHN017	群馬県立中央中等教育学校 Gunma Prefectural Chuo Secondary School
		SGHN028	東京学芸大学附属国際中等教育学校 Tokyo Gakugei University International Secondary School
		SGHN095	岡山県立岡山城東高等学校 Okayama Joto High School
		SGHN108	熊本県立水俣高等学校 Minamata High School

分科会	アドバイザー／TA	学校 ID	学 校
C (30)	C1 (10)	◇アドバイザー 森尾 貴広 MORIO Takahiro (国際局国際室・教授)	W201902-2 東京都立白鷗高等学校・附属中学校 Tokyo Metropolitan Hakuo Junior and Senior High School
			W201903-1 渋谷教育学園渋谷高等学校 Shibuya Junior & Senior High School
			W201906-1 立命館宇治高等学校 Ritsumeikan Uji High School
			W201909-2 兵庫県立神戸高等学校 Kobe High School
			W202002-2 長野県松本県ヶ丘高等学校 Nagano Prefecture Matsumoto Agatagaoka High School
			W202105-3 サン・ペドロ・ポベダ・カレッジ (フィリピン) Saint Pedro Poveda College
		SGHN029	佼成学園女子中学高等学校 Kosei Gakuen Girls' High School
		SGHN054	愛知県立時習館高等学校 Aichi Prefectural Jishukan High School
		SGHN060	三重県立四日市高等学校 Mie Prefectural Yokkaichi High School
		SGHN089	甲南高等学校・中学校 Konan Boys' High School
	C2 (9)	◇アドバイザー ヴァンバーレン・ルート Vanbaelen Ruth (人文社会系・准教授)	W201902-5 東京都立大泉高等学校・附属中学校 Tokyo Metropolitan Oizumi High School
			W201908-3 アテネオ デ マニラ 高校 (フィリピン) Ateneo de Manila University Senior High School
			W201909-1 関西学院高等部 Kwansei Gakuin Senior High School
		SGHN020	埼玉県立浦和第一女子高等学校 Urawa Girls' Upper Secondary School
		SGHN036	啓明学園中学校高等学校 Keimei Gakuen Junior and Senior High School
		SGHN044	新潟県立国際情報高等学校 Niigata Prefectural Kokusai Joho High School
		SGHN066	京都市立西京高等学校 Kyoto Municipal Saikyo High School
		SGHN085	兵庫県立兵庫高等学校 Hyogo Prefectural Hyogo Senior High School
	C3 (11)	◇TA Hyman Rachel Harriet (BPGI)	SGHN097 金光学園中学・高等学校 Konko Gakuen Junior&Senior High School
		◇アドバイザー 野村 港二 NOMURA Koji (生命環境系・教授)	W201908-1 神戸市立葺合高等学校 Kobe Municipal Fukiai High School
			W202003-1 京都府立鳥羽高等学校 Kyoto Prefectural Toba High School
			W202005-3 神戸大学附属中等教育学校 Kobe University Secondary School
		SGHN011	宮城県気仙沼高等学校 Miyagi Prefecture Kesenuma high school
		SGHN022	千葉県立佐倉高等学校 Sakura High School Chiba Prefecture
		SGHN026	筑波大学附属高等学校 Senior High School at Otsuka, University of Tsukuba
		SGHN037	創価高等学校 Soka Senior High School
		SGHN059	星城高等学校 Seijoh Senior High School
		SGHN077	大阪府立千里高等学校 Osaka Prefectural Senri High School
		SGHN077-*	アジア留学生 (ベトナム：千里高等学校) Asia Kakehashi Students(Osaka Prefectural Senri High School)
		SGHN103	福岡県立鞍手高等学校 Kurate high school

分科会	アドバイザー／TA	学校 ID	学 校
D (35)	D1 (11)		
		W201904-1	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 Kanazawa University Senior High School
		W201910-2	広島県立呉三津田高等学校 Hiroshima Prefectural Kuremitsuta Senior High School
		W202004-1	同志社国際高等学校 Doshisha International High School
		W202010-1	長崎県立長崎東中学校・長崎東高等学校 Nagasaki Prefectural Nagasaki Higashi Junior High School・Nagasaki Higashi High School
		W202012-2	宮崎県立宮崎北高等学校 Miyazaki Prefectural Miyazaki Kita High School
		W202105-2	姫路女学院高等学校 Himeji International School
		SGHN010	宮城県仙台二華中学校・高等学校 Miyagi Prefectural Sendai Nika Junior and Senior High School
		SGHN025	東京工業大学附属科学技術高等学校 Tokyo Tech High School of Science and Technology
		SGHN074	大阪府立泉北高等学校 Osaka Prefectural Semboku Senior High School
		SGHN076	大阪府立豊中高等学校 Osaka Prefectural Toyonaka High School
		SGHN101	愛媛県立宇和島南中等教育学校 Uwajima Minami Secondary School
	D2 (11)	W201905-1	静岡県立三島北高等学校 Shizuoka Prefectural Mishima Kita Senior High School
		W202005-2	大阪教育大学附属高等学校池田校舎 Ikeda Senior High School Attached to Osaka Kyoiku University
		W202007-1	広島大学附属福山中・高等学校 Hiroshima University High School, Fukuyama
		W202011-1	熊本県立熊本高等学校 Kumamoto High School
		W202012-3	宮崎県立宮崎南高等学校 Miyazaki Minami High School
		SGHN008	岩手県立盛岡第一高等学校 Morioka Daiichi High School
		SGHN024	暁星国際高等学校 Gyosei International High School
		SGHN040	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 Yokohama Municipal Yokohama Science Frontier High School
		SGHN075	大阪府立三国丘高等学校 Osaka Prefectural Mikunigaoka Senior High School
		SGHN100	愛媛県立松山東高等学校 Ehime Prefectural Matsuyama Higashi High School
		SGHN111	沖縄県立那覇国際高等学校 Okinawa Prefectural Naha Kokusai Senior High School
	D3 (13)	W201906-2	福岡雙葉高等学校 Fukuoka Futaba High School
		W201907-2	大阪府立天王寺高等学校 Osaka Prefectural Tennoji High School
		W201910-1	広島県立広島国泰寺高等学校 Hiroshima Prefectural Hiroshima Kokutaiji Senior High School
		W202008-1	愛媛大学附属高等学校 EHIME UNIVERSITY SENIOR HIGH SCHOOL
		W202008-*	アジア留学生（フィリピン：愛媛大学附属高等学校） Asia Kakehashi Students(EHIME UNIVERSITY SENIOR HIGH SCHOOL)
		W202009-1	中村学園女子高等学校 Nakamura Gakuen Girls' High School
		W202104-1	名古屋大学教育学部附属中・高等学校 Affiliated Upper and Lower secondary Schools, School of Education, Nagoya University
		SGHN003	北海道登別明日中等教育学校 Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School
		SGHN013	秋田県立秋田南高等学校 Akita Prefectural Akita Minami Senior High School
		SGHN039	横浜市立南高等学校・南高等学校附属中学校 Yokohama Minami High School
		SGHN071	立命館高等学校 Ritsumeikan High School
		SGHN078	大阪府立豊中高等学校能勢分校 Osaka Prefectural Toyonaka High School Nose Branch
		SGHN104	明治学園中学校・高等学校 Meiji Gakuen Junior and Senior High School



テーマ別分科会のようす

3 ホームページでの情報発信と共有

WWL 構想の概要や WWL 関係校の情報を掲載し、WWL 関係校から寄せられる活動予定や活動報告等を随時更新して発信することにより、各校の取組情報等の発信を広く行った。アクセス数が多かったのは、「WWL とは」についてと「2021 年度全国高校生フォーラム」についてのページだった。アクセス数は、2021 年度中に 4 万件を超えている。 <https://b-wwl.jp/>



司会生徒 広島国泰寺高等学校